

独逸文法 接続法の詳細

関口存男著 昭和 18 年 9 月 10 日発行
発行所 合資会社 日光書院

序

＊ 本書は、曩[さき]に出した独逸語学講話と同様、先ず雑誌(独逸文化、日光書院発行)で発表したものを改修補追したものであります。ただ前者との根本的相違は、後者が何等単行本を予想する事なく執筆されたものであるに反し、此の接続法の詳細は当初から単行本として纏めるつもりで雑誌に書いていた点にあります。

＊ 接続法の主な問題は、其の形ではなく、むしろ意味用法であります。それ故雑誌で発表する際には、形の事などは一切問題にせず、初歩程度の予備知識を当然の前提として講義を始めました。けれども、愈々[いよいよ]単行本として纏めるとなると、其処に前提されている初歩程度の知識とは抑々[そもそも]如何なる範囲のものを指すかと云う事に対して、最小限度の暗示を試みるが必要になって来ましたので、其処で御覧の通り、第一篇として、私自身の編纂した極く簡単な文法教科書(『初級独逸語文法教程』、三省堂)の中から、接続法の課を抜いて転載し、更に念の為に、形に関する若干の注意を付け加えました。

＊ 講義振りは、御覧の通り少々冗漫でありまして、簡潔な定義による教科書乃至[ない]研究所風の文体を好まれる方々には、ひょっとするとあまり好い感じを与えないかも知れません。それに時々飛んでもない脱線などが頻出します。----けれども、書き具合によって読み具合を之れに合わせて頂くという方法もあるわけで、本書の場合には、独逸語学講話の場合に於けると同様、すらすらと速く呼んで頂きたいと思ひます。冗漫な文体には実は多少わけがあるので、私は之れが最も良心的・学究的方法だと思ひているのです。学問以外の事では、たとえば外交とか社交とか云ったような方面では、多弁は一種の類冠りであり、問題を誤魔化するための最良の手段だそうですが、学問の世界ではむしろ其の反対で、いわゆる簡潔な、言少なくして能く多義を摂し、總持[そうじ]して以て熟読翫味す可き数行の定義なんてものは、正直なところ、ぼろ隠しのための窮余の一策である事が多い。伝えんとする認識に対して、人間本当に自信があったなら、一回や二回の繰り返しで気持ちのおさまるわけがない。もし一回や二回の言い直しで気持ちがおさまるとしたら、それはつまり、たかが一回か二回の言い廻しで気持ちのおさまる程度の事柄でしかなかったに相違ない。----要するに、饒舌の正体には二つの種類があり、問題を誤魔化さんがための饒舌というものもあれば、また問題を本当に究明せんが為の饒舌というものもある。前者は周到な用意の下に巧みに行われるが、後者は端的に且つ不用意の間に行われる。然り而して不用意は真に自信ある者にして初めて敢えてなし得る所の特権であります。

ひどく啖呵を切ってしまいましたが、本当のところそういうわけではありますまいか？

「座談調」なるものに関してもほぼ同様の事が言えます。膝つき合わせた座談では嘘や誤魔化しは絶対に利かない。口を滑らしたら滑らしたで問題ははっきりして来るし、変なところで黙れば黙ったでこれ又、問題は愈々以てはっきりして来る。問題をはっきりさせるのは座談調に限ります。

そういう意味に於いての多弁的座談調でありますから、その多くの欠陥にも拘わらず、良い一面を買って頂きたいと思ひます。

＊ あなたの文法は一たい何に準拠[じゅんきょ]したものか、何を種本にしたのか、と云って問われる事がよくあります。そういう時に、何か斯う相手を威圧して、頭っから信用させてしまうような、横文字の名前をペラペラと三つ四つ挙げられると大変気が利いて聞こえるのかも知れませんが、残念ながら私にはそれが出来ない。私の種本は、行李に一杯分ほど溜まっている汚いノートだけです。ドイツの学者の書いた文法書も持っていない事はないが、何か歴史的な筋道でも疑問になった時とか、或いは一寸した事柄をそそくさと参照する時以外には殆ど参考にしません。それに物を書いている最中に

席を立つという事が非常に嫌いな性分なので、検[しら]べればもっと面白い枝葉も伸びると思う所も、大抵は邪魔くさくて止してしまいます。

そう云ったようなわけで、私の独逸語文法は好い意味に於いても悪い意味に於いても『独創的』です。ところで私は日本人だから、幸いなことには、それが同時に『日本的』という事になる。但し、日本的独逸語文法なんてものがどの程度まで日本精神の現われになるかと云う事は、これはちょっと私にもわからない。自信を以て其処まで持って来たものなら、此の際大いに威張って特筆大書したいところですが、席を立てて書棚まで足を運ぶのが邪魔くさかった為に日本的になってしまったのでは、ちょっとそんな大きな口を利くのも恥ずかしい。---併し、種本は何だとか、何を焼き直したものか、などと云われると断然憤慨せざるを得ません。たとえ学的信望を失墜しても已むを得ない、敢然立って『日本人茲にあり』と云いたくなります。

＊ 此の超非常時に、或いは不要不急とも思われるかも知れない斯うした研究を発表させて貰う多少の根拠としては、先ず此の点以外には大してなさそうに思われます。

昭和 18 年 3 月 末 日

著 者 識

目 次

序	
第一篇	形式を主とする概論
第二篇	意味用法を主とする詳論
第一章	接続詞の本質
第二章	間接話法
第一節	間接話法総論
第二節	間接話法各論[1]
第三節	間接話法各論[2]
第三章	要求話法
第一節	要求話法総論
第二節	要求話法各論
第四章	約束話法
第一節	約束話法総論
第二節	約束話法各論[1]
第三節	約束話法各論[2]
第四節	約束話法各論[3]

索引

第 一 篇

形式を主とする概論

最小限度の予備知識として、まず拙著『初級独逸語文法教程』（三省堂）の一番最後にある接続法に関する三課を転載し、その後に形式に関する若干の補足を添えることと致します。

教科書、殊に初歩の教科書というやつは、一時間机の上に置いてじっと見詰めているものですから、大体まあこんなもので宜しいのです。ただ例題だけは、一題一題とつかまえて学生を散々いじめなければいけません。

接続法とは何ぞや？

注意

先ず独逸語に接続法と称する特殊なる人称変化の存在する事実に対して学習者の注意を喚起し、同時に予め其の用法の一端を窺わしむ。

[1] 所謂間接引用文なるものに於いては接続詞 **dass** を使用する代わりに、其の定形をして接続法と称する特殊の人称変化をなさしむる事多し。接続詞の機能を兼摂する人称変化なるを以て之れを接続法と呼ぶ。

直接引用文：Er sagt : "Ich spreche Deutsch."

間接引用文：Er sagt, er spreche (spräche) Deutsch.

備考：--(1) er spreche 及び er spräche [ä は長綴なり：'ʃ prɛ : ç ə] は共に er spricht に対する接続法なり。両形の間格別意味の相違なし。

備考：--(2) これら接続法形に対して、既習の人称変化(er spricht)を直接法と云う。従来は直「説」法と書せるも、他面間接引用・直接引用等の術語の存するに鑑[かんが]み、煩雑を避けんがため「接」を採用す。

備考：--(3) er spreche は不定法の語幹より派生したる形にして(不定法：sprech-en → sprech-e)之れを**第一式接続法**と呼び、er spräche は過去形の語幹より派生したる形にして(過去：sprach → spräche)之れを**第二式接続法**と呼ぶ。後者は、語形としては過去形と関係あるも、用法としては何ら過去の意を有せざることを銘記すべし。

[2] 間接引用文的接続は必ずしも接続法を以て行うに非ず。接続法は其の単なる一手段なり。

[A] Er glaubt, er spricht (spreche / spräche) Deutsch.

[B] Er glaubt, dass er Deutsch spricht (spreche / spräche).

[C] Er glaubt Deutsch zu sprechen.

接続法の形態

注 意

前には、接続法なるものに、一見余計とも思考さる可き二種の形あることを修得せり。茲には意味・用法の問題は姑[しばら]く之れを措[お]き、先ず語形に関する系統的研究を行う。

『第一式接続法はどんな場合とどんな場合とに用いるか？第二式接続法の意味は如何？両者は意味・用法としてはどういう風に違うか？』等、**形式より出立して用法を問わんとするが如きは、ただ徒[いたず]らに問題を紛糾せしむるに止まり、方法の最善なるものに非ず、言語の実情に添わんがためには、寧[むし]ろ考え方を逆にし、『人生の実際にはこれこれの事を言いたい場合が起こって来る、その時に第一式接続法を用いる』という風に考え、用法より出立して次に其の使用形式を問うべきなり。**此の意味に於いて、意味・用法を次に([5]項以下)詳述するも、茲には仮に之れを全然度外視して形態のみを説く。

[3] 第一式接続法は不定法の語幹に次の如き語尾を加えて造る。

	不定法：sprech-en	
第 接 一 続 式 法	ich sprech-e du sprech-est er sprech-e	wir sprech-en ihr sprech-et sie sprech-en

備考：--(1) 参考のために sprechen の直説法現在の人称変化を挙げれば：

ich spreche	wir sprechen
du sprichst	ihr sprecht
er spricht	sie sprechen

備考：--(2) 第一式接続法形には直説法に於ける如き不規則現象なし。ただ一個 sein のみには-e の語尾を省く：

ich sei	wir seien
du sei(e)st	ihr seiet
er sei	sie seien

例題：次の動詞に就きて、その直説法現在と第一式接続法との人称変化を対照せる表を作れ：

(1) fahren (2) kommen

[4] 第二式接続法は過去形を基礎として造りその造り方に二つの筋路あり：

(A) 不規則なる三要形を有する動詞の第二式接続法は過去形に対して次の如き関係を有す：

三要形	不定法 sprechen	過去 sprach	過去分詞 gesprochen
第二式 接続法	過去を----とすれば、第二式接続法は --"--e		
	ich spräche du spräche-st er spräche		wir spräche-n ihr spräche-t sie spräche-n

備考：--(1) 但し変音し難き幹母音(i, ie)はその儘とす：gehen, ging, gegangen → ginge.----また既に-e 語尾あるものは-e を附せず：wissen, wusste, gewusst → wüsste.

備考：--(2) 第二式接続法には不規則なるものあり。また別形を有するものあり：

三要形	第二式接続法
kennen, kannte, gekannt nennen, nannte, genannt	kennte nennte
stehen, stand, gestanden beginnen, begann, begonnen	stände (stünde) begänne (begönne)

(B) 規則的な三要形を有する動詞の第二式接続法は過去そのものと同形なり：

三要形	不定法 kauf-en	過去 kauf-te	過去分詞 ge-kauf-t
第二式 接続法	ich kaufte du kauftest er kaufte		wir kauften ihr kauftet sie kauften

例題：次の動詞の第二式接続法を問う：1. kommen, kam, gekommen.

----2. schreiben, schrieb, geschrieben. ----3. denken, dachte, gedacht.

----4. warten, wartete, gewartet.

接続法の用法

[5] 間接話法(詳細は既出第 1 項)：間接話法(即ち間接引用文及び類似の文)に於いては、主として第一式接続法を用い、第一式接続法が直説法と同形なる場合にのみ第二式接続法を用いるを以て建前とす。殊に弱変化動詞は然り。

例題：1. Man glaubte früher, der ganze Himmel *drehe* sich um die Erde.

----2. Man glaubte früher, die sämtlichen Himmelskörper *drehten* sich um die Erde.

----3. Die Annahme, der Mensch *stamme* vom Affen, ist nur teilweise richtig.

----4. Die Annahme, die Menschen *stammten* von den Affen, ist nur teilweise richtig.

----5. Ein Kind glaubt, wir Erwachsenen *wüssten* alles, und wir Erwachsenen glauben, ein Kind *wisse* [*wüsste*] nichts : beides ist falsch.

----6. Nur eine Ansicht ist unwahr : die, dass nur eine Ansicht wahr *sei* [Feuchtersleben].

備考：--不規則動詞は、直説法と混同する惧[おそ]れなきに拘わらず、第一式接続法の代わりに第二式接続法を用いる事多し：Wir glauben, ein Kind *wisse*(又は *wüsste*) nichts. Jeder Mensch glaubt, er *sei*(又は *wäre*) der Mittelpunkt der Welt. Er sagte, er *komme* (又は *käme*) morgen.

[6] 要求話法：Der Kaiser *lebe* hoch !

何々は『云々せよ!』『云々せんことを!』の意に接続法を用いることあり、之れを接続法の要求話法的用法という。要求話法に用いる接続法は必ず第一式接続法とす。

例題：1. Das Weib gehorche dem Mann ! ----2. Der Mensch bleibe in seinen glücklichen Tagen standhafter als in seinen unglücklichen. ----3. Gott schütze mich vor meinen Freunden, vor meinen Feinden kann ich mich selbst schützen. ----4. Wer unter euch ohne Sünde ist, der werfe den ersten Stein auf sie ! [Joh. 8, 7.]

[7] 約束話法：Der Hahn denkt : Wenn ich nicht krähte, ginge die Sonne nicht auf.

『仮に若し云々なりとせば、恐らく云々ならん』等の、現実を仮に無視したる假定・決論には、両半共に第二式接続法を用う。之れを接続法の約束話法的用法と謂う。

結論部には助動詞 *würde*(*werden* の第二式接続法)を用いる事多し：

Wenn ich nicht krähte, so *würde* die Sonne nicht aufgehen.

例題：1. Die Luftbewegungen *würden* nicht entstehen, wenn die Oberfläche der Erde überall gleichmäßig erwärmt *wäre*. ----2. Der Mensch *würde* gar keinen Fortschritt machen, wenn ihn nicht die Not zur Arbeit zwänge. ----3. Wenn die Nase der Kleopatra um einige Milimeter kürzer gewesen *wäre*, so hätte die Weltgeschichte einen ganz andern Lauf genommen. ----4. Wenn die Menschen genau *wüssten*, was die einen von den andern reden : es gäbe keine vier Freunde auf der Welt. (Pascal)

備考：--(1) *Wenn* の代わりに定形倒置の構文を用いる事多し：

Klopfte man an die Gräber und fragte die Toten, ob sie wieder auferstehen wollten : sie *würden* mit dem Kopfe schütteln. (Schopenhauer)

備考：--(2) 約束話法はその前提部又は結論部を独立的に用いることあり：

a. *Wäre* ich doch ein Mann !

b. Ich *wäre* Ihnen dann sehr dankbar.

[8] Als ob.....(恰も.....かの如く)の文には接続法を用う：

Sein Schnurrbart sieht aus, *als ob* er aufgeklebt *wäre*.

備考：--(1) *als ob*.....の代わりに単に *als* のみを用いて、次を定形倒置の構造になすことあり：Sein Schnurrbart sieht aus, *als wäre* er aufgeklebt.

備考：--(2) 此の際の接続法は主として第二式なるも、第一式を用いるも可なり。

備考：--(3) *als ob* の代わりに *als wenn* 又は *wie wenn* 等を用いることあり。

例題：1. Die Naturwissenschaft muss alles, was in der Natur geschieht, so erklären, *als ob* es in ihr nur Stoff und Kraft gäbe. ----2. Oft sitzt mitten im Bernstein ein Insekt, *als wäre* es erst vor einigen Sekunden hineingeflogen. ----3. Der Fallschirmspringer trägt Stiefel mit dicken Gummisohlen, denn er kommt auf der Erde mit einer Wucht an, *als spränge* man aus vier Meter Höhe herunter. ----4. Lebe an jedem Tage so, *als ob* es dein letzter sei.

追 補

[1] 第二式接続法の造り方は、第[4]項に述べた通りであるが、その(A)の定義に『不規則なる**三要形**を有する動詞の第二式接続法は過去形に対して次の如き関係を有す』とあるのは、厳密に云うならば、三要形という代わりに**過去形**と云わなければならないところである。そうすると一層厳密になって、たとえば次の[2]の 4 に述べた極く特殊な例外(*mahlen*, *spalten* 等)までも共に含むことになって、非常に便利である。なんならそう教えてもよいが、例外はどうせ例外と教えなければならぬ故、*mahlen* 等の数語のために、常に強調せねばならぬ『三要形』という概念を捨てるのは惜しいと思う。

[2] 過去形が *-e* 語尾を有するものの第二式形に関しては特に次の諸点に注意を要す。

1. 次の数語は、不規則動詞なれども、規則動詞(たとえば *trennen*, *spenden*)と同様の第二式を用う。----*nännte*, *wändte*, 等は用いず。

三 要 形			第二式接続法
<i>nennen</i>	<i>nannte</i>	<i>genannt</i>	<i>nennte</i>
<i>brennen</i>	<i>brannte</i>	<i>gebrannt</i>	<i>brennte</i>
<i>rennen</i>	<i>rannte</i>	<i>gerannt</i>	<i>rennte</i>
<i>kennen</i>	<i>kannte</i>	<i>gekannt</i>	<i>kennte</i>
<i>wenden</i>	<i>wandte (wendete)</i>	<i>gewandt (gewendet)</i>	<i>wendete</i>
<i>senden</i>	<i>sandte (sendete)</i>	<i>gesandt (gesendet)</i>	<i>sendete</i>

2. いわゆる混合変化は凡て上述の例外をなすものと思惟す可からず。以上の外はすべて不規則動詞として扱い、第[4]項の(A)に準じて第二式を造る。

三 要 形			第二式接続法
<i>bringen</i>	<i>brachte</i>	<i>gebracht</i>	<i>brächte</i>
<i>denken</i>	<i>dachte</i>	<i>gedacht</i>	<i>dächte</i>
<i>wissen</i>	<i>wusste</i>	<i>gewusst</i>	<i>wüsste</i>
<i>haben</i>	<i>hatte</i>	<i>gehabt</i>	<i>hätte</i>
<i>werden</i>	<i>wurde (ward)</i>	<i>geworden</i>	<i>würde</i>

3. 話法助動詞は、殊に厳密に第[4]項の(A)と(B)とのいずれに属するやを

判断する必要あり。即ち **müssen** は過去、過去分詞に於いて **ü** を **u** に変ずるが故に「不規則」の部に入り、**sollen** は完全に規則的として取り扱うが如し。

規則動詞として扱うもの			
三 要 形			第二式接続法
wollen	wollte	gewollt	wollte (wöllte に非ず！)
sollen	sollte	gesollt	sollte (söllte に非ず！)

不規則動詞として扱うもの			
三 要 形			第二式接続法
können	konnte	gekonnt	könnte (konnte に非ず！)
müssen	musste	gemusst	müsste (musste に非ず！)
dürfen	durfte	gedurft	dürfte (durfte に非ず！)

4. 過去分詞にのみ強変化形を有するものは規則動詞として取り扱う。
(これらは、**malen** と混同の虞[おそ]れある **mahlen** を除いては、
すべて **gespalten** 等の過去分詞を併有するが故に、全然規則動詞
として扱うも可なるものなり。)

三 要 形			第二式
mahlen	mahlte	gemahlen	mahlte
salzen	salzte	gesalzen	salzte
falten	faltete	gefalten	faltete
spalten	spaltete	gespalten	spaltete
schroten	schrotete	geschroten	schrotete

- [3] 接続法第二式は、動ともすれば、別語又は同語の直説法現在第一人称と混同される虞れがある。

不定法	過去	第二式接続法	直説法現在一人称
fahren	fuhr	führe	ich führe (führen)
tragen	trug	trüge	ich trüge (trägen)
dringen	drang	dränge	ich dränge (drängen)
gebären	gebar	gebäre	ich gebäre (同)
scheinen	schien	schiene	ich schiene (schienen)
scheiten	schalt	schälte	ich schälte (schälten)
schlafen	schlief	schliefe	ich schliefe (schlafen)
schwären	schwor	schwöre	ich schwöre (schwören)
sehen	sah	sähe	ich säe (säen)
stehlen	stahl	stähle	ich stähle (stählen)
trinken	trank	tränke	ich tränke (tränken)
verbergen	verbarg	verbürge	ich verbürge (verbürgen)
verzeihen	verzieh	verziehe	ich verziehe (verziehen)
zeihen	zieh	ziehe	ich ziehe (ziehen)
zwingen	zwang	zwänge	ich zwänge (zwingen)

練 習 問 題

肉太文字に印刷した第二式接続法に対する不定法を云え：

1. Was **hälft's** ihm auch, wenn mir für ihn im Herzen. Was **redete**----Ich muss ihn dennoch töten. (*Schiller : Wallenstein*)
2. Und **wärfst** du die Krone selber hinein, Und **sprächst** : Wer mir bringet die Kron', er soll sie tragen und König sein---- (*Schiller : Der Taucher*)
3. Preis **gewännest** du und Dank von allem Volke der Troer. (*Voss : Ilias*)
4. Und lass uns allezeit die Götter fürchten !
Was **hülft** es auch, zu trotzen? (*Mörike : Maler Nolten*)
5. Wenn ich sagte, dass mich Ihr Verfahren nicht **verdrösse** (besser : **verdrosse**) ,
so hätte ich wieder gelogen. (*Lessing : Minna von Barnhelm*)
6. Dass es der schönen Sara bedünkte, als ob die Säulen der heiligen Lade zu blühen **begonnen**, (*Heine : Der Rabbi von Bacharach*)
7. Ich, wenn ich an Ihrer Stelle wäre, **lancierte** mich ins Städtische hinein und **ränge** nach der Bürgerkrone. (*Th. Fontane : Frau Jenny Teibel*)
8. Gleichsam zur Buße gab sie mir den Rat, bald zu heiraten, damit mich die Weiber nicht **verdürben**. (*Hans Carossa : Führung und Geleit*)
9. Die Möglichkeit, dass mich ein Unheil **träft**, erschreckt mich. (*Kleist : Hermanns Schlacht*)
10. Die gute alte Zülow sagte, sie **verbäte** sich solchen Unsinn.
(*Th. Fontane : Irrungen Wirrungen*)
11. Es gibt kein Gesetz, das einem **verböte**, etwas Miserables drücken zu lassen.
(*Hauff : Memoiren des Satan*)
12. Wir **würden** sie lieben, wenn sie auch nichts **besäße**. (*Lessing : Damon*)
13. Und **würden** wir ihm nichts mehr schuldig. Er **liefe** ganz und gar davon.
(*Goethe : Faust II.*)
14. Es gibt keinen Soldaten, der mit dem Rufe "Für das Vaterland" nicht gern **stürbe**.
(*Bertha v. Suttner : Die Waffen nieder !*)
15. Wenn Ew.[Euer] Gnaden **beföhlen**, so **könnte** man dies ja versuchen.
(*Apel und Laun : Das Gespensterbuch*)
16. Weichling ! **Schölte** mich einer, und so verbringst du die Tage?
(*Goethe : Epigramm*)
17. Ach, wie gern **genösse** auch ich der süßen Wohltat !
(*Grabbe : Marius und Sulla*)
18. Nun legte er die Hand an seine Stirn, wie wenn er **nachsänne**.
(*Immermann : Münchhausen*)
19. Wenn du mich **beschörest**, so wich' meine Kraft von mir, dass ich schwach **würde** wie alle andere Menschen. (*A. Test, Buch der Richter*)
20. Laurence sah mich an mit ihren großen Augen, als **früge** sie mich um Rat.
(*Heine : Florentinische Nächte*)
21. Es schien mir, als **schnitte** man mir das Herz aus dem Leibe.
(*Heyse : Die Frau Marchesa*)
22. Könnt Ihr denn das verfluchte Zechen nicht lassen ?
Denkt Ihr immer, ohne das **gediehet** Ihr nicht ? (*Immermann : Münchhausen*)
23. Mir ist es immer vorgekommen, als wenn man den Wert der Neuern gegen die Alten auf einer sehr falschen Wage **wöge**. (*Lichtenberg : Aphorismen*)
24. Messalina war es, als **schöbe** sich ein Vorhang zwischen Einst und Jetzt.
(*H. Stadelmann : Messalina*)
25. Ich **schnitt**' es gern in alle Rinde ein, Ich **grüb**' es gern in jeden Kieselstein.
(*W. Müller : Ungeduld*)
26. Erst jetzt blickte er auf, da die Gattin sich bewegte, wie wenn sie **erschräke**.
(*Keller : Martin und Salander*)

27. Ach, dass die innere Schöpfungskraft
Durch meinen Sinn **erschölle** ! (Goethe : *Künstlers Abendlied*)
28. Dass eine Bildung voller Saft
Aus meinen Fingern **quölle** ! (Goethe : *Künstlers Abendlied*)
29. Allein er hatte es abgelehnt, dass kein Neid **entstünde** unter den Mönchen.
(V. Scheffel : *Ekkehard*)
30. Da lachte Heribald, als wenn er seinen Mann **kennte**. (V. Scheffel : *Ekkehard*)
31. Auf diese Weise **möchte** es kein Wesen in der ganzen Welt geben,
das die Welt so **erkannte**, wie sie ist. (Lichtenberg : *Aphorismen*)
32. Ich glaubte, wie sehr ich dir schmeicheln **würde**, wenn ich deinen Adrast
den wohlgemachtesten Mann **nennte**, den ich jemals gesehen **hätte**.
(Lessing : *Freigeist*)
33. Doch ward es mir jetzt herlich schwermütig und unheimlich, und oft so heiß,
als wenn mir die Sohlen unter den Füßen **brennten**.
(E. Moritz Arndt : *Erinnerungen*)
34. Hätte von seinem Traum ein anderer Mann uns erzählt ;
Lug wohl **nennten** wir ihn, und **wendeten** uns mit Verachtung. (Voß : *Ilias*)
35. Man **hielte** sie nicht für meine Tochter, obwohl auch eine schwarze Henne
ein weißes Ei legt. (Heyse : *Andsea Delfin*)
36. Denn wahrlich, ich bin des Herumschweifens herzlich müde, und ein Trunk Wasser
täte mir wohl. (Heyse : *Die Stickerin von Treviso*)
37. Das find' ich gut, da **ließe** sich ein Pakt,
Und sicher wohl, mit euch, Ihr Herren, schließen? (Goethe : *Faust I.*)
38. Und Schrecken bändigt die Empörung nur. Erbarmung **hiesse** Wahnsinn.
(Schiller : *Don Carlos*)
39. O heilige Maria, ich **wünschte**, wir wären wieder daheim !
(Hauptmann : *Elga*)
40. **Wollte** Gott, ich **könnt'**s vergessen, oder es **wäre** anders !
(Goethe : *Götz*)
41. Du **spartest**, **dächt'** ich, solche Sprüche. (Goethe : *Faust II.*)
42. Wir haben da eben ein Briefchen bekommen
Von lieber Hand und den **läsen** wir gern. (Körner : *Der Nachtwächter*)
43. Und du bist auch so ein dienstfertiger Schurke,
Und **brächtest** wackre Leute gern ins Unglück. (Schiller : *Wilhelm Tell*)
44. Ich finde nicht den Mut, es ihm zu sagen,
Und **rief'** ihn noch zehnmal wieder um. (Hebbel : *Die Nibelungen*)
45. Die Lene lügt nicht, und **bisse** sich eher die Zunge ab, als dass sie **flunkerte**.
(Th. Fontane : *Irrungen Wirrungen*)

第 二 篇 形式意味用法を主とする詳論

第 一 章 接 続 法 の 本 質

序 説

小先生 : 『人を見て法を説け』という事を君は知っているか？

大先生 : Sieh dir den Mann an und richte dich nach ihm だね？

知ってるよ。それがどうした。

小先生 : では一つ、斯く申す此の我輩を見て法を説いて呉れないか。

大先生 : 何の法を説くのだ。

小先生：接続法をさ。

大先生：接続法か！---まあ、相続法や破産法でなくてよかったが、それにしてもこいつは一寸弱ったね。すると何かい、君の顔を眺めながら『接続法というのはこんなものだ！』と一口で云ってしまえと云うのだね？

小先生：まあそうだ。

大先生：よし、じゃあ云ってやろう。そも接続法に三種あり。一に曰く無法、二に曰く滅法、三に曰くべらぼう。君のは第三者、即ちべらぼうだ。

小先生：いや、必ずしも一口で云って呉れとは云わない。一口が二口になり、二口が三口になり、その三口が忽ち軽口になり、悪口になり、勢いの赴くところ臆[やが]ては遂にたとい關口[せきぐち]になったにしたところで、關口ぐらいに腰を抜かす様な吾輩じゃない。饒舌れ！捲れ！煽れ！やっつけろ！

大先生：やっつけるか？

小先生：やっつけろ！

大先生：よし、やっつけよう。---但し多少途中で脱線するが、好いか？

小先生：好い。

大先生：接続法の講義を一年も継続.....じゃなかった接続法の講義を一年も連続するなんて云ったら、大方の読者は恐らく聞いたばかりで縮み上がりはしないかね？

小先生：読んで行くうちに自然と伸びるから心配するな。

大先生：伸ばしちゃうか？

小先生：伸ばしちゃえ！

大先生：Also : es gilt?

小先生：Es gilt.

接 続 法 の 本 質

大先生：なるほど君は巧い事を云った。『人を見て法を説け』ということは、接続法の講義に関する限り、まったく其の通りだ。君はまあ、曲がりなりにも人にドイツ語を教えている男だから、sei は sein の接続法だと云って見たところで別に感心もすまい。そうかと云って、初級中級の知識をすっかり前提にして、特殊な事ばかりを並べ立てたところで、そうなるとまた逆に基本的な事の方が大問題になって来るだろう。だから、まあ大体いろんな物を読んでもおり、臆気ながら文法も一通りは読んだことがあるものとして、さて学生に教える時に必要な『最も根本的な概念』と、それから他方また、今までに気のつかなかった詳しい『個々の具体的な法則』を知りたいのだろう？

小先生：そうだ。

大先生：よし、ではこれから其の両方面を念頭に置きながら話そう。殊に『個々の具体的な法則』は、なる可く全部を網羅して見よう。これだけの項目を知って居れば、たとえば学問書を読もうと、文学書を読もうと、時事文を読もうと、はたまた会話をしようとして、古文であれ、現代日常用文であれ、はや絶対にそれ以外の場合には遭遇しないと云うまでに項目を揃えて見よう。

小先生：つまり接続法の専門家にしてくれるというわけだね。

大先生：そうだ。---ところで先ず専門家の定義だが、専門家というのは一たいどんな人間だと思っている。

小先生：専門に詳しい人間だろう。

大先生：それが先ずスッテンコロリンシャンと間違っている。以て如何に君が何一つ専門を自分の物にした事のない男であるかがわかる。本当の専門家はむしろ『専門に詳しくない人間』だ。専門の事になると、ちっとも詳しくなくて、むしろ人を馬鹿にしたような『簡単な』ことを云って、『あんな事で好いのかしら.....』といったような感じを抱かせる人間だ。ただ素人と違うのは、その簡単な事が、実は甚だ厄介なことであるに拘わらず、素人に云う時にはまあ大体そんなところで宜しいという事を識って居り、識っているからまた従って其の簡単な事に対して安心して責任を執ることが出来るという事も序でに知っているという此の点だ。

小先生：つまり、専門は啓蒙に於いて現われるという事だね。

大先生：と云っても好かろう。

小先生：では、um auf besagten Hammel zurückzukommen [話を本題へ戻して]、接続法とは何ぞやということを、極く荒っぽく学生に云って聞かせるとすれば、どういう風に云ったらわかるだろう。

大先生：わかる？どう云ったってわかるもんか。これから接続法がどんなものか教わろうという初歩の人間に向かって、定義みたいな事を云って聞かせたって、具体的な事を何一つ知らない彼等にパッと『わかる』なんて事はある得ないね。

小先生：じゃあ僕の云い方が悪かった。では、どういう風に教えて置いたら『後になって段々と真意を理解するようになる』だろう？

大先生：それなら方法が無いではない。たとえば『**接続詞 dass の機能を包含する特殊な定形を接続法と謂う**』とでも教えて置けば、それから後に出て来るあらゆる場合が全部云い現わされ、同時に(これがむしろ主問題だが)接続法全体を一貫する **Prinzip**(原則)乃至 **Leitgedanke**(指導概念)とでも云ったようなものが力強く要約されたことになる。

小先生：簡単すぎて少しまごついてしまうが、そんなことで好いのか知ら。

大先生：多分そう云うだろうと思ったから初めに断っておいたんだ。----それで好いんだ。それがむしろ唯一の啓蒙手段なんだ。まず第一に『**接続詞**』という概念と『**接続法**』という概念との関係に注目し給え。『**接続**』というのは、両方とも、つまり一つの文章を、即ち副文章を主文章に接続することだ。接続にも色んな接続があるが、茲ではつまり『**従属化的接続**』のことを指しているのだ。次には『**詞**』と『**法**』との相違に注意しなければならない。『**詞**』とは何だ。

小先生：詞とは、ことばさ。

大先生：もっとはつきり云うならば、独立した一つの単語だ。----『**法**』とは何だ。

小先生：『**法**』は弱ったね。要するに命令法とか、話法とか、不定法とか云う其の法だろう。

大先生：そうだ。では命令『**法**』とは何だ？話『**法**』とは何だ？不定『**法**』とは何だ？

接続『**法**』とは何だ？**要するに『法』とは何だ？**

小先生：さあ大変なことになったぞ。いよいよ始まったね。

大先生：『**法**』とは要するに何か斯う『**形式**』みたいなものに違いない。たとえば命令法を例に取るならば、**Komm !**と云えば、文法学者はまず此の **komm !** について『**意味**』と『**言葉**』とを区別するだろう。意味の方を取って考えると、『**来ること**』という『**内容**』と、それが命令であるという点、すなわち『**形式**』とに区別される。言葉の方にしても同じだ。**Komm-**という語幹そのものは謂わば『**内容**』だ。ところがその **komm-**が **kommen** でもなく、**kam** でもなく、"**komm !**"という! によって表現された『**形**』であるという点から見るといって、とにかく命令法という『**形式**』をもっている。要するに、意味の方にも内容と形式があり、言葉の方にも内容と形式とがある。この内容と形式との区別をはつきり考えて貰いたいね。

小先生：わかった。すると『**法**』というのは『**形式**』の事か。

大先生：それでは肝心のところが抜けてしまう。**法**というのは『**動詞**』の形式だ。なぜというに、名詞にも格とか数とかいう形式がある。形容詞にも形式がある。

小先生：よし、法というのはわかった。すると接続法というのはどうなるのだ。

大先生：接続詞と接続法との区別に注意しろというのはここだ。接続詞の場合には立派に一つの単語をなしている意味が、接続法の場合にあっては単なる『**法**』として、動詞の内容につけ加わった一つの『**形式**』となっているのだ。----意味は両方ともちっとも変わらない。というよりは、この場合にあっては『**意味**』というよりはむしろ『**機能**』だね。『**働き**』だ。一たい『**機能**』という奴は、これを表現するのに三つの手段がある。まず

第一は、『**法**』とか『**格**』とか云ったような、内容と一体になった単なる『**形式**』或いは変化によって表現する方法だ。

第二は、その機能を表現する『**語尾**』とか『**前綴り**』とか云ったようなものを附加して一語を構成する方法だ。

第三は、その機能に相当する部分を独立させて一語をこしらえるという方法だ。

此の三つの方法は、時代によって色々に変わって行く。西洋でも、たとえば『**の**』とい

うニ格機能は、昔はみんな第一又は第二の方法によったものだ。現今でもたとえばドイツ語ではニ格を冠詞類の変化と名詞そのものの語尾とによって表現するが、これは第一の方法だ。ところが、たとえば Mann-es という-es だけを取って一つの独立したものと考えるならば、これはまた第二の方法だとも云える。ところが、フランス語や英語には de とか of とかいう独立した一語があるから、これは第三の方法ということになる。西洋語ではいったい、昔は変化[Flexion](即ち第一の方法)或いは形式的附加物[Formantia](即ち第二の方法)で表現していたものを、追々と独立させて一語を以て一機能を表現しようという傾向に向かって進んで来ている。

小先生：すると、接続法なんてものは古い形式で、dass なんてものは新しい傾向だというのだね。

大先生：そう云っても好いだろう。ニ格表現でいうならば、ドイツ語なんてものは古い遺物なので、ニ格形よりも van という前置詞の方を多く用いるオランダ語はやゝ現代的、ほとんど of という前置詞を用いて 's という語尾が比較的少なく、Genitiv という文法概念はもはやほとんど必要のない英語は、さらに一步進んだ(或いは崩れた)歴史段階を代表し、もっぱら前置詞のみによって『の』の機能を受け持たせている仏、西、伊語等は、これはもっとも進んだ段階だということができよう。

小先生：進む、というのは即ち、ばらばらに崩れて行くことをいうのだね。

大先生：まあそうだ。---併し、これは大体の傾向に関していうので、個々の場合について見れば、必ずしもそうでもない。むしろ其の全然逆の動きもある。

小先生：逆というと？

大先生：各々独立した単語であったものが、単なる Formans(形式的要素)になって行く傾向だ。たとえば an Statt des なんてものは、これははじめはちゃんと『何々の場所に於いて.....』と考えていたものだが、近頃ではもう『.....の代わりに』という単なる機能詞(Partikel)に変わってしまって、書き方も anstatt となってしまったのなどがそれだ。もっとひどいのになると、たとえば伯林[ベルリン]辺りの方言では、Kommst du ? ということをも Kommste ? という。du という立派な独立した単語が、形まで失ってしまっている。殊に面白いのは kommst という-st の語尾が、其の素性を洗うと、実は『汝』という意味の一語に相当するのだ。つまり komm- と st との二つがくっついたのだ。これも今述べている独立詞から形式的要素への発展だ。ところが、既に『来る・汝は』の komm- st へもって来て、また du をつけて kommst du という其のことが既に二重であるところへもって来て、その du (→ tu → te) がまた吸いこまれてしまって kommste となったものだから、もう百年ばかりたつと、そうした起源を忘れてしまって、また du をつけて kommste du ? ということが無いとも限らない。そうすると、これを訳すると、『来るか・汝は・汝は・汝は？』ということになるだろう。要するに、何度あとも du をつけても、すぐまた吸い込まれてしまうだろう.....。

小先生：あんまり脱線しないで、また本問題にかえろうじゃないか。

大先生：帰ろう。之れを要するに、dass という接続詞は、いわば機能『詞』だ。それに反して接続法は、いわば機能『形式』だ。故に両方は、ただ語であるか形式であるかだけの相違なので、機能そのものに至っては、ほとんど同じなのだ。

小先生：どうして同じだ。

大先生：だって両方とも『接続』という機能を持っている。接続詞は Konjunktion, 接続法は Konjunktiv.--"conjungere"というラテン語は『つなぐ』という意味だ。

小先生：それじゃまるで術語の分解だけの話だ。わるくすると語呂洒落だね。

大先生：但しその術語の一致の由って以て来るところの所以を考えなければなるまい。

一たい僕が今やっているような sprachgeleitetes Denken(即ち ein Denken, welches sich an der Sprache orientiert)には、多分の危険が含まれている。勿論、こうした考え方そのものが興味の中心になっては大変で、それはもはや考え方ではなくて、考えの遊戯にすぎなくなるが、それが一つの説明手段であれば構うまいと思う。僕は、こうした文法用語を無心に造った古代人が、無心に実相をつかんでいるように思う。

小先生：よしよし、それはまあどうでも好い。それから？

大先生：定義をもう一度云う。『接続詞 dass の機能を包含する特殊の定形を接続法という』---こんどは『定形』という概念に注意を向けてくれ給え。『定形』或いは『定法』或いは『定動詞』といってもよかろう。つまりいわゆる verbum finitum ; finites Verb ;

又は Redeform だ。

小先生：定形は知っている。定形がどうして此の際重要なんだ。

大先生：たとえば接続法の『不定形』とか『過去分詞』とか『現在分詞』なんてものがあるかい？

小先生：ないね。

大先生：それを云うんだ。接続法といえ、これは必ず定形だけに関した問題で、たとえば *Ob er mich recht verstanden hat* ? という文を接続文にしろと云えば、*ob* も *er* も *mich* も *recht* も、また動詞である筈の *verstanden* すらも問題には関係はない。ただ文の定形たる *hat* だけを *habe* と変えれば好いのだ。要するに、**接続法**というのは、**ただ定形のみに関した一つの特殊形式であることがわかる。**

小先生：それはわかったが、それが何か接続法の意味、用法、すなわち君のいう『機能』に多少関係があるのかね？

大先生：多少どころじゃない、大関係があるじゃないか。*dass* の機能も、共に前にのべた如く、一つの独立した主文章を化して以て単なる宙ぶらりんの従属文章にしてしまうという此の一点に存する。たとえば、一つの独立した会社が、一枚の契約書で他の大きな会社の一事務所になってしまうようなものだ。ところで君に問うが、君がもし甲という会社の社員であるとして、社長の命を受けて乙という会社を併呑し従属せしめようという事になったら、誰のところへ行く。

小先生：乙の**社長**の所へ行くね。

大先生：そうだ。下っ端を買収したって駄目だ。**社長**を買収しなくっちゃ。----定形は即ち文章の社長みたいなものだ。

小先生：何だって？

大先生：もっと適切な比喻で行こう。たとえばここに長い材木があるとする。この材木を指一本で持ち上げるには、何処を持ち上げたらいい。

小先生：勿論、その材木の重心のところを持ち上げる。

大先生：それだ。力があれば小指一本で持ち上がる。但し場所を間違えると持ち上がらない。**定形は即ち文章全体の重心だ。**

小先生：君のいう**動詞中心主義の文章論**というのがこれなんだね。

大先生：そうだ。むしろ**定形中心的文章論**といった方が----まあ、君が長い材木を小指一本で持ち上げたところを物理的に考えて見給え。其処には二つの重心がある。材木だけの重心は何処かと云えば、それは君の小指に接している一点だ。けれども、君が支えている間は、材木と君とを合わせた全体の重心は、君自身の足の地についているところへ行っている。此の関係をよく考えて見たまえ、そうすれば副文章と主文章との関係もわかれば、定形というものが一文章の重心であることもわかって来る。

小先生：つまり、文章全体の重心と基礎とは定形にある。かゝるが故に此の文章全体の位置を変えたり、他のものに乗っけたり、要するに『**接続**』という事をやろうとする時には、当然文の基礎たる『**定形**』が其の機能を発揮するという事になって来る、というわけなのだね？

大先生：そうだ。『**接続**』というのは、ここでは『**従属文化的接続**』ということであるから、*dass* といったような一独立語を用いるならば、結局どこに置こうと其の国語の習慣次第でどうしてもよろしいが、既に元から存する語の形式をかえて全体に働きかけんとする際には、どうしても全体の重心たる定形の機能の発揮に俟たねばならぬという事は、そもそも文章なるものの定形中心的機構から生じて来る必然的結果だ。----どうだ、これで『**接続という機能**』と、それが『**定形の機能発揮**』でなければならぬというわけがわかったかい？

小先生：大体わかったような気がする。----ところで扱[さ]て、肝心の接続という概念だが、たとえば、文法書などにすぐ出て来る『**間接話法**』という用法の *Er glaubt, ich sei krank* なんてものの際には、もちろん *ich sei krank* という文が *sei* という形のために従属文となって *Er glaubt* という主文章の一部分になってしまう、すなわち副文章になってしまうということはよくわかるが、接続法の用法と云えば、単に間接話法ばかりではない、その外に *Sei er krank!* (彼が病気であれ!) などという場合もあれば、*Wäre er krank, so bliebe zu Haus.* (病気だったら家にいる筈だが) なんて場合もある筈だが、こういう風なのは、みんなそれぞれ一個の独立した文章をなして、別に他の主文章に『**接続**』

されているわけではないじゃないか？ *Sei er krank*！ 或いは *Er sei krank*！ は、何か他の主文章に接続されている従属文章なのか？ *Wäre er krank, so bliebe zu Haus.*にしても、前半はまあ副文章だから何とかこじつけられない事はないにしても、後半の方は一たいどうこじつけるんだ。

大先生：君は形式ばかりに囚われている。もっと深く考えなくちゃ駄目だ。即ち『意味』を考えなくちゃ駄目だ。----たとえば *Er sei krank*！ を取って考えて見よう。これはいずれ『要求話法』という意味形態で一括する用法になって来るのだが、この文を普通の直説法で *Er ist krank* と云った際と区別して見ると這般[しゃはん]の消息がはっきりとわかって来る。滔々数万言を費やす代わりに、簡単に一言の訳語を以て両者の区別を明らかにするならば：

1. *Er ist krank.* 彼は病気なり。
2. *Er sei krank.* 彼が病気なる事。

『彼が病気なること』という訳語は、あんまり良い訳語ではないかも知れないけれども、接続法というものの根本的本質を明らかにすると同時に、一方またその凡ゆる応用法の依って以て生ずる所を明らかにするには、非常に都合が好いのだ。----『間接話法』と『要求話法』とは、用法としては区別されるが、接続法の本義から云えば、全然同じものであることが此の訳語によってわかる筈だ。即ち *Er behauptet, er sei krank.* といったような場合には、『かれは主張す、かれが病気なる事を』ということになって、これが即ち間接引用文的用法なのだが、君の云った *Er sei krank*！ (彼は病気であれ！) という、ちょっと命令のような、希望のような、時にはまた『あいつが病気なら病気だとして置こう』とか、或いは *Er sei krank, er sei gesund.* とか *Er sei krank oder gesund.* とか いえば『あいつが病気であろうと達者であろうと』と云ったような意味にまでなることがあるが、要するに一言にして云えばつまり『要求話法』という項目でもって一纏めにしてしまえる各種の用法が、これからも亦今云った『かれが病気である事』という訳語から生じて来る解釈でもって極く妥当に解決してしまう事ができる。即ち『かれが病気であること』を希望するとか、要求するとか、仮定するとか、認めるとか、とにかくそう云ったような種類の、何等かの主文章が省略されているものと考えれば好いじゃないか。省略されているというとなんだか元は存在していたと云う風にきこえて拙[つたな]いかも知れないが、意味の関係をよく考えるならば、まあそう云ったところで大した間違いにもなるまい。

小先生：つまり、命令とか希望とか云ったような趣旨で用いる *Er sei krank*！ は、『かれが病気ならんことを！』なんだね。

大先生：そうだ。その、かれが病気ならんこと『を』！ という、此の『を』という日本語をよく考えて見たまえ。これはどうしたって、それ自身で完結独立した主文章だとは思えないだろう？ たとえ現在は、立派な主文章的な重みと独立性とを持つに至っているとは云え、とにかく『を』ということばがある以上、その次には何か文章が省かれて出来たもので、要するに他の何物かに接続される可き筈であったものと思えないだろう？ そう云えば『を』ばかりではない、『こと』だって同じだ。両方とも要するに接続詞 *dass* の機能と同一だとは思わないかい？

小先生：全くそうだ。それはよくわかった。けれども一寸気にかかるのは、要求話法の一つだという『あいつが病気だろうと達者だろうと』という、いわば認容的な文章だね、こいつもやはり日本語の訳語の方から何とか理屈がつくのかね？

大先生：つくどころじゃない、『病気だろうと』という『と』に現われている徴候がどんな解釈を要求するかを考えて見れば、結論は自然に出て来る。『病気だろうと』というのは、仮に『病気だろうと』仮定するということだ。

小先生：ではそれも解ったとして、さて其の次に一寸気になるのは、一たい君の考え方はすべて日本語の訳語を絶対に妥当なものと仮定して、ドイツ語の接続法そのものを論じないで、むしろ接続法の訳語ばかり論じている様に見えるが、それで大丈夫なのかね？

大先生：訳語とか翻訳とかいうものには、かなり勝手気儘な方面もあるけれども、一面また、原語に於いては形として現われない一段奥の事実が、はっきりした形を取って露骨に言葉となって表面化するという好都合もある。只今の *sei* という接続法形についても同じ事が云えるので、接続詞 *dass* の機能がその中に含まれているという事は、たとえ此の *sei* を如何に精巧なる顕微鏡を以て検べたところで、具体的な形として見えるわ

けのものではないが、之れを一度翻訳するとなると、日本語に接続法という丁度ぴったりの形式が存在しないために.....というより寧ろ、存在しないお蔭で、単なる無形の機能にしか過ぎなかったところのものが、原意に忠ならんとする努力の結果、苦しまぎれに思わず識らず『てにをは』のようなものとなって飛び出して来るのだ。一たい苦しまぎれに飛び出して来るものと云う奴はすべて天真爛漫たる正直さを持っている。然り而[しか]して一国語から他国語へと行われる翻訳というもののほど苦しまぎれなものはない。苦しまぎれに飛び出して来る『てにをは』に、ドイツ語の通りの感じをぴったりと表現しながら、しかも余力を以て序でに接続法の本質を説明しようなどという綽々[しゃくしゃく]たる余裕があろうなどとは到底思われない。また、仮にそんな贅沢な余裕があったとしたら、そんな余裕でチョット序でに試みたような説明ならどうせ碌な説明じゃない。ところが、そんな余裕は一切なくて、ただとにかく当面の意味を伝えるだけで手一杯なものだから、だからこそ其のどさくさ紛れに想わず飛び出して来たものは正直でもあり本物でもあると云うわけさ。況んや、只今の場合に於けるが如く、其処に徴候として飛び出して来る『てにをは』が、お互いに何の関係もないものばかりではなくて、『**接続詞 dass** の機能』という主張に照らして見ると、さながら符節を合わすが如きものであるに於いておやだ。

小先生：君は口が達者だから叶わん。では、要求話法的用法の場合と、間接引用の場合即ち間接話法的用法の場合とは合点が行ったとして置こう。すると扨て **Wäre er krank, so bliebe er zu Haus.** などという、『もし云々と仮定するならば、云々の結果となる筈だ』という、いわゆる**約束話法的**な場合だ。こいつも何か接続とか従属文化とかいう現象の一つとして説明できるのかね？

大先生：むしろこいつが一番出来ると云う可きだろうと思う。簡単にいうならば、前半 **Er wäre krank.** という概念も、後半 **Er bliebe zu Haus.** という概念も、共に **ich nehme an,** (.....と私は仮定する、.....と私は仮に考えて見る) とでも云ったような、暗黙裡の主文章を基礎に据えて之れに従属していると見るべきだ。

小先生：待ってくれ。その暗黙裡に従属していると云うやつだが、従属した副文章ならどうして副文章らしい『**定形後置**』の配語をしないのだ。

大先生：それは、よくある『**従属文的独立文**』という現象だ。

小先生：何だって？それは一たい何の事だ。

大先生：たとえば一例をあげて云って見よう。 **Ich bin abwesend, brummte er.** という文を文章論的に考えて見たまえ。『僕は留守だよと彼はつぶやいた』だ。どうだ、この文では一たいどちらが主文章でどちらが副文章だ。

小先生：変なものを担ぎ出して来やがったぞ！独逸語の方はどうもちよっとどっちが主文章だかわからん。日本語の方から考えると.....

大先生：日本語の方はどうでも好い、ドイツ語の方をきいているんだ。

小先生：.....そうだねえ.....恐らくは矢張り **Ich bin abwesend** が主文章なのじゃないかね.....。

大先生：(笑いながら)ではその次の **brummte er** は副文章か。

小先生：.....なのじゃないかね.....。

大先生：おいおい、それじゃあドイツ語の先生は勤まらんぜ。もっとはつきり考えて見たまえよ。形から云えば茲では両方とも主文章だ。**Ich bin abwesend** は**定形正置**の主文章、**brummte er** は**定形倒置**の主文章、要するに両方とも形の点では立派な主文章だ。けれども、**Ich bin abwesend, brummte er.** というのと同じように **So brummte er.** (斯く彼は呟きぬ)とも云えるから、つまり"**Ich bin abwesend**" なる部分は此の文の **so** のところに該当する、さすれば **Ich bin abwesend.** は、それ自身としては立派に主文章構造を取ってはいるが、その格位から云うならば単なる **so** と同じもの、即ち **brummte er** なる真の主文章の一部分にすぎない従属文だ。そうは思わないかね？

小先生：それは全く其の通りだ。

大先生：それがわかったならば、君がさっき抱いた疑問も大した疑問にはならない筈じゃないか。**Wäre er krank, so bliebe er zu Haus.** は、**Wäre er krank[, nehme ich an] so bliebe er zu Haus [, nehme ich an]** といったように、いちいち **nehme ich an** 或いは **nehmen wir an** という元来の主文章を附加するのと同じ事だと思えば好いじゃないか。それとも僕の考え方に何か無理なところがあるかね。

小先生：無理があるか無いか、其処までは僕には判断できない。僕はとにかく君の御高説を謹んで拝聴しているきりなのだから。

大先生：だからまあ僕も大いに責任を感じて、少なくとも此の接続法の本質という問題では、苟[いやし]しくも無責任なことは何一つ云わない、その代わり充分に責任の持てる点だけは極力強調して述べているつもりだ。

小先生：いや、どうも有難う。ではまあこれで大体君の定義、すなわち『**接続詞 dass の機能を包含する特殊の定形を接続法という**』という Formlierung だけは根本的にわかったように思う。殊にその定義が、君の持論である『**要求話法**』『**間接話法**』『**約束話法**』という接続法の三つの意味形態の各々について sich bewähren したということは、今後の講義を承って行く上にも甚だ安心な気持が得られて嬉しい。----ところで最後に唯一つ残った不安は、**此の君の定義は少し形式的に墮しはしないだろうか**と云う点だ。接続詞 dass の機能を含むということは、換言するならば、君が度々強調している通り、とにかく何か他の主文章-----それが有形の文章であれ、或いは暗黙裡に補い考えらるべき無形の文章であれ-----に接続されるということになるらしいが、接続されるのは大変結構として、問題は扱って『**如何なる種類の主文章に接続されるか**』ということだ。まさかどんな種類の文章にでも接続されるというわけではないだろう。

大先生：そこから先は、つまり具体的な問題になって来るので、ラテン語にはラテン語特有の範囲があり、フランス語にはフランス語特有の癖があり、またドイツ語にもドイツ語だけの変な制限がある。ドイツ語だけについていうならば、大別するとつまり僕の分類法に従って、**要求話法、間接話法、約束話法**の三種に分け、要求話法はたとえば ich will, ich wünsche, ich verlange, ich fordere といったような、あらゆる種類の要求を意味する主文章に結びつく、或いはそうした主文章を仮定すると考え、間接話法は ich behaupte, er sagt 等あらゆる種類の宣言(有形或いは無形の)に結びつくものと考え、約束話法は例の nehme ich an とか nehmen wir an とかいったようなものに結びつくと考えるのが最も zweckmäßig だということは、広く接続法の諸種の用法を見渡している者には当然生じて来る極く自然な結論なのだ。大別すると此の三種しかない、それ以外の用法は、要するに此の三種のどれかによって完全に説明し尽くされる可き変種(Abarten, Spielarten)にすぎないのだ。-----併し此の問題になると、あらゆる用法を全部項目化して一眸[いちぼう]の下に集めている者でなければ本当に納得は出来まいと思う。不遜なようだが、僕は責任を以てそれをやっている。

小先生：まあ威張るのは後からでも好かろう。では、もし接続法を用いた従属文的な文章の基礎をなしている有形無形の主文章が、はたして君の云う通り『**要求**』『**引用**』『**仮定**』の三種類に限られるものとするならば、『**接続される**』という概念を、もっと意味の点から厳密に定義す可きではないだろうか？君の定義が少し形式的に過ぎると云ったのは此の点なのだ。単に接続する機能を持った定形だ、と云っただけでは、ちょっと聞くと、どんな主文章にでも接続されるように聞こえはしないかね？

大先生：それはなるほど其の通りだ。主文章にちゃんと具体的な制限があり、詳しく云えば個々の形態は或種の項目だけに限られるということになって来るのだからね。しかし、此の要求話法、間接話法、約束話法の三種を何等かの内容によって云い表わす方法は、ちょっとむずかしいね。ドイツ本国の学者の中には『**可能法**』(Möglichkeitsform)という名称で接続法を呼ぶ人もあるが、僕はあまり感心しない。内容的に規定せんとする努力は大いに多とするが、一番肝心な『**接続という機能**』をほったらかしておいて、各論に於いて具体的に**意味形態を定めて**行きさえすればおのずから明らかになって来る筈の事柄を、漠然と形容して名称にしようなんてのは、まず実相に徹していない証拠だ。それよりは古い『**接続法**』という名の方がずっと『**機能**』というものをつかんでいる。新たなもの必ずしも進歩を意味せず。僕は古い方に賛成だね。

小先生：古い方に賛成と云えば、此の機会にちょっと糺[ただ]して置きたい事がある。これも矢張り名称の問題だが、たとえば sei とか habe とか云ったような形と、それから一方 wäre とか hätte とか云った様な形との二種がある事は申すまでもないが、これらを**現在形、過去形**と云って区別する代わりに、君は sei, habe 等のことを『**第一式接続法**』wäre, hätte 等の事を『**第二式接続法**』と呼ぶ事を提唱した当人だね？

大先生：提唱ならまだ可愛げもあるが、我輩のはもっと図々しくて、提唱も何もしないで、御免とも云わず矢庭に使い創め、恰も元頃からそうであったかの如き顔をして又

ケヌケとそれで押し通している。

小先生：それを言うのだ。古い方に賛成の君が、どうしてそんなつむじ曲がりな名称を用いるのだ。

大先生：つむじ曲がりと言うのは、それは少しつむじ曲がりな観方ではないかね。初めてドイツ語を学ぶ者の気持になって考えたら、sei を現在形と呼び、wäre を過去形と呼ぶ事に対して、教える者としては多少の批判を加えたくなるのは極く自然なことで、加えたくない方がよっぽどどうかしているぜ。ドイツ人の読む文法なら、ドイツ人は既に読まないうちから sei の用法を知っており、wäre の用法を知っているから、どんな名称を用いたって混乱させるような事はあるまいが、日本人に教える時はちがう。何等『現在』とか『過去』とか云ったような観念とは関係のないものを過去形と呼び現在形と呼ぶのだから、誤解を防がんがためには、『但し sei と wäre との間には何等時称上の相違があるわけではない』などと云ってわざわざ但し書きをつけて、一度全然無用な混乱を生じさせておいて、それからまたすぐにその混乱を是正するという第二の無用な混乱を捲き起こす必要が生じて来るのだ。

小先生：そういう意味ではなくて、sei はとにかく現在であり、wäre はとにかく形としては war と関係があるから、sei を現在形と呼び、wäre を過去形、即ち過去形と関係のある形と呼んだって差し支えないわけじゃないか。

大先生：wäre が war と関係がないと思う学生があるだろうか？

小先生：何だって？

大先生：wäre が war から来た形であるということを、どうしても名称によって学生の頭に叩き込む必要があるかというのだ。しかも、『意味と用法』の方に生じ勝ちな誤解を天晴れ双肩に担ってまでも wäre が war と形態の関係があるということを、名称によって初学者に教えこむ必要があるのかと云うのだ。

小先生：そう意地悪く反問されては何とも云えなくなるが、ではそれはまあそれで好いとして置こう。ところでこんどは本当に最後の質問だ。すると、『意味用法』の点から云うと、接続法には要求話法、間接話法、約束話法の三種があり、『形式』の点からいうと第一式、第二式二種があるということになるね。

大先生：そう云うわけだ。

小先生：ではこの三種の用法と二種の形との間には一たいどういう関係があるのだ。換言するならば、第一式はどんな場合とどんな場合とに用いられるのだ。第二式にはどれだけの用法があるのだ。

大先生：失礼だが、そう云う風に考えるから接続法の用法という奴がいやに複雑になって来るので、それを称して形式文法というのだよ。

小先生：どうして。

大先生：だって君は今『第一式はどんな場合とどんな場合とに用いられるか？第二式にはどれだけの用法があるか？』と問うたろう。

小先生：問うたよ。だって三種の用法と二種の形との間の関係を知ろうとすれば当然そう問うことになって来るではないか。

大先生：そうかしら？其処を僕は非常に疑問に思うのだ。

小先生：だってそれ以外に考えようがあるだろうか？

大先生：僕はあるように思う。

小先生：それは一たいどんな考え様だ。

大先生：それは君の逆の考え様だ。『どんな意味の時に第一式を用い、どんな意味の時に第二式を用いるか？』と考えたって好いだらう？

小先生：なんだ、言い方の問題か！云い方はどうだって同じことだよ。

大先生：言い方の問題じゃない、システムが逆なんだよ。君のはたとえば：

第一式接続法 [1.
[2.
[3.
[4.
[usw.

第二式接続法 [1.
[2.
[3.
[4.
[usw.

と云ったような説明を期待しているのだろうか？僕の云っているのは：

意味 A [1. 意味 A の a：第一式を用う。
[2. 意味 A の b：第二式を用う。
[3. 意味 A の c：第一式又は第二式。
[usw.

意味 B [1. 意味 B の a：直説法又は第一式。
[2. 意味 B の b：第二式。
[3. 意味 B の c：第二式(稀に第一式)
[usw.

と云ったような説明だ。君のは形から出発して其の意味を探ろうとしている。僕のは**意味から出発して形を問題**にしている。---君のはつまり形式から出立する文法だ。君だけではない、大抵の人は文法と云えばもう必ずそう云うものだと思っている。勿論形式から出立して其の用法を探るということは、外国語を研究する者が初歩の間にはどうしても一時陥らざるを得ない行き方だが、接続法といったようなものになって来ると、其の方法は断然失敗だ。こんどは其の逆を行かなければならぬ。換言すれば、『**用法から出立してその形式を研究**』しなければならぬ。即ち『**意味形態**』から出立するシステムを用う可きだ。今挙げた図式は実はでたらめだが、具体的に云うと、たとえば要求話法の表現には第一式を用い、間接話法の表現には第一式或いは第二式を用いる。約束話法の表現には第二式を用いる、こう云ったようにすれば何の混乱も起らない。そればかりではない、たとえば要求話法のこれこれの意味形態に限って、第一式も用いるが、同時にこれこれの**話法助動詞**を用いることも出来る、こういったような事も決まって来なければならない。話法助動詞も関係があるからこそ、わざわざ要求『**話法**』、間接『**話法**』といったように『**話法**』という名称が用いられているのだ。

小先生：どうも、えらい簡単なんだね。そんな簡単なことでいいのかしら？どうしてそんな簡単なことになるのだろう。

大先生：どうして？その返答も亦すこぶる簡単だ。それは『**形**』から出立して用法を探らないで、『**用法**』から出立して形を求めたからだ。用法というのはつまり言葉というものを驚異の眼を睜って打ち眺めたのちに、其の意味を探ろうとするから語学も文法もいやに複雑になり、わからなくなる。意味というものを驚異の眼を睜って打ち眺めたのちに其れに対する言葉を求めるとき、語学は非常に容易なものとなり、文法も頗る簡単なものとなるばかりではなく、まず以て明瞭なものとなる。『**意味形態を中心とする文法**』というのはこの事だ。

小先生：君の所謂意味形態論と云う奴は、文句としてはもうつくづくうんざりするほど聞かされているが、さては此の接続法の講義もまたそれで行くんだね？

大先生：そうだ。但し断っておくが、此の講義の『**全体**』そのものは、意味形態論的ではないんだよ。

小先生：どうして？

大先生：だって、『**接続法の講義**』とある以上は、とにかく接続法というものを出立点としている。接続法というものは一つの形だ。文法形態だ。然らば、苟しくも接続法をテーマとして何かを云わんとする以上は、結局は形から発して意味を求めることになるではないか。

小先生：なるほどね。それは君の立場としては一つの齟齬じゃないか。

大先生：齟齬だ。此の齟齬は只今のところ其の実用価値以外他の何物に依っても弁護されるべき余地がない。---

では愈々序論を打ち切って個々の具体的な場合を述べることにする。(終)

第二章 間接話法

----第一節---- 間接話法総論

抑々接続法とはどんなものかと云う話は前章で大体終わりました。此章は愈々各論に移る段取りですが、その各論というのがまたちょっと一般論を必要とするので、今回のところもまだゴタゴタとした理屈ばかり述べなければなりません。項目わけにして文例本位でやって行くのは次章からになります。では、もう一回だけ一般的な検討を許して頂きます。

間接話法から説き起こす理由

用法の三大別、即ち 要求話法、間接話法、約束話法の三つのグループのうちの、特に間接話法を一番最初に取り扱うのには、システムの上から来る理由があります。というのは、前章に論じたような『接続法の本質』から出立して、理路整然と説いて行くには、どうしても間接話法から片づけなければならないのです。要求話法や約束話法に於いては、その基礎となる主文章(*regierender Satz*[支配文章]ともいいます)が言葉としては云い表わされないのが普通ですから、ちょっと見ると、直接には前章に論じた『接続という機能』と何の関係もないように思われますが、間接話法即ち間接引用文は、たとえば *Er behauptet, er hätte Gespenster gesehen.* と云ったように、既に主文章を含むということによって接続の機能が一目瞭然と構文の上に現われるのが普通でありますし、たとえば *Er hätte Gespenster gesehen.* 等の独立文形態を取った場合といえども、要求話法、約束話法の場合に於けるよりは遙かに自然に『主文章(即ち支配文章)を補い足さんとする心理的必然性』が動くからであります。

例えば要求話法的用法の *Gott sei Dank!* や、約束話法の *Wenn er noch lebte, so wäre er ungefähr so alt wie mein Großvater* などと云った文が、『それ自身としては一つの完結した文の如くに見えるが、接続法の根本義を念頭に置いて考えるという、実は各々一つの、或いは二つの"宙ぶらりんの"従属文(被支配文)なのだ.....』などと云って説明することは、本源由来を知らない人にとってはかなりおかしく思われます。何故かと云うに、これらの文は、『何等かの主文章に支配されて初めて納得できる』と云ったような準接続形態を多少脱却すると同時に独立文化した、いわば派生形態であるからです。それに反して、間接話法は、たとい主文章にして *Er hätte Gespenster gesehen.* と云うにしても、前述の二つの場合ほどには独立性を持っていない。此はドイツ語の語感の発達した人には容易に首肯し得ることと思います。『あいつは幽霊を見たんだって!』という意味で *Er hätte Gespenster gesehen.* と云えば、誰だってつい其の後へ支配文章を附加して *Er hätte Gespenster gesehen, sagt er.* とか何とか云いたくなる。 *sagt er* とか *behauptet man* とかを附加しないとすれば、それは其の時の前後の文章でもって充分わかるから附加しないのであって、決して『そうした既成の独立文形式』が与えられているからではない。だいいち、補足的に土台に据えられる可き *behauptet er* 等の支配文章にしても、*er* だか *man* だか *sie* だか *du* だか。判明しない-----要求話法ははっきりした独立形式ですから、基礎文が必ず『私が欲する、私たちが欲する』といったような一人称的性質を持っていて、従って、前後の文脈で初めて補われるのではなく、補わなくてもそれ自身でもう充分わかっているし、又補うとか結びつけるとか云う意識が初めから全然存在しない。約束法にしても同様です。 *Wenn er heute lebte* (もし彼が今日生きていたら) といえは充分わかる、 *Wenn er heute lebte, nehme ich an* [もし彼が今日生きていたら、と私は仮に考えて見る] とか何とか云った様な基礎部は、附けない方が普通なのであって、附ける方がむしろ異例です。これらの思考によってもわかるように、要求話法と約束話法とは、既にそれ等が多少固定した一独立文形式となって結晶しているという事実のみを以てしても、接続法の本来の機能を念頭に置いて考える限り、明らかにこれは多少の転化段階を閲し

た後の派生形態であり、従ってまた間接話法よりは後に取り扱われる可き種類のものであることが明らかになります。

こんな面白くもない *methodologische Auseinandersetzungen* を *vorausschicken* した所以は、もし私の編纂した文法書の接続法のシステムを御存じの方があると、どうして要求話法から始めないのだろうという疑問を当然起こすだろうと思ったからです。何も知らない学生をつかまえて、なるべく楽に教えて行く方法としては、私はやはり要求話法から先に教えた方が好いと思います。それは、意味用法を教える以外に、他方第一式、第二式という、つまり *sei, habe* とか、*wäre, hätte* とかいう形の問題を教えて行かなければならない文法教科書に於いては、その両方の形式が、ごっちゃに現われて来る間接話法から先に始めるという事は、進度という見地からどうもよくない結果を招き勝ちです。主な注意を意味と用法との方に向けんがためには、どうしても第一式だけに限って置いた方が得策です。そうした実用的な見地から要求話法を第一位に置くわけです。それに、学生は別に文法学者になるのでもなし、システムなどはあまり詰め将棋のようにやって行く必要もないと思います。

けれども、*sei* や *wäre* などでは苦勞しない程度の人を念頭に置くと、多少其の点を組織的に学理的に説いて行っても好いでしょう。好いでしょうではない、そうしなければならないのです。それは決して私自身の体系化的興味を讀者諸君に押し売りしようというのではなく、三大別を行った以上は、その三大別の内面的関係を明らかにすることが、直ちに以て接続法そのものの本質を益々刻明に浮かび上がらせることに役立つからです。

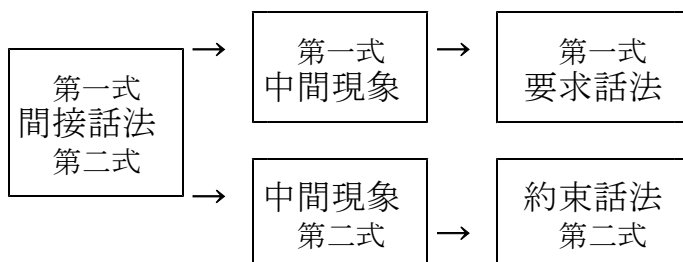
『何故間接話法から始めるか』という問題と関係した範囲に於いて、極く簡潔に、私の考えている接続法観の要点を項目化して見ましょう。

間接話法を以て『接続法』の本質を最も忠実に具現せる基本範疇と見なすべき根拠が、意味・用法の側からも、また文法形態(第一式・第二式の問題)の側からも、ごく自然に提供されている。

[1] 意味・用法の側から提供されている根拠：接続法の機能は、それを含む文章を他の基礎的文章に『接続』すること、即ち主文章の独立性を解消して以て之れを従属文化とする点にある。然るに此の従属文化という現象は間接話法に於いて最も顕著に認められ、最も活発にその本来の姿をたもっている。かるが故に接続法の機能が最も顕著に働いている用法、即ち、接続法の基本範疇は間接話法でなければならぬ。----具体的な一つの証明を挙げるならば、たとえば『接続』詞 *dass* の如きは、要求話法や約束話法に於いては殆ど大した問題にはならないが、間接話法に於いては、到るところ接続法の機能を助けるために用いられる。

[2] 文法形態(第一式・第二式)の側から提供されている根拠：間接話法には第一式・第二式ともに用い、要求話法、約束話法にはその中の片方しか用いないという妙な事実は、後者が各々前者から派生したものと考えなければ首肯し得ない。たとえば逆に要求話法から他の二つの派生形態が生じたものと考えたりなどすると、形式の問題が説明できなくなってくる。約束話法から出立して考えても同様である。(此の点は、歴史的な見地からも見なければならず、比較言語学の見地も必要であるが、それは省く。)

[3] 中間形態によって提供されている重要な示唆：間接話法と要求話法、間接話法と約束話法との中間地帯には、各々、いずれに属せしむべきかは単に取り扱い方の問題にすぎないと云ったような中間現象がある。つまり此の二つの境界は *fließend* である。換言すれば境界は無いのである。然るに、要求話法と約束話法との間には中間現象が存在しない(詳細はその時に述べる)。



間接話法とは何ぞや。

まず此の『間接話法』というものに対して、出来るだけはっきりした概念を持つ事に努力しましょう。これが今回の中心問題です。というのは、ちょっとした文法書などでは、ほんの一つ二つ、殆ど人を馬鹿にしたような、いわゆる『標準的』な文例が挙げてあって、それで凡てが片づいたような体裁になっている。しかも其の標準的な例というのが大抵 *Er sagt, er sei krank.* 或いは大体そうした調子のものであるに至っては、まことに苦笑を禁じ得ざるものがある。そう云えば私も現に教科書で *Er sagt, er sei krank* を使って説明していますが、教壇に立ってその個所へさし掛かるたびに、胸心地が悪くなります。また *Er sagt, er sei krank* だ！好い加減にくたばっちまえば好いのにと！と思う。標準というのだから月並みというのだから、実に厭になってしまう。しかもそうした文法教科書が既に数犯を累[かさ]ねて来ると、これはまったく社会問題ですな。

Er sagt, er sei krank. 並びに略々これに類似した代物は、それが単に其の月並みの標準美人性の故に吾人の胃袋並びに其の内容物に対して逆流上昇の契機となるのみならず、同時にまた自分一人で間接話法の全部を代表したかの如き自負を抱いているという其の横暴至極な態度によっても亦幾多の害毒を流しているのです。

けれどもよく考えて見ると、そうまた糞味噌に言ったものでもない。*Er sagt, er sei krank.* はなるほど鼻について仕様がないうが、*sagen* という動詞を典型的な支配動詞として持って来たのは大変よろしい。また、第一人称で *Ich sage* という例を挙げると、*Ich sage, ich sei krank.* [われ、わが病なる由を告ぐ] はちょっと説明が複雑になって、なにか余程こうした句を自然らしく感じさせるような前後の文脈が無いとぴったりと来ないし、そうかと云って、簡単にわかる *Ich sage, ich sei krank.* では間接話法の文例にはならない。だから、一人称を例に挙げるのはいけない。まあ *er* なら絶対に間違いはない..... そう云ったような筋道から *Er sagt* が基礎文として選択されたわけです。その次の *er sei krank* は、これはどうも何とも弁護のしようがない。直ぐ思い付く所では、病氣ぐらいしか出て来ないからでしょう。一たい初歩の語学という奴は、『病氣であれ』と『外出します』という事以外には、人生の他の如何なる範囲も絶対に問題にならない。問題にならない筈です。文法を書くのは学校の先生で、学校の先生という奴は御存じの通り毎日『外出し』『学校へ行って』そして時々『病氣をする』以外には別に大して変わったこともしないから、そうした単調な生活がおのずと文例の上にも反映するのではありますまいか？..... は少し意地が悪すぎるかな？

これを要するに、此の有名な *Er sagt, er sei krank.* に於いて、まずイの一番に注目しなければならないのは、一見接続法を含んでいるため最も重要と思われる *er sei krank* の方ではなくて、むしろ基礎文たる *Er sagt* の方です。*ich* ではない、*er, sie* がよいという問題はいずれ後章に論じますが、ここで先ず *sagen* に注目しましょう。というのは、*sagen* という動詞の意味をよく考えて見れば、それに接続される『間接引用文』というものが、如何に形態のはっきりとした、ある種の特殊性を帯びた、しかもまた相当の豊富な変態を許す一意味形態であるかということが自然とわかるからです。

そこで、まず『*sagen* 型の意味形態』というものを克明に *ausarbeiten* して、そして同時に私があらゆる機会に用いる此の『意味形態』というものの一端を紹介し、間接話法ばかりではない、苟しくも文法というものは凡て意味形態論という *Methode* に依らなければ真の研究は出来ないのだという提唱を、毎度のことですが茲でも亦繰り返しておきたいと思います。

『*sagen* 型の意味形態』というのは、たとえば次の文章に現われているような用法です。動詞の『意味』というものと、その『機能』即ち『意味形態』というもののとの差に御注意ねがいます：

sagen 型の意味形態

1. *Wir dürfen das nicht leiden, fuhr er endlich nach langem Brüten heraus.* [Heyse]

隠忍自重はもはやこれまでだ、と彼は長い間考えた後に遂に爆発するように云った。

2. "Leb wohl !" *hauchte* sie, und ihr Gesicht war das einer zum Tode Gerüsteten.

[*Blüthgen*]

『では御機嫌よう』と彼女は幽[かす]かな声で云った。彼女の面持ちはまるで死地に就かんとする者のそれであった。

3. Bis zum Mondaufgang ist höchstens noch eine Viertelstunde, *überzeugt* er sich auf seiner Uhr mit einem Streichholz.

月の出まで高々十五分位しか間が無いな、とかれはマッチを擦って時計を見ながら考えた[或いは：言った]のであった。

4. "Na, Suselchen," *empfing* er seine bessere Hälfte, "da bist du ja." [*Th. Fontane*]

おや、ズザンナか、と彼は細君を迎えて云った。よく来たね。

5. "Wohin des Wegs ?" *raffte* ich mich auf. Er wies mit dem Daumen rückwärts. [*F. Tieß*]

何処へ行くんだ！と私は躍りあがりながら云った。彼は拇指で背後を指さした。

6. "Deinen Mund wirst du halten," *knirschte* er, "oder ich erwürg' dich." [*Südelmann*]

黙れと申すに、と彼は歯を喰いしばりながら云った。黙り居らぬと息の根を止めてくれよう。

7. "Still, das sind die von Schröters," *stieß* ein Commis den andern an. [*Freytag*]

おい静かにしろ、あれがシュレーター家の人たちだぜ、と手代達はお互いに肘でつつき合いながら私語[ささや]いた。

8. Wohl konnt' er alles nehmen, doch begnügt er sich mit wenigen Freigeschenken. *nannt'* er's, nicht Tribut. [*Goethe*]

持って行こうと思えば何でも持って行かれるのに、彼は極く僅かの好意の印(と彼は言った、貢ぎ物とは云わなかった)のみを以て満足した。

以上のような動詞の用法を一覧すると、動詞そのものの持っている元来の『意味』と、その意味が或種の文脈の中へ這入って来たときに採る『意味形態』(機能と云ってもよく、意局といってもよい)というものとの間には、かなりのひらきが生ずるものだという事がわかります。此の場合の共通の意味形態というのは、『.....と怒鳴った』、『.....と私語いた』、『.....と考えた』、『.....と迎えた』、『.....と飛び起きた』等に含まれている『と』という接続のしかたです。もっと解り易く言うならば、『と云った』という共通の形態です。(『.....と考えた』などもやはりその一種で、説明はすぐ出て来ます。)

これらの動詞用法に共通な機能即ち『意味形態』を御覧になって、同時に私が前章に述べた『接続法定形の接続機能』というものを想起して御覧になると、此の二者の間に或種の関係があるとは思ひになりませんか？もしあるとすれば、それは一たいどんな関係でしょうか？

関係があります。その関係は、チョット妙な関係で、云わば逆の関係です。

即ち、接続法の方にあつては、たとえば *er fahre heraus*. だったら、これは『彼が怒鳴ると』ということになって、問題の『と』が日本語ではうしろについている点に注目を要します。然るに、此の *fährt er heraus* にあつては、『.....と怒鳴る』ですから、『と』は動詞の前についています。これが差です。

この差は何を語るか？この差は、ある種の場合に限って、接続の機能が従属化される文(従属文)の内からではなく、従属化する方の文(独立文)の内からも発動して来るものだという事実を語っています。

少々理屈がやかましくなり過ぎたかも知れませんが、要するにこうした『sagen 型の意味形態』を持ち出したのも、それを接続法の機能と比較したのも、結局はただ例の有名な *Er sagt, er sei krank*. というやつの *sagt* という一語に向かってみなさんの注意を集中せんがためであったのです。というのは、間接話法の講義をしている場合のことだから、お互いの注意が動むすると『間接引用文』たる *er sei krank*. の方にのみ向いてしまって、

Er sagt の sagt という奴を意味形態論的にはっきりと見究める事が怠られ勝ちだからです。こいつがむしろ決定的重要性を持っているのであって、er sei krank. という sei の機能が(『接続法』一般ではなく、その三大意味範疇の一つたる)『間接話法』という特殊性を帯びて来るための必須条件は、もっぱら此の sagt というものの或種の非常に限定された特殊意味形態の方にあるのですから。

そこで一つ、この一見何でもない sagt という奴の意味形態を徹底的に究明して見ましょう。単に sagt だけでは、sagt の意味ぐらいいは誰でも知っているから、あんまりわかり過ぎて却[かえ]って正体がわからない。『意味』がわかり過ぎるということは必ず『意味形態』をわからなくする原因になる。ですから、この一見無邪気な顔をしていて其の癖なかなかなどして一癖も二癖もある sagt という奴が、その『意味形態の側から』は如何に重要なものであるかを深く根本的に究明せんがために、少し厄介だったが只今のような『sagen 型の機能』という特殊現象を紹介したのであります。

そこで、なおもう一度その sagen 型の意味形態という奴に就いて、その正体をはっきり掴むべく努力して見ましょう。そうしていると、そもそも『間接引用文』なるものが結びつき得る基礎文の特殊条件がはっきりとして来、同時にまた『間接話法』なるものの意味形態的特質が、たとい概念的には如何に定義しがたきものであるにせよ、現象としては頗る克明に、さながら手を以て触るが如くに浮かび出るでしょうから。

まず『sagen 型』という名称が必ずしも妥当でないという点を反省しなければなりません。なるほど....., murmelte er [.....と呟いた] ;, polterte er [....と怒鳴った] ;, seufzte er [.....と溜息をついた] ;, grüßte er [.....と挨拶した]などに於いてはそれはまあ殆ど sagte er と同じですから(sagte er murmelnd, sagte er polternd, etc.) sagen 型といってもそう不妥当ではないかも知れないけれども、もう....., schrieb er [.....と書いた] ;, dachte er [.....と考えた]などになると『云う』というのは少し不妥当なのではないか、と一応は反省せざるを得なくなってくる。.....stellte er fest [.....を確認した]などとなると、『云う』というのはちょっとおかしい。この点は皆さんどう思いますか？勿論ちょっとした語学上の注意だけは挿んで置く必要がある。というのは、sagen というドイツ語は、御存じの通り、sprechen とはちがって、必ずしも口に出して『饒舌る』ことではない。それは、....., sagte er sich. 又は sagte er sich selbst [.....と思った]などでもわかる。これは決して婆さんか何かのように、独言をいうのではなく、『殆ど言葉にしたほどの明瞭さを以て念頭で考えること』です。

斯う考えて来ると、sagen という動詞の正体は、必ずしも口に出して饒舌るのではなく、或いは文字でも好い、或いは単に念頭で形成する Satz でも好い、とにかく何等かの形でもって、一つの『主張』『命題』『意志表示』『宣言』等を formulieren することです。近頃の流行言葉では ausführen という。音声で以て ausführen すれば言葉となり、筆を以て ausführen すれば文章となり、念頭の表象を以て ausführen すれば....., stellte er fest [.....と認めた] ;, erkannte er [.....と認知した] ;, erriet er [.....と見抜いた] ;, las er [.....と書いてあった]等々になるわけです。だからまあ、必ずしも sagen の元来の意味ばかりではないが、大体に於いてまあ sagen と同じ場合が多いから、多きに從って全称的一般名称に用いることはよくあることですから、それでまあ『sagen 型』と云ったとしても、そう不妥当ではないというわけになって来るのです。

Er sagte, er sei krank は、こう云ったようなわけで、sagen という動詞そのものが、これから問題にせんとする意味形態の名称その者にまでも用いたいほどの典型的なものなのですから、それでまあ Er sagte に関する限り、あんまり悪口は云わない方が好いだろうと思うのです。

しかし、当面の問題はそんな事ではない。当面の問題はこうした諸種の動詞によって支配される意味形態を、一たい何と云って定義したら好いかです。ドイツ人の学者の著した色々な文法理論書を披[ひら]いて見ると、或いは Aussage、或いは Mitteilung、或いは Feststellung、或いは定跡通りの Indirekte Rede(間接話法)、その他まあ色々な言葉を用いて急場をのがれようと焦っている苦しい様は見受けられるが、少なくとも私の見地を以てすると、まだどうも意味形態という Methode と Einstellung のはっきりしているのには不幸にして出くわさない。此の点は、たとい仰々しい術語は無いにしろ、われわれの日本語、Faust の口調を真似て云うならば mein geliebtes Japanischの方が、此の場合には百のドイツ語・英語・フランス語よりもずっと此の意味形態の定義には適任であ

る。というのは外でもない、多少示唆力が広すぎるかも知れませんが、日本語の『と』という奴です。

詳しい限定はいずれ持ち出しますが、まず一応『.....と』と云う日本語で考えて見ましょう。『と』**形態**の文を支配する動詞(もっとも、実は動詞ばかりではなくて、**nomen actionis** "動作名詞"なども含みますが)と云ってしまえば、先ず定義の代わりになるように思われる。定義よりは、こうした日本語で行きましょう。**Hurra ! 大日本帝国万歳 ! 言霊の幸わう国を見よ ! Wozu in die Ferne schweifen? Sieh, das Gute liegt so nah ! (Faust)** 盡日[じんじつ]春を尋ねて春を得ず、茫鞋[ぼうあい]踏み遍[あまね]し隴頭[ろうとう]の雲、還り来って却って梅花の下を過ぐ、春は枝頭[しとう]に在って既に十分。

ではまあ、ほんの蕾かも知れないが、枝頭の枝を手折って以て間接話法の定義となし、**間接話法とは即ち『と』形態の動詞(或いは nomen actionis "動作名詞")に接続される所の意味形態である**という中間結論を以てこの長々しい論議の一段階と致しましょう。如何となれば、蕾には『まだ開かない』という味があつて非常に乙なところがありますから。それに、開けば一たいどんな花になるかということは、既に只今までの論議に於いて充分にわかつて来たことでもあり、今後と雖もまだ追々発展させる余地がありますから、その方の心配は全く無用だろうと思います。

『なあんだ!』と仰言る方があるかも知れない。**Das also war des Pudels Kern ! (Faust)** 化物の正体見たり枯れ尾花。間接話法の正体は『.....と』にすぎなかったのでしょうか?

ついでに、前に述べた接続法一般の定義をも此の際想い起こして頂きたい。『**接続法とは、接続詞 dass の機能を包含する特殊の定形である。**』dass は、『と』にも当たり、『ことを!』にも当たり、その他まあいろんなものに該当しますが、そのうちの『と』というのに最もよく相当するのが、此の間接話法という意味形態です。

間接話法又は引用等の名称に就いて

けれども、此の『と』という特徴付けは、とにかくあんまり簡単すぎて、示唆力には富んでいるが、一面また色んな誤解の因になる惧[おそ]れがあるから、もう一度突っ込んで、もう少し詳しく正体を究めなければなりません。殊に危険なのは、本当は間接話法だけのものでなければならぬ此の『と』が、あまり広く用いるという、そもそも接続法一般の特徴になりそうな性質を持っている点です。しかしこれはむしろ当然なので、本節の初めにも述べた通り、間接話法は単に接続法用法の三範疇中の一つたるのみならず、同時にまたその最も主なるもの、即ち謂わば接続法その者のようなところをも持っているのですから。

『と』でもって主文章に結びつけられる文章(er sei krank 等)の意味形態を云い表わす術語に『間接引用文』というのがあります。これは、たとえば Ich bin krank, sagte er 等の『直接引用文』に対してそういうのです。此の『間接』とか『引用』とか云ったような特徴付けに対して多少の批判を加えて見ると、やはりまた国粋の日本語の方に帰らなければならない事がわかって来ます。

まず抑々間接引用文などという形容は、此の語法の実例の場合に照らして見ると、本当は頗る肯綮に中っていないような氣のすることがあります。文法の教科書ではなるほど先生に都合の好いように Er sagt, er sei krank とか Er behauptet, er wäre krank とかいったような、いわゆる『誰かの言葉の引用』と称されるような場合だけを持って来て、それが凡てであるかのように片づけてしまうこともできそうですが、少し実地の例に衝[あた]って見るというと、『間接』とか『引用』とかいう言葉には、そうぴったりとは該当しないようなものがいくらかでも飛び出して来る。Sie erriet, er wolle von ihr fort(彼女は、彼が彼女の許を去ろうとしているのだと見抜いた)とか、Er vermutete, sie wäre noch nicht so weit fort.(かれは、彼女がまだそんなに遠くへ行ってしまうてはいないだろうと推測した)とかいった場合に於いて、er wolle von ihr fort 等を、間接引用と呼ぶのは、かなり無理なように思われる。

けれども、茲は考えようで、考えようによっては『引用』と云ったって差し支えはありません。引用というのは、必ずしも言葉の引用ではなくて、前に sagen について云ったように、『念頭の考え』を引用するということも云えるからです。Sie erriet, er wolle von ihr fort. ならば、換言すれば Sie erriet : "er will von mir fort" (直接引用)であつて、引用

符に囲っても差し支えないほどのものは、要するに引用です。だからまた『引用符』というのです。それを『間接引用』というのは、たとえば今の例で、直接引用ならば von mir となる可きところが、von ihr となっているのでもわかる如く、すべての関係が、『話し手』の立場から間接に規制されて来ることをいうにすぎないのです。----要するに、『間接引用』という言葉は、これを必ずしも『他人の言葉を引用して単に伝達する』と云ったような狭い意味に解しないで、引用という語をもっともっと広く取るとするならば、決して捨てたものではなく、なかなかよく問題の文の意味形態を云い表わしているのではないかと思います。困るのは、矢張り学校用の簡単な文法教科書という奴で、こいつでは、少々間違っている構わない、とにかくすぐ学生にパッとわかることを言わなければならないから、例の Er sagt, er sei krank (彼は、本当のことはどうだか知らないが、自分ではとにかく病気だと称している) などという、いわばまあ一つの特例な場合だけをもって来て、その外の場合のことは問題にしないで置くということになる。その結果、『他人の言葉を引用して単に伝達する』といったような、あまりにもはつきりし過ぎた限定が一般化されて、それが到る所で害毒を流すことになる。

此の点、学説という奴は、いわば『噂』とか『迷信』とかいうものに非常によく似ている。噂と迷信とは、特殊化されるほど人は之れを信ずる。何々上等兵は十人敵を斬った.....では信用がない。十一人斬った.....というモウ人は信ずる。猫を殺してその肝をとってたべると長生きすると云ったって人はなかなか信じない。『満月の夜』に猫を殺して『すぐその晩に』肝をたべるのだ.....というともうだいぶ信じたくなる心理がある。学説もそれです。妙なところをはつきり決めてやると素人は安心して信ずる。----

『他人の言を引用して単にこれを伝達する』という説明法にも多少そういうところがないではない。勿論まあ必ずしもそんな心理ばかりでもありますまい、此の場合はまあ、特殊化するほど誰にでもよく解るから、よく解ることは信ぜられるとしたもので、そのために有名になってしまったものなのでしょう。

要するに、間接引用という意味形態をそういう風に定義してしまうのは、いずれにしる特殊化が少し行き過ぎたものと断ぜざるを得ません。学校様としてはこれが一番有効なのですが。

それよりは、やはり既に獲得した『.....と』という一言不可説、不立文字的定義を諦視して、禅定一番、以て此の不可説なる一言に多少の面目を具備せしめると云う方針の方が好い。然らば問う：『と』とは何ぞや？

『と』とは何ぞや？

『.....と』とは即ち『趣き』である。『旨』である。『由』である。(蕾のことですから、よほどそっと開かないと毀れます：Sachte, sachte !)

すぐ実験をして見ましょう。たとえば、例の直接引用で Ich bin krank, sagte er というのを例にとって、これを Er sei krank, sagte er と改めて見る。こういう云い方は、引用が『間接』になったために、ドイツ語の感じでは多少鋭い『直接さ』が無くなって、ちょうど日本語で『彼は己が病気なる旨を述べた』とか、『病気の趣を述べた』とかいったような感じになる。勿論まあこんな微妙な語感の問題が本当にわかるためには、既に接続法に対する感じが相当あることが先決条件なのですが、その点はまあ私の講義法の矛盾なので致し方がありません。

なおもう一つ突っ込んだ例をあげて見ます。"Ich bin krank," sank er in die Kissen zurück. ("俺は病気だ,"と彼はぐったりクッションの中にうずくまってしまった。)という、例の sagen 型の動詞に支配される直接引用をとって考えて見ましょう。こんどは大分様子がちがう。語感の目安はやはり『趣、旨、由』です。日本語で『彼は彼が病気なる旨クッションの中へぐったりとうずくまってしまった』はどう見てもおかしい。だからこんなのはドイツ語でも Er sei krank, sank er in die Kissen zurück は少々附会の感がある。Er sank in die Kissen zurück, er sei krank は益々おかしい。前者はまだ sagen 型動詞の面目を其の背後方に於いて存しているから、まだ多少受け取れるが、後者は純間接話法的接続になるから断然おかしい。何故おかしいか？それは、間接話法の意味形態が"趣" "旨" 或いは "由" という意味に於ける『と』だからであります！

なおもう一つ例を挙げて見ます。今までののはすべて『動詞に支配される間接話法』で

したが、こんどは『名詞に支配される場合』です。たとえば Die Seele ist unsterblich という命題を、なにか名詞につけて見る。直接引用でならば、Der Satz : "Die Seele ist unsterblich" (靈魂は不滅なりという命題)とか、Der Titel : "Die Seele sei unsterblich" とか、その他いろんな名詞に支配させることができるでしょう(文法上の術語として、こうした従属化現象を支配 "regieren," --"Rektion"と申します)ところが、これらの句を間接引用として『接続』せしめることになるというと、これまた矢張り『趣』『旨』『由』を目安にして決めることになります。『靈魂は不滅なる由の命題』(Der Satz, die Seele sei unsterblich.)は、『命題』が本当に形式的な命題ではなくて、『主張』と云う意味ならば、語感の上でも承服できるでしょう。『靈魂は不滅なる旨の仮定』(Die Annahme, die Seele sei unsterblich)に対しては何等異議のあろう筈はありません。仮定や学説(Theorie)や、推定(Folgerung)は凡て『趣』を有し、『旨』を有し、『由』を有するものですから、これらは最も間接話法を用いるに適している。ところが、最後の Der Titel(標題)はどうでしょう?『靈魂は不滅なる由の標題』(Der Titel, die Seele sei unsterblich)なんてのは、普通にはちょっとないことで、少しおかしい。もつとも『標題』という意味が、単に標題だけではなくて、多少言外の意をもこめて、主張とか、意見とかいう意味で云われているなら別ですが、普通単に『標題』と云えば、人は先ず『文字』と『文句』だけしか考えない、『趣』や『旨』や『由』までは考えない。Der Titel, die Seele sei unsterblich というドイツ語が少しおかしくて、やはり直接引用で Der Titel : "Die Seele ist unsterblich" でなければならない理由は、これまた矢張り間接話法の本質が『趣』にあり、『旨』にあり、『由』にあるからであります!

接続法一般と間接話法なる特殊範疇との間の意味形態論的相違

これで同時に先にちょっと問題にした『と』に関する一抹の不安、即ち『単に"と"と云っただけでは、あまりに簡単すぎて、うっかりすると間接話法という特殊形態を、そもそも接続法なるものの一般と混同させてしまう惧れがありはしないか.....』と云う不安は解消しました。『趣』『旨』『由』ならば決して他の要求話法や約束話法まで包含してしまう危険はない。

『誰かの言を伝達する』という考え方はあまりに特殊化が行き過ぎると申しましたが、こんどの『趣』『旨』『由』ならば決して特殊化が行き過ぎはしない。同時に行き足りなくもない。丁度行くべきところへ行っており、しかも行く可き所へだけしか行っていない。

いずれ各論に這入ってから此の定義の包含するところの諸種の場合、及び此の定義から生じて来るところの諸種の結論を、あらゆる角度から論じて行くことになりましょう。

----第 二 節----

間 接 話 法 各 論 [1]

では愈々間接話法を色々な角度から眺めて行く事に致します。

間接引用文表現の標準的諸形式

先ず、所謂間接引用文なるものの表現形式にはどれだけの種類があるかという問題です。また例の有名な Er sagt, er sei krank を例に取って考えて見ますと:

- | | |
|--------------------------------|---------------------------------|
| 1. Er sagt, er ist krank. | 8. Er sagt, dass er krank sei. |
| 2. Er ist krank, sagt er. | 9. Er sagt, dass er krank wäre. |
| 3. Er sagt, er sei krank. | 10. Er sei krank. |
| 4. Er sei krank, sagt er. | 11. Er wäre krank. |
| 5. Er sagt, er wäre krank. | 12. Er soll krank sein. |
| 6. Er wäre krank, sagt er. | 13. Er ist krank. |
| 7. Er sagt, dass er krank ist. | 14. Er will krank sein. |

小先生：おい、ちょっと待った！黙って承わっていると、だいぶ人を甘く見ているらしいぞ。僕は、文法こそ得意ではないが、ドイツ語そのものには相当接しているから、多少語感というものがあるからね。文法学者が説明の都合上発明する或種の文例には多少異議がある。たとえば、只今の分類のそもそも最初の *Er sagt, er ist krank* なんてものはドイツ語には無いと思う。sei 又は wäre を用いるか、或いは dass を用いるか、ならばピッタリ来るが、*Er sagt, er ist krank* なんてものは、これ蓋し凡ゆる場合を列举せんとする形式的努力の人工的所産だね。

大先生：そうか、いや文法学者を以て任じている者が往々にして牽強附会な文例を作って学習者に押しつけることがあるという事は事実だ。しかし、文法学者たらざる事を以て任ずる者の語感なるものが正しいかどうかは、これまた自ずから別問題だぜ。たとえば論文ばかり読んでいて、日常の会話などというものは一度も聞いたことがないという語感もあり得る。そういう語感が、たまに小説でも読んで *Er sagt, er will nach Amerika* (彼はアメリカへ行きたいと云っている) とか *Er sagt, er kann nicht weiter* (彼はもう閉口たれたと云っている) とか *Er sagt, er ist krank* とか云ったものに接すると、これはどうせドイツ人が書いたものだから正しいのだろう.....と思って曖昧に通過してしまうが、文法学者がその同じ文例を挙げるといって、急に批判的になって、語感のなんのと、文法学者以上に文法学者たらしとする.....

小先生：よし、わかった！根拠があるのなら別に異議はない。----では、それはそれで好いとして、*Er sagt, er ist krank* なるものを『間接引用』と呼ぶのはどういうわけだ。ist となれば、これは直接引用ではないのかね？

大先生：直接引用というのは *Er sagt: "Ich bin krank"* だよ。本人の直接の言ならば、『かれ』が自分自身のことを『かれ』というわけではないだろう。

小先生：ああそうか、それはちょっと考え違えをしていた。

第一式と第二式の使い分け

扱て茲[ここ]に一つの重要な問題は、*Er sagt, er sei krank* と云うことも出来、*Er sagt, er wäre krank* と云う事も出来るとするならば、此の「第一式」(sei)と「第二式」(wäre)との間にはどんな相違があるかという点です。この問題は、ちょっと簡単に断言してしまうわけには行きません。というのは、此の問題には、他の色々な問題が関係して来るからです。たとえば、只今の sei か wäre かという場合だけについて云うならば、どっちを用いようと大した相違はありません。ただどちらかというと

sei[第一式]の方が『文語的』で、正格な感じを与え、

wäre[第二式]の方は『口語的』で、volkstümlich な感じを与えます。

たとえば新聞などで報告がしてあるときには、大抵 sei が用いてあります。公用文書などは勿論です。wäre の方は、いわば一寸『砕けた』感じを与えます。子供が使いにやって来て、お父さんが病気だから今日は来られません、などと云う際には、*Er sagt, er wäre krank, er könnte nicht kommen* というのが自然で、*er sei krank, er könne nicht kommen* という子供があるとしたら、その子供は少しませ過ぎていて、まるで『本に書いてあるようなドイツ語を喋舌る』という感じを与えます。そんな子供が絶対に無いとは云えませんが、しかし子供はまあ大抵 wäre, hätte, käme, ginge, könnte, müsste で饒舌としたもので、子供だけではない、田舎の純朴な人たちはみんなそうです。だから小説家などが、こうした民衆的な気分を出そうとする時には、当然 könne や sei を避けて könnte や wäre を用いることになる。小説家自身は sei, könne を用いつつ、中の人物には wäre や könnte を用いさせることになる。

第二式の土着的・民衆的・通俗的な色彩

これは、微妙な語感の問題ですが、たとえば次のような、ごく volkstümlich な詩を読んで、斜体で表わした第二式をそれぞれ第一式に改めるとしたらどうでしょう？風土と通俗を愛するドイツ人の語感断然これに逆らうに違いありません。(面白い詩です、父母に云いつかって誕生日のお祝いの言葉を述べに行った子供が、余分なことばかり云

って、肝心の用事をほんの序でみたいに、一番最後につけ足すところが、子供のそっかしさをうまく表わしています。)

Der Geburtstagsgratulant ----Julius Lohmeyer----

Guten Morgen, *sollt* ' ich sagen
und ein schönes Kompliment,
und die Mutter *ließ* ' auch fragen
wie der Pate sich *befänd* '

先ず小父ちゃんに『今日は』と
云わなきゃ駄目だと云われたの、
それからママが小父ちゃんの
様子を訊ねておいでって。

Und der Strauß *wär* ' aus dem Garten,
wenn ihr etwa danach fragt,
an der Tür dann *sollt* ' ich warten,
ob ihr mir auch etwas sagt.

それからその、此の花束は、
おうちの庭の花だって、
それから、何と仰有るか、
待ってて御覧て、そ言ったの。

Und hübsch grusen *sollt* ' ich jeden
und ganz still sein, wenn man spricht,
und recht deutlich *sollt* ' ich reden,
aber schreien *sollt* ' ich nicht.

それからみんなにお叩頭[こうとう]して、
一人で喋舌っちゃ不可ないって
云うならハキハキ云わなくちゃ、
然し怒鳴っちゃ駄目だって。

Doch ich *sollt* ' mich auch nicht schämen--
denn ich *wär* ' ja brav und fromm--
nur vom Kopf die Mütze nehmen,
wenn ich in das Zimmer komm '

だけど、坊やおとなだから、
はにかむ事は要りやしない、
お部屋の中ではその代わり
帽子をちゃんとお脱ぎって。

Wenn mir eins was schenken *wollte*,
sollt ' ich sagen : Danke schön !
Aber unaufhörlich *sollte*
ich nicht nach der Torte sehn.

それから、何か貰ったら、
『ありがとう!』って云わなくちゃ、
だけど、あんまりしげしげと
お菓子を眺めちゃ駄目だって。

Und hübsch langsam *sollt* ' ich essen,
stopfen *wär* ' hier gar nicht Brauch.
und--bald *hätt* ' ich es vergessen--
gratulieren *sollt* ' ich auch.

それから、ゆっくり喰べなくちゃ、
頬張ったりなどしちゃ駄目で.....
それから.....ええと.....ああそうか、
小父ちゃん、どうもお芽出度う。

これを、たとえば Guten Morgen, solle ich sagen などと、第一式接続法を用いたとすれば、それはとんでもない気分のぶっこわしで、*sollte* が用いてあるのは必ずしも詩調の関係ばかりではありません。

強変化形の第二式は特に好まれる

それに、同じ第二式と云っても、*wäre*, *hätte*, *gäbe*, *käme*, *ginge*, *stünde*, *stände* *bliebe*, *dähte* 等の形と、*liebte*, *sagte*, *antwortete*, *machte* 等の形との間には、用法上に多少の差があるように思われます。たとえば：

[A] Er sagt, er komme bald. [B] Er sagt. er käme bald.

[A] Er sagt, er denke anders. [B] Er sagt. er dächte anders.

等にあつては、A と B とは両方とも用いられますが：

[A] Er sagt, er liebe mich. [B] Er sagt. er liebte mich. [?]

[A] Er glaubt, er mache es recht. [B] Er glaubt. er machte es recht. [?]

等にあつて、[B]の方は普通用いられません。つまり、弱変化規則変化形にあつては、斯くの如き三人称単数形に於いて *liebte*, *machte* を用いることは、少し固い感じを与えるのです。それに反して、強変化(*käme*, *sähe*, *gäbe*, *bliebe*, *stiege*)の方は、殆どその綴りの関係が第一式(*komme*, *sehe*, *gebe*, *bleibe*, *steige*)と同じであり、固い *t* が入りませんか

ら、第一式で間に合う時にも、わざわざ用いられる傾向があります。つまり『柔らかい』のです。

たとい強変化ではなくとも、*hätte, dächte, sollte, müsste, wollte, könnte, wüsste* 等も亦、強変化と同じ位、好んで用いられる傾向があります。

一たい不規則変化の *käme* や *ginge* や *sähe* などの形、また *hätte, wüsste, dächte, sollte, wollte* などに較べると、普通の動詞の第二式 (*machte, liebte, fragte, wartete* など)、なる可く使わないように使わないようにと忌避される傾向があります。それに反して強変化の *käme, sähe* など、及び、たとい弱変化又は混合変化であるにしても助動詞の第二式は、どちらかと云うと好んで用いられるようです。その原因は、やはり *machte* や *liebte* は直説法の過去との区別がつかないからという点にあるのでしょう。そう云えば *sollte, wollte* などと直説法の過去とは同形ですが、これらは習慣上度々出て来るから、第二式らしく感ぜられる度が強いとでも申しますか。とにかく多くドイツ語に接していると、そうした語感上の区別がかなりはっきりと支配している事がわかってきます。

通則：間接語法は、原則としては第一式を用い、第一式が直説法と同形になる場合に於いて第二式を用いる。

と云ったように、まあ色々と厄介な事があって、此の「第一式を用いるか第二式を用いるか」という問題は、そう簡単に断言できないのですが、まあ大体に於いて通用する通則のようなものを立てるとすれば、そういう見地からどういう事を云ったならば最も重要な筋道に触れるでしょうか？----ここで愈々、初歩文法の縄張りに踏み込む事になります。

初歩文法を充分御存じの方は暫く御退屈様ですが、少しでも危なっかしい方々は、この項目だけは充分注意してお読みをねがいます。

たとえば、『かれは、自分が正しいと信じている』という作文をしてみます。

[A] *Er glaubt, er habe recht.*

[B] *Er glaubt, er hätte recht.*

これは既に前に申し上げたところに依って、両方とも正しいのです。けれども *hätte* は、只今申し上げたように、『好んで用いられる型』(即ち *wäre, gäbe, käme, bliebe* 等)に属するからこそ用いられるのですが、凡ての動詞が斯うとは限りません。どの動詞にも通ずるようにいうならば、第一式 *habe* の方が本格的なのであって、第二式 *hätte* の方は、多少 *volkstümlich* な砕けた形として考えるべきです。ところが、

[A] *Er glaubt, ich habe recht. (?)*

[B] *Er glaubt, ich hätte recht.*

となるというと、[A]の方は、*ich habe* は直説法形でもありますから、特に間接語法らしいところがなく、直説法と混同されます。此の点、第一式という奴は、形式の上に欠陥があるので、*ich, wir, sie* 等の場合には、大抵の動詞では、直説法と同形になってしまうのです。それ故、此の場合は専ら[B]の方のみを用います。

もう一つ作文をしてみます。『かれは、人がかれを尊敬すると信ずる』

[A] *Er glaubt, man ehre ihn.*

[B] *Er glaubt, man ehrte ihn. (?)*

これは、既に述べたところによって、[B]の方は過去と混同の恐れがあるから、[A]の方のみを用います。ところが、*man* を *die Leute* と変えるとどうでしょう？

[A] *Er glaubt, die Leute ehren ihn. (?)*

[B] *Er glaubt, die Leute ehrten ihn.*

[A]の方は、接続法たることを形の上で見せられないから、どうしても[B]の方が用いられることになります。直説法の過去と同形になる恐れはあるが、それはまず已むを得ないわけで、所謂 *von beiden Übeln das geringste* を採ることになるのです。

なおもう一つの例、こんどは、最後に残った単数二人称と複数二人称です。たとえば『かれは、君[達]のやり方が間違っていると云っている』ならば：

[A] *Er meint, du machest es verkehrt.*

Er meint, ihr macht es verkehrt.

[B] *Er meint, du machtest es verkehrt.*

Er meint, ihr *machtet* es verkehrt.

の、二つの行き方があるわけです。[A]の方は、直説法と区別して、eを入れた形の第一式を用いる法、[B]は、第二式を用いる法です。けれども、この[A]の方は、抑々 *machest* とか *machet* とか云う形が、多少人工的な、多少 *papieren* な感じを与える、あまりに文法的な形なので、実際としては、接続法らしい感じを与えんがためにはやはり[B]の方を採ることになります。況んや『彼は、君達がぐずぐずしていると云っている』：

[A] Er meint, ihr *wartet* zu lange.

Er meint, ihr *zögert* zu lange.

[B] Er meint, ihr *wartetet* zu lange.

Er meint, ihr *zögertet* zu lange.

等になれば、[A]の方は直説法と完全に同形になってしまいますから、接続法らしく聞かせる為には、第二式を用いる以外に方法はないという事になります。

以上の分解によって大変明らかになったと思いますが、なにしろ弱変化動詞の第一式接続法形という奴は、特徴が貧弱で、大した用途がないと云ってよろしい。今問題になっている間接話法はまあ第一式の貧弱さを第二式によって補って行くことができますが、『必ず第一式を用いる』と決まっている『要求話法』にあつては、そうした遣り繰りが利きませんから、其処で *mag* とか *möge* とか *möchte* とか *soll* とか云ったようなもので其の欠を補うことになってすこぶる厄介なことになって来ます。

こういう風な関係ですから、たとえば *lieben* の間接話法としての接続法形はどんな人称変化表になるかと申しますと：

ich *liebte* [Ⅱ] wir *liebten* [Ⅱ]

du *liebest* [Ⅰ] ihr *liebet* [Ⅰ]

liebstest [Ⅱ] *liebtet* [Ⅱ]

er *liebe* [Ⅰ] sie *liebten* [Ⅱ]

と云ったような、継ぎはぎだらけのみっともないものが出来上がります。強変化動詞も同じで：

ich *sähe* [Ⅱ] wir *sähen* [Ⅱ]

du *sehest* [Ⅰ] ihr *sehet* [Ⅰ]

er *sehe* [Ⅰ] sie *sähen* [Ⅱ]

ところが *wissen* などになると：

ich *wisse* [Ⅰ] wir *wüssten* [Ⅱ]

du *wisest* [Ⅰ] ihr *wisset* [Ⅰ]

er *wisse* [Ⅰ] sie *wüssten* [Ⅱ]

と、やや第一式が多くなり、次ぎに *sein* になると、これは全部 *sei*, *seiest*, *sei*, *seien*, *seiet*, *seien* と、第一式のみでよくなります。但し、この動詞は、既に申し上げたように *wäre* の形が非常に柔らかくてよく用いられるために、間接話法は *sei* でも *wäre* でも大して違わないという習慣がありますから、こう考えて来ると、何しろ形の問題は非常に厄介な事になって来るわけです。

『継ぎはぎだらけの変化表』という奴は、語学なるものの見地からは非常な意義を持っています。既に英語の方でも、たとえば『未来の変化』が、*shall* と *will* との寄せ集めで：

I shall die *We shall die*

Thou wilt die *You will die*

He will die *They will die*

しかも質問形になると *Will you die?* ではなくて *Shall you die?* でなくてはいけないと云ったように、なかなか厄介なことになって来る。そんな事を云えば英語ばかりではない、既にドイツ語の *ic bin*, *du bist*, *er ist*, *wir sind*, *ihr seid*, *sie sind* という『変化』が、元を洗えば『変化』ではなくて、実は寄せ集めです。只今でこそ、丸暗記をして、変化のつもりでいるが、これを変化と呼ぶのは本当は妙な話で、----もっとも、日本語の『変化』は此の場合にはむしろ適しているかも知れません。ところがドイツ語でいう変化 (*Flexion*) というのは、転尾、転化ですからね。

実例として、第三人称の単数と複数とが交々現われて来る場合に、第一式と第二式とを使いわける模様を一つ紹介しておきます。斜体は第一式(三人称の単数)、下線文字は

第二式(三人称複数)です。

Im Sommer 1915 fielen uns die ersten feindlichen Flugblätter in die Hand.
1915 年の夏に敵の最初の宣伝ビラが我々の手に入った。

Ihr Inhalt war fast stets, wenn auch mit einigen Abwechslungen in der Form der Darstellung, derselbe, nämlich, dass die Not in Deutschland immer größer *werde* ; die Dauer des Krieges endlos *sei*, während die Aussicht, ihn zu gewinnen, immer mehr *schwinde* ; das Volk in der Heimat sehen sich deshalb auch nach Frieden, allein der "Militarismus" sowie der "Kaiser" erlaubten dies nicht ; die ganze Welt----der dies sehr wohl bekannt *sei*----führe deshalb auch nicht den Krieg gegen das deutsche Volk, sondern vielmehr ausschließlich gegen den einzig Schuldigen, den Kaiser ; der Kampf *werde* daher nicht früher ein Ende nehmen, bis dieser Feind der friedlichen Menschheit beseitigt *sei* ; die freiheitlichen und demokratischen Nationen würden aber nach Beendigung des Krieges das deutsche Volk in den Bund des ewigen Weltfriedens aufnehmen, der von der Stunde der Vernichtung des "preußischen Militarismus" an gesichert *sei*.
[Adolf Hitler : *Mein Kampf*. I. B.]

叙述の形式は其の都度多少目先が変わっているにせよ、内容は殆ど何時も同一で、要するに独逸の困窮は益々甚だしくなる一方だ、戦争はまだまだ急なことでは終わらない、しかも勝てる見込みは追々無くなって行く、だから銃後の国民も和平の到来を希っている、ところが軍国主義、皇帝というものが之れを許さない、全世界もこの事をよく知っているから、決して独逸国民を相手に戦争をしているわけでないのだ、ただ専ら責任の当事者たるカイゼルを相手に戦っているのだ、故に無辜の人類の敵たるカイゼルを倒すまでは戦争を止すわけには行かない、自由を愛する民主主義諸国は、戦後に於いては、永久世界平和の連盟を組織して独逸国をも其の一員として迎えるであろう、其の連盟は、プロシャ軍国主義打倒の瞬間に於いて確立するのである云々。

意味形態中心論の原理：形が意味を有するに非ず、意味が形を取捨するなり。

こうした不規則現象が、語学一般の見地から見て、一つの重要な意義を帯びているというのは、つまり、その『意味形態が文法形態を圧倒している』という点にあります。言語の研究には、とにかく形から出立して其の意味用法を規定せんとする悪傾向が多い。私は之れを悪傾向と呼びたい。たとえば、日本語でなら、『が』と『は』とはどう違うか？と云ったようなことから出立して文法を研究しようとする。ドイツ語でなら、第一式 *sei* はどう云う場合とどう云う場合に用いるか、第二式 *wäre* はどんな場合に用いるか？と云ったような出立のし方をする。単なる学問的興味からやるのは構わないが、実用的見地から云うとこうした考え方は、そもそも出立点が間違っている。方向が逆です。『意味形態』を中心として、それから其の意味形態を表現するためにドイツ語では現在どの形とどの形とを用いているか、という風に考えないで、逆に、茲にこんな変な形が一つころがっているが、これはいったいどんな時に用いるのだろうか？などど考えるから、何でもない事が無限にむずかしくなってくるのです。抑々、言語の発展して行く経過そのものが、決して『形』から意味が生まれたのではなく、こういう意味を表現したいという要求の力が先にあって、(しかも其の要求は割合簡単で、分類して行けば極く透明なシステムを持っています。いずれにせよ『形』の方ほど複雑なバラバラのものではありません)其の形式が、謂わば手当たり放題に、何でも都合の好いものを採ったり捨てたりしながら用を足して行くきりの話です。

或る人の家に行くと、玄関のところに、大きな二尺ざしが転がっている。玄関に二尺ざしを置いておくなんてのはちょっと妙だが、よく見てみると、なるほど首肯できる。第一、玄関の格子に鍵がないので、その二尺ざしを一寸突っかいにすると、格子が開かないようになっている。しかも、主人が靴を穿く時に、その二尺ざしを踵のところにに入れて穿き、それからヒョイと抜いておっぽり出す。つまり、長いから、立ったままで靴が穿けるのです。そうかと思うと、主人はその物差しを頸のところから背中の中へ突っ込んで、ガリガリと背中を搔いていることもある。----こうなると、二尺ざし一つでも、

その用途は中々複雑です。そうかと言って、二尺ざしの用途を全部研究して一冊の本にする.....そんな馬鹿なことはない。実用的見地から云うならば、むしろ『意味形態』の方から考えた方がいい。意味形態ならばそう沢山はない。一家の中でも、『戸締まり』とか、『靴を穿く』とか、『背中が痒くなる』とか、『子供のお尻をひっぱたく』とか、とにかく一家の生活に起こって来る場合は、沢山あるようで実は非常に簡単です。その方がわかれば、物差しの用途ぐらいわけのないことです。甲の家では物差しで物の長さを計る、乙の家では子供のお尻をひっぱたく、それぞれ固有の癖はあるけれども、決して人間にわからないほど不思議な用い方はしない。物差しを中心にして考えるから奇異な『ガクモン的』感じを与えるので、子供の教育、戸締まり、と云ったような方面から出立して考え、一方其の家に二尺ざしが転がっている事実を知っていれば、用法はおのずから明瞭でしょう。物差しに用途あるに非ず、用途が物差しを採ったのです。形が意味を有するに非ず、意味が形を取捨して文法を作ってしまうのです。お隣の英語では物差しがないから *sollen* と *wollen* とで表現している。こっちには物差しがあるから *werden* を用いる。接続法の問題もほぼ同じです。

物事の実際関係が斯くの如くでありますから、文法も亦これに依るのが最も合理的であり、実用的です。ただ間接話法に関する限り、英語の *I shall, you will* のようなわけには行かないので、こうした複雑な表を一つ一つ暗記させるということは至難であり、且つ又 *unzweckmäßig* ですから、その代わりに、全部を一貫する指導方針、即ち『第一式を用いても決して直説法形と混同する恐れのないところに於いては、(*sein, kommen* 等は多少例外として)なる可く第一式を用いる、但し、直説法と同形になるところでは第二式を用いる』という原理ならびに其の実地応用に徹せしめる、というのが最もよい方法であります。

では、そもそも接続法の全般を通じて、第一式なら第一式が、どういう用途を持っているか？などという事を考えるとすれば、それは、只今も述べた如く、これは考え方そのものが間違っているのであって、間違った考え方は結果の混乱によって罰せられます。即ちそうした考え方で考えて行くというと、接続法の用途というものが、単に複雑になって来るばかりでなく、全体として非常に無統制なものになって来るのです。接続法の研究だけは、意味形態から出立しないと絶対に統一は生じません。

天に口無なし、人をして語らしむと云いますが、メトーデに口なし、結果をして語らしむと云いたいところです。----人間ならば相手が馬鹿な問い方をして来た際には嘲笑を以てこれを罰します。自然は、嘲笑しない代わりに、結果の混乱を以て馬鹿な研究を罰するわけです：

Auf Frag' ohn' Sinn folgt Antwort ohne Sinn.

----Hofmannsthal : Der Tor und der Tod----

----第 三 節----

間 接 話 法 各 論 [2]

前節の終わりに述べた趣旨に従って、言語現象の一段奥に潜む『意味形態』というものを探り当て、其処から出立して、さて此の形態を表現する手段としては如何なる形式と如何なる形式とが現在用いられているか？という風に研究して行きますと、(こうなるともうドイツ人の書いた文法書はみんな落第で、個々の事実を調べるためには好いが、システムや考え方の上では、むしろドイツ人でない我々の方が、ドイツ人でないが故に適任であるということになって来るのですが)-----そうなるというと、第一式をどう用いる、第二式をどう用いる、どころの問題ではない、むしろ抑々『接続法』それ自身すら当分は無視して考えた方が意味形態がはっきりするということになって来ます。身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれと同じことで、姑[しばら]くは接続法を無視して考えて見ることが寧ろ接続法を本当に明らかにする所以[ゆえん]なのです。

だから、驚いてはいけません、これからの講義には一步一步何が飛び出して来るかわからない、助動詞の用法を説くかと思えば、前置詞・副詞の用法が問題になる、或いは文章論一般が俎上に上がる、或いは単なる一つの熟語成句が問題の焦点に立つ.....しか

しそれら凡てはみんなそれぞれ其の時々『意味形態』の機能なのです。人類共通の『意味形態』なるものは、必ずしも吾人が特に興味を有する一具体的文法形式だけを尊重しては呉れない、こいつの立場からは接続法も助動詞も熟語も単語も一視同仁でなければなりません。

Ich hoffe, die Gefahr ist vorüber.

一つの意味形態には一つの形式しか無いという誤った考え方には、こういう例が非常に好い薬になりましょう。『そうだ、接続法などは使わなくても好い場合があるのだ！』と気のつく人や、或いは『こうなると接続法の間接話法的用法というものの範囲が混乱してわからなくなるぞ！』と思って迷宮に入る人や、その人その人の考え方(頭の中に存する自然な筋路、即ち意味形態!)によって色々な反応が起こるでしょう。ところで、此の反応が意味形態論的見地から非常に面白いので、困惑するにせよ、自己是正をするにせよ、何故抑々困惑するか、何故抑々是正しなければならないかと考えて見れば、それは取りも直さず『其の人達の頭の中には何かこう共通な考え方、即ち意味形態というものがあったのだ、そして其の意味形態が、自分を表現するドイツ語の文法形式は、間接話法的接続法か、**dass** か、なにかだと思って一生懸命にそうした形式に嵌まり込んでいたのに、そうでないものが飛び出して来たためにビックリしたのだ』と云う事実の証明です。もし吾人の言語意識の基礎に意味形態という範疇が活発に活躍していなかったならば、吾人は恐らくどんな言語形式を見てもおどろきはしますまい。それが証拠に意味形態のあまり発達していない未開人や子供はどんな形式にも愕きはしない、したがって覚えるのも早ければ、云い違えることも少ない。意味形態の四通八達[しつうはったつ]しているインテリほど一步一步驚いてばかりいる。十年ドイツにいて毎日 **Ich hoffe, die Gefahr ist vorüber** と聞かされても、自分で云うとなると、耳に相談しないで念頭の意味形態に先ず相談するから、**Ich hoffe, dass die Gefahr vorüber sei.....**か、それとも **ist.....**か? と考える。勿論それでも決して間違いではないが、この少々『概念的』な物々しい構造でわかる通り、どうしても自分の考えた意味形態が『完全に表現し尽くされる』ような文法形式でないと、念頭に斯くも活発に姿を現している『意味形態』に対して申し訳がないような気がするのでしょうか。これを以て見ても、意味形態というものが如何に露骨な具体的な、さながら手を以て触れ得る程に脳裡に蟠踞[ばんきょ]している重大問題であるかがわかんと思います。-----もっとも、意味形態を云々するには、二三の国語をよく知って、少なくとも母国語の特有癖と混同しないようにする必要がある。即ち、我々でいうならならば、**Japonismus**(又は **Japonizismus**) [日本語の特有癖]なるものをうっかりすると其の儘人類共有の筋路(意味形態)だと決めてかかると云う危険が多分にあるのです。併し、危険の存在は必ずしも筋路の存在を否定するものではない。道路があることを余程ははっきりと認めているからこそ『危険』という批評が生じて来るのでしょうか。

では本題にかえて **Ich hoffe, die Gefahr ist vorüber** ですが、この形式は『主として』言者自身、即ち一人称が或る事を信ずる場合、或いは意局の上で殆ど一人称的確信と云って差し支えない様な場合に於いて最も適当しています。

[1] *Ich finde eigentlich, die Dinge auf Erden sind sehr ungleich verteilt.*

[2] *Ich sehe, Sie haben irgend ein Geheimnis vor mir, mein Lieber !*

[3] *Ich wette, der Täter befindet sich noch in der Nähe, er verweilt sogar unter uns.*

[4] *Ich fürchte, du gehst für immer von mir und ich sehe dich niemals wieder !*

[5] *Ich wusste gleich, dieser Mensch wird mich noch einmal arg verraten !*

必ずしも形式的に一人称が主文章にある必要はありません。たとえば **Sie sehen, ich mache mich darauf gefasst !** (御らんの通り僕は覚悟しています)でもよろしい。『あなたは僕が覚悟しているとお思いになる(がそれはどうだかわかりませんよ)』ならば、これ

は正に典型的な間接話法であって、あらゆる判断を差し控えた報道的な『趣』『旨』『由』という本質が最も露骨に働いていますから、これは当然 *Sie glauben, ich sei darauf gefasst* 又は *Sie glauben, ich machte mich darauf gefasst* でなければならないのですが、『ごらんの通り僕は覚悟しています』というのはそうではない。なお次の例を参考にして下さい：

[1] *Es ist besser, du gehst selber hin und sprichst persönlich mit deinem Chef.*

[2] *Gott sei Dank, mit dem Feuerlärm war doch nichts !*

[3] *Es scheint, die Kritik deiner Feinde macht dir immer noch Sorgen?*

[4] *Das Beste wird sein, ich mache es euch an einigen Beispielen klar.*

[5] *Es täte not, wir dringen weiter ins Land bis nach Hankau !*

もう大抵おわかりでしょうが、要するにこれも文章論一般に沢山見受けられる『逆の関係』たとえば(第二章第一節、21 頁以下)の一つで、凡そ二つの文が結びつけられる所には、接続詞であれ何であれ、到る処にある現象です。即ち、*Ich hoffe, die Gefahr ist vorüber* ならば、その重心はむしろ後半にあるので、*Hoffentlich ist die Gefahr vorüber* というのと同じ *Dynamik* で考える可きなのです。後半はすでに宙ぶらりんの副文章的本質を失って、それ自身が基礎的な *Aussage* となっているから、これはもう(第一章に説いた)接続法の本質とは真向の反対ですから、間接話法どころの騒ぎではない、そもそも接続法本来の機能に反するが故に、接続法を用いてはいけないということになるということは、第一章の本質論を御理解になった方には当然わかるでしょうし、また接続法本来の機能がこれによって益々明らかになったことと思います。

[注] [1] これと *Er glaubt, ich bin krank* などと問題を混同しないようにして下さい。こんな場合は例の『直接引用的』との中間現象で、口語的変則現象です。*Er sagt* の際も同様で、やはり *ich sei, ich ware* が可-----

[2] *Ich glaube* の際は、肯定ならば此の項の形式に属しますが、否定だと問題がちがって来ます。*Ich glaube nicht, dass er kommen wird*(又は *werde*,又は *würde*)。信じない事に対しては真偽の判断を差し控えて単なる『由』『趣』『旨』として表現するのは理の当然です。これ亦間接話法的接続法の機能を証するものです。

Hoffentlich ist die Gefahr vorüber.

如上の形態は、もう一段進むと、主文章として表現せんとすれば出来る筈の文を、副詞又は副詞句としてしまうことになる。これは既に充分御存じの現象として、極く簡単に片づけてしまいます。詳しくいうと、*zum Glück* 等、前置詞 *zu* の一形態にもふれ、*glücklicherweise* 等 *-weise* の型にも触れ、*nachweislich, unmöglich, bekanntlich* 等の *-lich* その外 *-maßen*, 接続詞 *wie* の機能、その他前置詞に至っては五つも六つも重要なものが出て来ますが、これはいずれ此の部門だけを独立させて文例を主にして述べる機会があると思います。

Ich wollt ', die Mutter käm ' nach Haus. -- Faust --

『母が帰宅すればいいがと思う』です。*Ich wollte* の方は、これは約束話法の派生形態として、いずれずっと先へ行って更めて詳述する形ですが、その次の *käme* というのが、微妙な問題ではありますが、前述の *Ich hoffe, die Gefahr ist vorüber* の *ist* と同じ関係になって来るのです。ここはよく頭をよくしてお聴き下さい。

ist がもはや『*dass*』の真の機能を持っていないと同様に、奇抜な言い方だが、*käme* も亦もはや接続の機能を持っていないのです。これを『*die Mutter* が *nach Haus käme* と *ich wollte*』という風に文法関係を考えるから問題がいやに複雑になるのですが、そう

ではありません。そうしか考えられないと思う方があったら、それは前に述べたように、『おれは Japonismus を以て直ちに意味形態と考えてはいないか？』という一応の反省が必要です。käme は、形としてはなるほど如何にも『接続法形』をしているらしく思われる、がしかし此の際の機能は *die Gefahr ist vorüber* の *ist* と全然同じで、従って *Ich wollte* の方は、むしろ一つの副詞に近いほどにまで重心を失った、形式化したものと考えないといけません。

要するに *wollte* の方も、*käme* の方も、只今の『間接話法』として考えた『接続法形式』と何の関係もないことは、それは前述の *ich hoffe* の *hoffe* も *die Gefahr ist vorüber* の *ist* も接続法形式という文法形式と何の関係もないのと同様です。ただ、『意味形態』という根本問題から考えたから当然引用されなければならなくなっただけの事です。更めて約束話法の派生形態として説明することにはなっていますが、重複を承知の上で、次に多少の文例を挙げておきます。特徴は、意味形態の方では大抵『欲求』の表現であること (*ich wollte, ich wünschte, dächte, es wäre besser....*等)、文法形式の上では、第二式接続法が二度繰り返されること、この二つです：

- [1] *Das beste wäre jedenfalls, man achtete gar nicht darauf !*
いずれにしろ、そんな事にはむしろ注意を向けないのが一番好いのだろうね。
- [2] *Ich wollte, ich hätte es nicht getan !*
自分ながら、まずい事をしてしまったと思っています。
- [3] *Ich wünschte, ich wäre weit von hier !*
いっそこんな所に来合わさなかったらどんなに幸いだろうと思っています。
- [4] *Aber ich dächte, du sprächest lieber nicht zuviel !*
併しまあ、なるべく喋舌り過ぎない方が好いのじゃあるまいかね。
- [5] *Wollte Gott, ich könnt 's vergessen, oder es wäre anders !*
忘れられるものなら忘れてしまいたい、それともいっそ事情でも変わっていればいいのだからなあ。

[註] [1] こういう意味には必ず此の形式を用いなければならないものと勘違いすべからず。dass を用いることもあり：*Ich wünschte, dass ich's nicht getan hätte !* [*Schiller : Maria Stuart. II. 7.*]----現に仏語は、その他の点も大抵そうであるが、この場合も亦必ず接続詞 *que* を用う：*Je voudrais que vous l'eussiez vu* 等。英語はこれに反して大体ドイツ語通り：*Would you were with us !* 又は *Would that you were with us !* ----

[2] 先例は既に拉丁[ラテン]語にあり、たとえば *Vellem nobis hoc idem dicere liceret.* [*Cicero : De Officiis, III. 1.*]----

[3] 配語順も亦必ずしも一定と考える可からず；*Du spartest, dünkt ' ich, solche Sprüche.* [*Goethe : Faust, II. 2.*]

判断差し控えより懐疑に至る諸形態

以上述べた諸形態は、『趣・旨・由』なる間接話法の本質からは少し外れた形態でした。本人自身が『私はこう思う』『私は斯う望みたい』というのですから、趣・旨・由もへちまもない。趣・旨・由というのは、もっと無責任な、真偽未判明なものでないと不可ない。これまた間接話法の本質が『趣・旨・由』にあることの間接証明です。

『由』というとは単なる報道であって、報道者自身のそれに対する真偽の判断は全然差し控えられている。その態度は全然局外中立、或いは哲学の方で所謂 *Epochē* [判断差し控え]です。これが間接話法の本質「趣・旨・由」に最も相応わしい。だから、こうした形態に於いて、前節で述べた第一式を主とし、第二式を補助形式とする『純間接話法』が用いられる。前述のような、『肯定』ときまった、言者自身がそれを自ずか

ら主張しているような積極的な場合には用いない。

また、(これがまた間接話法に対する私の定義を益々明白に証明する事実ですが)中立的態度があまりに行き過ぎて、むしろ『懐疑的』と言いたい程、即ち否定の色彩が濃厚になってくると、これも亦本当に純粋な間接話法ではなくなって来る、単なる『趣・旨・由』以上に、何かこう余計な色彩が加わってくる。だからこれも、今までの定義を多少脱せんとする派生形態になってきて、これは(後で述べる如く)第一式を用いないで、その代わりに第二式を用いる。

中立と懐疑とは全然別物です。只今 Epochē [判断差し控え]という語を引用しましたが、これは Skeptiker[懐疑派哲学者]の用語で、Epochē を主張するのが本当の懐疑だったらしい。だから、うっかりすると『否定』という陣営の方へ近寄ってきこえる『懐疑』という日本語はあまり適しないわけです。Epochē なるものと、現在の所謂 Skeptizismus とは全然区別されなければならない。つまり、単に『そんな事をいうが、それは嘘かも知れない』だけでは本当の懐疑ではないのもう一つ『併し又本当かも知れない』という態度が前者と同様の力を以て働かないと、Epochē は不可能なのです。

本当の懐疑はそうなのだけれども、「懐疑」という言葉の普通の色彩は、長い間の習慣で、むしろ否定に傾いているから、私はここで Epochē と、skeptisch な態度とを判然と分けたい。そうすると間接話法の文法がはっきりとして来るからです。

まず純粋の中立的なものから、その主な表現を見て行きます。すると「接続法」はそのほんの一つの表現形式に過ぎないことが判明します。

[1.] 趣・旨・由の最も妥当なる表現は *dahin, dass.....*

たとえば『.....という風に解釈する』、『.....という風に批評する』、『.....という風に信ぜられている』、『.....という風に定義する』等には、*dahin auslegen, dass.....sei ; dahin kritisieren, dass..... ; dahin beglaubigt sein, dass ; dahin definieren, dass*という風に云う。これは拙著『独逸語学講話』中の『*dahin* と *ins*』という項に余りにも詳しく説明してあり、文例も沢山あげてありますから茲では一つを例としてその儘転載して置きます。

Ich weiß es : es giebt hundert anständige und rühmliche Arten, um mich von meinem Weg zu verlieren, und wahrlich höchst "moralische" Arten ! Ja die Ansicht der jetzigen Mitleid-Moralprediger geht sogar dahin, dass eben dies und nur dies allein moralisch sei.

[Nietzsche : *Die fröhliche Wissenschaft.*]

私は知っている、私自身の歩む可き本道を没却する没却のしかたには実に種々様々な人聞きの好い堂々たるしかたがあつて、それらはいずれも真に「道に適った」しかたなのだ！否、当今の同情本位論者の意見は、むしろ、そうすることこそ道德なのだ、いや、それのみが道德なのだ、という所にあるらしい。

[2.] *sollen, wollen*[等]による表現法もある。

sollen の用法は、いずれ『要求話法』に行ってから、接続法の重要な代用品として、更めて問題になりますが、間接話法の代用としても既に重要なものです。代用というと、本物より影が薄いように聞こえますが、此の *sollen* (及び其の裏の *wollen*) はそうではなくて、むしろ間接話法の意味を強化するために用いられるのです。即ち単に *sei* [なる由] というと、どうも *sei* には色んな *sei* があつてははっきりしないことを怖れる結果、はっきりした *soll, will* を持って来て、『由』を如何にも『由』らしく聞かせるのです。これは当然そうある可き現象で、接続法は『語』ではなくて『語尾』又は単なる『形式』にすぎないから、それを一つのはっきりした専用の助動詞によって形式的に独立せしめんとするのは自然の要求でしょう。これは至る所にある現象です。

これは既知の文法として、単に文例だけで進めて行きます。*sollen* か *wollen* かは、主語によって判断される可きもので相互に逆機能です。

sollen の場合 :

- [1] Schuster *sollen* bekanntlich häufig schlechtes Schuhwerk tragen.
周知の通り、靴屋に限って碌な靴は穿いていないそうである。
- [2] Er reiste nach einer Insel, wo es eigenartige Vögelarten geben *soll*.
かれは、ちょっと変わった鳥がいると云う或る島に旅行した。
- [3] In ihrer Jugend *soll* sie ziemlich schön gewesen sein.
若い時には彼女も相当美しかった由。
- [4] Er *soll* sich zur Zeit in Schanghai aufhalten.
かれは目下上海に滞在中の由。

wollen の場合 :

- [1] Er *will* immer so gescheit sein, *will* immer alles besser wissen.
[Kotzebue : Menschenhass und Reue.]
あいつはよっぽど賢いつもりらしい、なにかにつけて知ったか振りをする。
- [2] Niemand von allen, die er fragte, *wollte* einen Menschen, wie er ihn beschrieb, gesehen haben. [Goethe : Wilhelm Meisters Lehrjahre.]
誰に問うてもそんな人間には会わなかったと云うのであった。
- [3] Treue ! Diese wundersame Erscheinung, die der Mensch so oft am Hunde bewundern *will*, wird in der Regel am eigenen Menschengeschlecht viel zu wenig beachtet.
[Tieck : Des Lebens Überfluss.]
忠実！犬だけが何でも感心に具えているとか云う此の殊勝なる現象が、御同様人間同士の仲間にあるというとな誰もそう大して注目しない。
- [4] Auch *wollte* man wissen, dass er, von dem früher nie dergleichen bekannt war, jetzt galante Liaisons unterhielt. [Feuchtwanger : Jud Süß.]
それに、人のいう所に依ると、以前はそんな噂の絶対に無かった彼が、今では何でも女と関係しているとか云う事であった。

【註】【1】日本語では『.....というつもりである』とか『.....という噂である』とか色々になりますが、趣・旨・由を如何にも趣らしく、旨らしく、由らしく響かせるところは同じです。----

【2】此の種の *sollen*, *wollen* は、『完了形の不定法』に結びついた際に於いて、此の意味形態が最も明瞭になります。読むものの立場からは、*soll.....getan haben*, とか *will.....gereist sein* とかの形があれば必ず此の意味と思ってよろしい。但し逆は真に非ず、定義を早呑み込みすべからず。

[3.] 接続法を用いる方法、及び間接文の主文章化。

(新独逸語文法教程 § 290)

dahin を用いたり、*sollen*, *wollen* を用いたりするほど『趣・旨・由』を如何にも『趣・旨・由』らしく表現する必要のない場合は、これが接続法の元来の間接話法的用法、即ち第一式を第一線とし第二式を予備隊とする用法です。だから意味形態論の見地から形式的に達観して見るというと、接続法なんてものは元来大した問題ではないという事になって来ます。つまりほんの極く特殊な、極く用法の制限された、単なる一つの場合に過ぎないのです。

此の項は、既に前回に於いて研究した所で充分ですから、文例は省かせて頂いて、ただ *sollen*, *wollen* との関係に於いて重要な『主文章化』即ち独立文化の現象だけ一寸触れた置きます。然し、これとても、既に本書をお読みになる程の方ならば、改めて申し上げるにも及ばないのかも知れません。併しまあ、触れる可きものには一応触れて置かないといけないうでしょう。例は特徴あるものを一つだけにとどめます：

Einer seiner alten Gesellen kreuzte ihm den Weg. Ob er von der Braut *komme*? fragte er ihn lachend. Es *sei* hohe Zeit gewesen, dass er heimgekehrt, um nach dem Rechten zu sehen. Ein loser Vogel von einem Federfuchser *habe* sich eingefunden und nicht übel Lust gezeigt, an dem blanken süßen Träublein zu picken. Er *werde* dem Fant wohl schon begegnet sein und ihm nach Gebühr heimgeleuchtet haben. Der Herr Vetter *sei* übrigens kein Kostverächter und *nasche* herum, wo er gedeckten Tisch *finde*. Nacht für Nacht *sehe* man ihn in das Haus einer übelberufenen Witwe schleichen, die draußen im letzten Häuschen des Dorfes, wo gestern St. Florian gefeiert wurde, ihr stilles Wesen *treibe*. Daneben *würde* er sich nicht lange bitten lassen, der Eidam des Herrn Schöffens zu werden, zumal er in Mainz kahlgerupft wie eine Martingans aus einem Spielhaus entronnen *sei*. Nun, damit hat es jetzt gute Wege.

[P. Heyse : *Siechentrost*.]

訳：途中で仲間の一人に出くわした。いよう、花嫁さんの所からお帰りかね？と相手は笑いながらひやかした。丁度好い時に様子を見に帰って来たものだよ。書記だか詩人だか知らんが、何だか実に油断のならねえ餓鬼がのさばり込んで来て、荐[しき]りと斯う何だか涎を垂らさんばかりに眼を細くしてたかっていたぜ。おまえさんの事だから勿論途中でとっちめてしこたま脂を搾って来たろうな？それにあの御仁はアレでなかなか多趣味な方で渡らせられるちゅうで、お膳立てさえしてあれば何処其処の嫌いなく遠慮なしに荒らして廻るそうだからマア大変な代物さ。たとえば昨日聖フロリアン祭のあった村の一番端っこの家に棲んで何だか一人でこそこそ得体の知れない事をやっている例の、妙な噂の立っている後家さんのところへも、奴さんが夜な夜な忍び込むところを見届けた人がいるってえからね。一方でそんな事をしながら、陪審判事さんが娘をやろうとでも仰言れば、これ亦敢えて辞せざるものらしい。殊に最近マインツで博奕をやった砌[みぎり]に、何から何まで綺麗に捲き揚げられ、スッカラカンで飛び出して来た矢先とあれば尚の事だろうよ。併しまあ、そんなうまい話はマア急な事じゃなかろうがね。

一見すればわかる通り、最初の一文だけが客観的叙述文で、あとは全部間接引用の独立文です。(最後の Nun, damit hat es gute Wege だけは直接引用。これだって勿論 *habe* とするに何の差し支えもないが、ちょっと締め括りをつけようとして直接引用にしたのです。)

【註】ドイツ語で此の独立文章化された接続法文を用いる場合には、例の *Akkusativ mit Infinitiv* の極度に発達していた希臘・拉丁語では、接続法があれば完備していたに拘わらず、之れを用いずして、わざわざ不定法を用いました。主語は勿論凡て四格となります。一例：

Ita locutus est Divitiacus : Ariovistum hominem *esse* barbarum, iracundum, temerarium ; non *posse* ejus imperia diutius sustineri ; nisi quid in Caesare populoque romano sit auxilii, omnibus Gallis idem *esse* faciendum, quod Helvetii fecerunt, ut domo emigrent ;

[Caesar : B. G. I, 31.]

訳：

Also sprach Divitiacus : Ariovist *sei* ein barbarischer, jähzorniger, übermütiger Mensch ; seine Herrschaft *sei* nicht länger zu ertragen ; wenn von Cäsar und dem römischen Volke keine Hilfe zu erwarten *sei*, *bleibe* den gesamten Galliern nichts anderes mehr zu tun übrig, als was die Helvetier getan hätten, nämlich dass sie Haus und Hof verließen.

[4.] 疑問従属文に接続法を用いることの可否

Was とか wer とか wie とか welcher とか ob とかで始まって定形が最後に置かれる文

章、即ち『疑問従属文章』に関する話です。たとえば『彼女が誰と結婚しようと思っ
ているかを』という文を *Wen sie heiraten will* と云う可きか、それとも *Wen sie heiraten wol
le* と云う可きかが問題になって来ます。且つ又、疑問文には *was, wo, wer, wenn* 等の所謂
Bestimmungsfrage od. *Präzisionsfrage* [規定的疑問] の外に、疑問詞を用いない *Will
sie ihn heiraten?* 等の、所謂 *Entscheidungsfrage* [決定的疑問] もあるわけで、此の方は *ob*
を用いますから、そこで *ob sie heiraten will* がよいか *ob sie heiraten wol
le* がよいかと云う問
題も生じてくるわけです。

此の問題はちょっと一口では解決できません。というのは *ob sie heiraten will* という
句それ自身だけでは解決がつく筈はないので、それが如何なる主文章について、全体が
如何なる意味になって来るかによるのです。

作文の際に最も屢々[しばしば]出て来る筋路で云いますと、たとえば『彼女が抑々結
婚する意志があるかどうか、それを俺に云ってくれ!』と云ったような場合には、まず
接続法は用いしません。Sage mir, ob sie überhaupt heiraten will! これを *wolle* とすれば文
法上の誤りです。何故かという説明の鍵は、やはり毎度のことながら、この文全体の意
味形態にあります。というのは、Sage mir, ob sie überhaupt heiraten will? という文は、全
体の機能からいえば単に *Will sie überhaupt heiraten?* というのとちっともちがわない。だ
から此の場合に *Wolle sie* というのが間違いであると同じく、前の場合にも *wolle* と云
うのは間違いです。つまり *ob sie.....* の文は、『引用』の文ではないのです。『趣』も『旨』
も『由』もへったくれもない、言者自身の発する『直接』の疑問なのです。だから直接
法を用いるのは理の当然であり、同時に直接法を『直説』法などと書かないで、やはり
多くの人が間違っ
て書く通りに『接』とやった方が色々と便宜なことがある所以です。

要するに Sage mir! Erzähle! Du sollst mir sagen; Ich will wissen 等、とにかく命令法
その他直接に問いかける意味形態の文に附属する疑問従属文は直接法と思ってよろし
い。例:

- [1] "Baptiste, Claude, Pierre, steht auf und *seht einmal zu, welcher Taugenichts
uns das Haus einschlagen will!*" [E. T. A. Hoffmann: *Das Fräulein von Scuderi*]
バッティスト! クロード! ピエール! うちを叩き毀しに来たのは何処のならず
者だか、はやく起きて行って見て来い!

- [2] Kommt und setzt Euch zu uns, und bis der Vater nach Hause kommt, *erzählt mir,
wie es in Flandern aussieht, was die schönen Frauen dort für Gewänder tragen,
und ob Ihr mir auch etwas Hübsches und Kostbares mitgebracht habt.*

[Heyse: *Siechentrost.*]

さあこちらへ来て私達と一緒に
お掛けなさい、そしてお父様が帰
ってお出でになるまで、フランドルあたりの模様を話して下さい。あちらの美しい女達は一
たいどんな服を着ています、わたしにも何か素ばらしい高価な品物を買って来て下
さいましたか?

ところが、疑問を抱くのが其の全文を口にする言者当人ではなくて、第三者である場
合には、必ずしも用法は一定していませんが、まず大体どちらでも好いということにな
っています。たとえば:

Nicht, *was der Knecht sei, fragt der Herr, nur, wie er dient.* [Faust II. Teil, 3.]

家来の真価は君主に取ってはどうしてもよい事で、問題は其の働き振りである。

斯様な場合には、Goethe は御覧の如く一方に *sei* を用い一方に *dient* を用いているが、
何なら両方を接続法にして *sei, diene* とした所で構わない。口語文は直接法の方を多く
使います。

もう一度前の文例で考えて見るならば、Sage mir と来れば其の次は *ob sie mich
heiraten will!* (又は?) ですが、たとえば『彼は彼女に向かって藪から棒に、どうです
僕と結婚しませんか? と訊ねた』だったら、

Er überraschte sie mit der Frage, ob sie ihn heiraten wol
le [od. will]?

どちらでも好いわけです。?も Punkt にかえて構いません。けれども、Stilistik (作文)
の見地から申しますと、ピチピチした現代的な気短かなチャチな文は例外として、悠々

迫らざる落ちつきを見せる所謂堂々たる文体(*wohlgesetzte Rede*)に於いては、なる可く接続法を用いる方が穩健でしょう。これは作文上の注意です。例を二三：

- [1] *Ihr fühlt nicht, wie schlecht ein solches Handwerk sei ; Wie wenig das dem echten Künstler zieme !* [*Faust, I.*]
諸君は、そう云う商売じみた行為が如何にくだらぬものであるか、そうした事柄が眞の芸術家にとって如何にふさわしからぬものであるかをお感じにならないものと見える。
- [2] *Lalla drängte ihn eifrig, wo ihm die Frauen am besten gefallen hätten.* [*Heyse : Annina.*]
何処の女が一番気に入ったかと、ラルラは彼に向かってしきりに問いつめるのであった。
- [3] *Sie grüßte lächelnd den Reisenden und fragte, was ihm gefällig wäre.* [*Keller : Sinngedicht*]
彼女は旅人に向かって笑いながら会釈し、御用は何ですかと尋ねた。
- [4] *Ich dachte nach, ob nicht Rettung möglich sei, ob ich sie nicht losmachen könne von dieser schrecklichen Verbindung.* [*Hauff : Aus den Memoiren des Satan.*]
私は、何とかして助ける術はないものか、何とかして彼女を此の恐ろしい関係から救い出すことは出来ぬものかと考えた。
- [5] *Auf leisen Sohlen erschien der Kammerdiener, ob er seine Exzellenz schon auskleiden dürfe.* [*Feuchtwanger : Jud Süß.*]
足音も静かに侍従が其の場に罷り出で、もはやお着換え召されては如何でござりまするかとお意を伺った。

[5.] 第二次以下の従属文にまで矢張り接続法を用いるかどうかの問題

まず問題の焦点に入るために下の文を御研究ねがいます。有名な句でもあり、面白くもあるから無駄ではありません。

Auch meinem Freunde Behrisch hatte ich manchmal zugesetzt, er solle mir deutlich machen, was Erfahrung sei? Weil er aber voller Torheiten steckte, so vertröstete er mich von einem Tage zum andern, und eröffnete mir zuletzt, nach großen Vorbereitungen : die wahre Erfahrung sei ganz eigentlich, wenn man erfahre, wie ein Erfahrener die Erfahrung erfahrend erfahren müsse. [*Goethe : Dichtung und Wahrheit II. 7.*]

時には仲好しのベーリッシュさんを取っつかまえて、一たい『経験』というのは何の事ですかと云って、うるさく訊いたものだった。ところがこの人は、人をからかうのが好きで、それは又此の次にとか何とか云って段々延び延びになっていたが、そのうちに或る時、えらい勿体をつけて散々人を焦らせた後、遂に伝授して呉れたのが斯ういう説明だ！『そも経験とは何ぞやと申すに、それは即ち、経験は抑々経験ある者が経験しつつ経験するの外なき事を経験して始めてそれが眞の経験だという此の事である』

第一次の間接文 *sei* は、これは前の第 3 項で述べた『間接文の主文章化』だから接続法が用いてあるのですが、さてそれに従属する第二次文の *erfahre*、その第二次文に従属する第三次文の *müsse* が此の項の問題です。

これは、第一次、第二次、第三次の全部が纏まった一つの『間接引用文』であって、全体が一つの趣、一つの旨、一つの由なのでありますから、所謂 *wohlgesetzte Rede* に於いては、第二次以下、全部接続法を使用するのが建前であると思って好いでしょう。一応はです。二応はまた違って来ます。----まず一応の例から：

- [1] Montesquieu erteilt seinen Helden und großen Männern das Recht, sich nach Befinden den Tod zu geben, indem er sagt, es *müsse* doch einem jeden freistehen, den fünften Akt seiner Tragödie da zu schließen, wo es ihm *beliebe*.
[Goethe : *Dichtung und Wahrheit* III. 13.]

モンテスキューは、英雄偉人に対して、任意に自殺するの権利を認め、誰人[たれびと]と雖[いえど]も己が悲劇の第五幕の幕を己が欲する瞬間に下ろしてよろしい筈であると云っている。

- [2] Denen, welche ihm die geringere Anzahl seiner Truppen entgegensetzten, gab er zur Antwort, dass an einer noch so langen Pike doch nur die Spitze *töte*, und dass es bei militärischen Unternehmungen mehr auf die Kraft *ankomme*, welche *bewege*, als auf die Masse, welche zu bewegen *sei*. [Schiller : *Belagerung Antwerpens*.]

兵力の不足を指摘した者達に対して彼の曰く、槍は長しと雖も敵を刺すは三寸の穂先に過ぎず、兵を用うるの要は、用うる者の力にあり、用いらるる者の数にあるに非ずと。

- [3] Jene Neigung ist ein feiges Entfliehen vor seinen eigenen Gedanken und kindischer Sinn, der da zu glauben scheint, wenn er nur nicht *sehe* sein Elend, oder wenigstens sich nicht *gestehe*, dass er es *sehe*, so *werde* dieses Elend dadurch auch in Wirklichkeit aufgehoben, wie es aufgehoben *ist* (1) in seinem Denken.
[Fichte : *Reden an die deutsche Nation*.]

斯くの如きは正に己れ自らの念に恐れをなして逃げ隠れするにも等しく、小児の如き心理であって、自分の浅間しさが自分自身に見えさえしなければ、或いは少なくとも、見えても見えたと思えさえしなければよい、念頭の醜態が解消する事によって、亦現実の醜態も解消するものであるとでも心得ているものと思えないのである。

- [4] Dass ich mich achten *könne*, (2) dass ich eine Persönlichkeit *sei*, auf die ich selbst mit Befriedigung schauen *könne*, das ist es, worauf ich in solchem Falle *abziele*.
[Theodor Lipps : *Die ethischen Grundfragen*.]

われと吾が身が尊敬するに足るという事、われ亦一個の人格たるを失わず、われみずから此の人格を以て之れを快しとなすと云う観念、これが即ち左様な場合に於ける私の目標である。

- [5] Man hat es mit Recht gesagt, dass ein Volk nicht sowohl durch seine großen Männer charakterisiert *werde*, als durch die Art, wie es dieselben *erkenne* und *ehre*.
[Nietzsche : *Die Philosophie im tragischen Zeitalter der Griechen*.]

一民族の特有性は、その民族が如何なる偉人を生んだかと云う点のみならず、その偉人を如何に認め、如何に敬うかと云うその様式によっても決するものであると云ったのは蓋し至言である。

- [註] [1]筆者自身が確信せる事実に限って斯くの如く系列の統一を破って直接法を用いることは、鋭い効果を出す方法として上乘です。
[2]この文は、考えようによると要求話法とも解せられます。ここが中間現象です。いずれ要求話法へ行ってから一項目として扱います。

以上は、既に初めに断って置いた如く、『一応は』という但し書き付きです。必ずしも接続法を用いなければならないというほど厳格なものではなく、殊に近頃の Stil では、よく直接法も用いられます。

Es gehörte zu den Gewissheiten in Jeder Gedankenwelt, dass jede brave Frau mit einer angeborenen instinktiven Sittsamkeit begabt sei, die ihr sagt, was sie nicht tun, worüber sie nicht reden und nicht einmal nachdenken darf.

[Paul Baudisch : Upton Sinclair, So macht man Dollars.]

真個に女らしい女と云うものは、生来或種の本能的なたしなみと云うものを持っていて、それによってどんな事をしてはいけないか、どんな事を言ってもいけないか、否考えてすらもいけないかということを判断するのだ。これがジェットの思想圏に於ける最も確実な命題の一つなのであった。

sage, dürfe とすれば文体が多少古いというばかりではなく、おっとりとしたおとなしい調子に変わるわけです。

[6.] 自己の主張には非ずして、単に伝達・報道の『趣・旨・由』に過ぎざる事を強調する必要がある際には、特に一従属文を接続法で結ぶ。

すぐ実例で行く方が早わかりですから、また早速下掲の文を御研究下さい：

Michael Steno gestand ganz freimütig die Tat und schob alle Schuld auf den Doge, der ihn zuerst empfindlich gekränkt habe. [Hoffmann : Doge und Dogaresse.]

ミヒャエル・ステーノは悪びれもせず犯行を自白し、凡ての責任は公爵にある、公爵の方が最初自分を侮辱したのでであると供述した。

habe がもし *hat* (或いは過去の文局内故むしろ *hatte*) と変わったならば、*der.....gekränkt hatte* の所は *Steno* 自身の言ではなくなり、筆者 *Hoffmann* の説となります。即ち『ミヒャエル・ステーノは悪びれもせず犯行を自白し、**曩[さき]**に此の男を最初自分の方から侮辱した公爵の方に全責任があるような事を云った』という事になって、話が全然喰いちがって来ます。だから、この様な場合には、全然異なった二つの意味が生ずるという岐路に立つわけですから、此の部分は自分が責任をもって云うのではなくて、単に或る人物の主張したことを其の儘伝えるのだ、という点をはっきりさせる為に必ず接続法を用いなければなりません。『必ず接続法を用いなければならぬ』という場合は、場合としては非常に珍しいわけですから、此の項はその意味に於いて非常に重要です。

形式的な方面から云いますと、その前後の如何に拘わらず、いろいろと従属文が折り重なっている真っ只中の、離れ小島のような一つの従属文章が、ただ一つ接続法を定形にしているといったような時には、大抵此の筋路に属することになります。まだ、文章の総体も、間接引用文らしくはなっていないにしろ、たとえば只今の例の *gestand die Tat* (犯行の**趣**を自白した)、*schob die Schuld auf den Doge* (責任は挙げてドージェにある**旨**陳述した)などでわかる通り、とにかく文法的・形式的にはどうあろうと、その『意味形態』は必ず何か『**趣・旨・由**』という筋路を含んでいるのが特徴です。

場合として一番多く出て来るのは関係代名詞に依る従属文ですが、必ずしもそうと限られた訳ではなく、*wenn* や *weil* その他の従属文もあります。関係代名詞文が多いのは、関係文は(拙著独作文教程 396 頁[8])『認容』『仮定』『理由』その他あらゆる意味形態の表現に用いられる性質のものだからです。

[1] Sokrates hielt es für ein Leiden, das dem Wahnsinn nahe komme, sich den Besitz einer Tugend einzubillden und sie nicht zu besitzen.

[Nietzsche : Vom Nutzen und Nachteil der Historie für das Leben]

ソクラテスは、みずから徳を有せりと信じつつ而も之れを有せざるが如きはむしろ癡狂[てんきょう]に類する疾患であると為した。

- [2] Es mögen nun ungefähr drei Jahre sein, als man mir eines Abends in der Dämmerung ein fremdes Frauenzimmer meldete, *welches mich allein zu sprechen begehre.*

[Kotzebue : *Menschenhass und Reue.*]

今を去る凡そ三年も昔のことであつたが、ある晩、夕闇の迫る頃、誰か婦人の方がお見えになりました、而も一人きりでお目に懸かりたいのだそうですがと云つて私のところへ知らせて来た。

- [3] Sie erzählte mir von einem Onkel, *welcher ein Gelehrter sei, und dem sie viel Anregung verdanke, den sie über alle Maßen verehere.*

[Victor Blüthgen : *Gedankengänge eines Junggesellen.*]

彼女は、わたしには一人の叔父があつて、その叔父というのが学者で、わたしも実は非常な感化を受け、非常に尊敬していると云つて話した。

- [4] Gegen diese Erklärung legte Preußen Protest ein, *weil dieselbe gegen den Gasteiner Vertrag verstoße.* [Bertha von Suttner : *Die Waffen nieder !*]

此の声明に対してプロイセンは、それはガスタイン協定に抵触すると云つて抗議した。

- [5] Er fragte, in der Menge der geringen Bürger verborgen, einige Nachbarn nach dem Namen der vornehmen Frau ; es konnte aber keiner Auskunft geben, *weil sie wahrscheinlich eine Fremde sei.* [Keller : *Das Sinngedicht.*]

かれは普通市民の群れの中へ紛れ込み、あたりの者をつかまえて其の貴婦人の名を訊いて見た。ところが、あれは恐らく此の土地の人ではなからうと云つて、誰一人として答え得る者がなかった。

- [7.] 趣・旨・由を **zu** を伴う不定法(又は不定句)に依つて表現する事の可否に就いて。

私は、初歩文法を教える時、殊に作文を作らせる時には、なるべく『**zu** を伴う不定句』というものの応用範囲を誇張して学生の頭に叩き込み、ドイツ語の文章のコンマからコンマまでを一句として見るならば、ドイツ語に現れる句数の半分通りは **zu** を伴う不定句であるかの如く教えてしまいます。其の結果は非常に好いようです。

ところが時にはよくない事もある。たとえば『彼は彼の万年筆が毀れたと云う』と云うのをドイツ語で云わせて見ると：

Er sagt, sein Füllhalter kaputt zu sein.

などと云う名句を捻り出す。(Füllhalter は Füllfederhalter と同じ)----これは甚だ困る。何が困るかというに、まず、**zu** を伴う不定句の中に主語(sein Füllhalter)が現われているというのが非常に困る。せめて之れを四格にして Er sagt, seinen Füllhalter kaputt zu sein というのなら、まだしも多少ラテン語的ドイツ語という意味に於いて救われるのですが、.....併しこれに関する詳しい事は此の項の最後で述べます。まず一般的な理屈から述べましょう。

dass.....の文は往々にして **zu** を伴う不定句に依つて簡潔に云い表わされる事がありますから、sagen, behaupten, glauben, meinen, vorgehen, vermeinen, sich einbilden その他凡そ『趣・旨・由』を内容とする諸種の動詞の Objekt(或いは Ergänzung)となる文も亦 **zu** を伴う不定句によつて表現出来ないことは無さそうに思われる。また現に多少は表現しています。ただ此の用法には非常に制限があつて、そう矢鱈と色んなものと結びつけるわけには行かない。また、抑々 **zu** を伴う不定句なるものは、その文法形態の必然的結果として、動詞(不定法)の主語を句内に入れることが出来ないものでありますから、此の点も一つの制限になります。即ち、その基礎文をなす独立文章の主語が直ちに以て不定

法の主語である際に用いるのが最も安全です。

此の筋路は、単に意味形態の上で間接話法に関係があるので、文法形態の上では全然無関係です。如何となれば、接続法形は、既に総論に於いて申し上げた如く、『定形』だけの問題なのでありますから、zu を伴う『不定法』を用いる際には問題になりません。

次に、まず此の形式を用い得る場合の最も普通なるものの例：

- [1] Der Mann *behauptet*, bei Ew. Durchlaucht ein Anliegen zu haben.
当人は殿下に御願い事があると申しております。
- [2] Er *gibt vor*, Sie irgendwo in einer Gesellschaft kennen gelernt zu haben.
かれは貴下に何処かの社交の席でお近づきになったと称しています。
- [3] Indem ich ihn zu betrügen *glaubte*, betrog er vielmehr mich.
まんまと欺したつもりでいたら、反対に己の方が欺されていた。
- [4] Er spürte keine Reue, denn er *meinte*, recht gehandelt zu haben.
かれは自責の念を感じなかった。それは正しく振る舞った積もりだったから。
- [5] Den ich doch so gut zu kennen *vermeinte*, zeigte mir ein ganz anderes Gesicht.
人と為りを充分承知のつもりでいた人間が忽ち態度を一変した。
- [6] Sie *erklärte*, müde zu sein, und ich *versprach*, sie nach Hause zu bringen.
彼女が疲れたと云うので、私は家まで送ろうと約束した。
- [7] Er *bildet sich ein*, der Glückliche der Ehemänner zu sein.
かれはあらゆる良人中の最も幸福なる者であると自惚れている。
- [8] Er *gesteht ein*, mit am Tatort gewesen zu sein.
かれは自分も犯行現場にいたと告白している。

ただ、前にも云ったごとく、此の行文には非常にむずかしい微妙な制限があつて、或種のものは許されるが或種のものは許されない。たとえば、今あつた例ですが、『彼女は、私に疲れたと云った』ということをして Sie *erklärte* müde zu sein (Sie *erklärte*, sie sei müde の代わり)とは云えますが、Sie *sagte* müde zu sein とは習慣として云わない。sagen だとしても sie sei müde です。

殊に英語によくある be said to.....(云々すると云われている)というやつですが、これは英語でも日本語でもそう云えるものだから、独作文をやらせると学生諸君はよく "ist gesagt,.....zu +不定法" という怪文章を作るが、これは絶対にいけません。たとえば：

With the advocacies of the three leading powers proving irreconcilable, the main London naval conference can be said to have virtually drawn its last breath on December 17.

等の文に於いて、conference なる概念を主語にして、ドイツ語で kann gesagt werden などと、sagen の受動形を用いるなどと云うことは、だいいち sagen という動詞の用法がこれを許さない。『会議を云う』(die Konferenz sagen) という他動詞用法はドイツ語にはないからです。ただ一つ totsagen(死んだという、云い殺す、即ち言殺する)だけはたとえば馬占山[ばせんざん]は何遍も死んだと云われながらまだ山西あたりで活躍している、といったような時に General Ma ist mehrmals totgesagt worden とはいいますが、これは tot という結果挙述の形容詞があるからで、『山西で活躍していると云われる』の際には決して sagen を受動的には使えません。況んやそれに zu を伴う不定法を附するに於いておやです。

勿論、十八世紀頃、即ちフランス語の影響の大であつた当時には、sagen に zu +不定

法を附したこともありました。現に Lessing なども、あれほどフランス嫌いでありながら、行文の上ではそれをやっているから、時代というものは争われないものです：

Ja, die Freundschaft, sie ist allerdings das, was uns das Leben erst angenehm machen muss. So viel empfinde ich. Aber so viel empfinde ich doch nicht, als mein Freund zu empfinden sagt. [Lessing : Damon. 6.]

そうだ、友情、勿論友情あってこそ人生は愉快なものとなるのだ。それ位の感じは私にだってある。けれども、私の友人がみずから感ずると称しているほどの程度にはどうも感ずることが出来ないがね。

併しまあ、これは程度の問題で、zu empfinden sagt の程度の結合は、必ずしも Lessing 当時のみならず、現在でもたまには用いられます。故に、sagen と zu を伴う不定句とは、必ずしも絶対にはないと云うのではなく、そう長々しいものでなければ、即ち単に不定法と zu だけを結合することならば、現在と雖も多少は許されると云って宜しいでしょう。

けれども、Lessing の当時には普通であつたらしく、単に sagen のみならず、一般的に『趣・旨・由』の内容を zu を伴う不定句、又は不定法で表現することが当時の流行であつたことは次のような例に徴[ちょう]しても明らかです。

- [1] Und sind wir auch in Gemälden schon gewohnt, so wie auf der Bühne, die hässlichste Schauspielerin für eine entzückende Prinzessin gelten zu lassen, wenn ihr Prinz nur recht warme Liebe gegen sie zu empfinden äußert ? [Lessing : Laokoon, XXII.]

舞台では、恋の相手の王子がとにかく之れを熱烈に愛する旨の台詞を口にしさえすれば、吾人はたとえどんなにみっともない顔をした女優でも之れを美しい王女様として認めて置くことに慣れているが、同様の事が絵画に関しても云えるであろうか？

- [2] Was sollen sie denn also mit ihrem Vorwurfe mutwilliger Verstockung, geflissentlicher Verhärtung, mit Vorbedacht gemachter Pläne, Lügen auszustaffieren, die man Lügen zu sein weiß? [Lessing : Eine Duplik]

然りとするならば、之れを以て増上慢の依怙地なりと誣[し]い、意識的頑迷固陋と呼び、虚偽を虚偽と知りつつ強いて之れを粉飾せんとする故意の企みなりと云って非難する彼等の気持ちが一向腑に落ちないではないか。

- [3] Wenn Gott in seiner Rechten alle Wahrheit, und in seiner Linken den einzigen, immer regen Trieb nach Wahrheit, obschon mit dem Zusatz, mich immer und ewig zu irren, verschlossen hielte und spräche zu mir : wahle ! Ich fiele ihm mit Demut in seine Linke und sagte : Vater gieb ! die reine Wahrheit ist ja doch nur für dich allein !

[Lessing : Eine Duplik]

仮に若し神が、其の右手に凡ての真理を翳[かざ]し、其の左手に専ら真理を求めて歇[や]まぬ無二旺盛なる探究心を握り、而も後者には永遠に尽きぬ迷誤錯倒と云う条件を附して、いずれを採るかと私に問うたならば、私は神の左手に飛びついて『父よ、この方を頂かして下さい！真の真理はただあなたにのみ相応しきものであります！』と云うであろう。

少し話が詳しくなり過ぎましたが、sagen に関する限りは仏蘭西語の影響があつたと申し上げた事について、なお一つ考察のために付け加えて置きたいと思います。たとえば『私は出て行くの何のとはもう云うまい』といったような事を、フランス語では、ドイツ語の zu を伴う不定法に相当する形で

Je ne parlerai plus de sortir.

と云えますが、これもドイツ語では Ich werde nicht mehr sprechen, fortzugehen とともに Ich werde nicht mehr fortzugehen sprechen と云えません。此の意味の sprechen は von を支配する。だから Ich werde nicht mehr vom Fortgehen sprechen と云えばよいわけです。つ

まり色々な抜け路があるわけです。

【註】 希・ラ両語では、所謂 *Accusativus cum Infinitivo* [不定法を伴う四格]、即ちドイツ語の *Ich sehe ihn kommen* ; *Ich höre dich seufzen* 等と同構造の文章が広汎な応用範囲に亘って発達していましたが、ドイツ語では全然許されない範囲、即ち間接話法で表現す可き『趣・旨・由』の意味形態までも此の寸法で全部表現することが出来ました。文例は既に第[3]項末に掲げましたが、只今問題になっている *sagen* (拉: *dicere*) もやはりその構文だったのです:

[1] *Ho Platon phēsi, en te physei tas ideas hestanai, kathaper paradeigmata ; ta d'alla tautais oikenai, toutôn homoiômata kathestôta.* [*Diogenes Laertius, III, 13.*]

拉丁語でも同じで:

[2] *Plato ideas in natura velut exemplaria dixit subsistere ; cetera his esse similia, ad istarum similitudinem consistentia.*

(プラトンは、イデアと云うものは自然界に於いてはあたかも手本のような具合に潜んでいるもので、爾余のものは凡て之れに範を取ってあやかっているものであり、之れに似通ったものとして存在しているのだと云ったの意)。

仏語では、こんな用法はもう無くなっていますが、それでもやはりラテン直系の語だけあって、たとえば問題の文を教室で学生に直訳させるような時には

[仏] *Platon dit les idées se tenir cachées* (又は *demeurer*) **dans la nature**.....

と云うのが習慣でまた何ならそう云って好いが、ドイツ語で *Platon sagt die Ideen in der Natur verweilen* などということは、たとえ直訳したものとしてもあまりいい感じは与えません。第[3]項末にある *locutus est* (云った) につづく文とて同様です。なお此の *Accusativus cum Infinitivo* に関しては既に *Jespersen* の有名な *Monographie* があり、其の他多くの研究が出ておりますが、茲ではこれを只『趣・旨・由』という意味形態の一角からのみ観察したものであります。

要するに *Accusativus cum Infinitivo* という形式は、希臘・拉丁では実に華やかに発達していましたが、ドイツ語では最早 *Ich sehe ihn kommen* 等の形式、及び *lassen* という助動詞の用法に於いて余喘[よぜん]を保っているのみで、況んや現在の問題たる『趣・旨・由』の表現には最早全然用いられなくなりました。其の点、ドイツ語の文法形態は一つだけ貧弱になってしまったわけです。けれども、文法形態が一つ無くなったからと云って意味形態は何の不自由も感じない。第二章第二節 31 頁で述べた二尺差しの話を思い出して下さい。『形が意味を有するに非ず、意味が形を取捨するなり!』二尺差しが無くなったからと云って小供のお尻をぶつ事を止しはしない。二尺差しが無ければ塵払いでぶつ、塵払いが無ければ蠅叩きでぶつ、本当に何もなければこんどは平手でぶつ。とにかくぶつです。ぶたないという事は決してない。これが意味形態論と言語史との関係であり、同時に言語史の根本問題が意味形態論であるという一例です。

只今引用したプラトンのイデア説ではないが、言語という自然現象の中に、或いは純に或いは不純に隠顕一貫している永遠のイデア的存在は『意味形態』であり、其の時々の言語は此のイデアを *mehr oder weniger originalgetreu* に具現した不完全な *Abbilder* にすぎないのです。

[8.] 術語を含む場合の簡単な表現法。(Kopula-sein の省略)

術語というのは『A は B なり』と宣言する際の B です。『この A は B なる趣・旨・由』を表現するためには、用いる動詞によっては、敢えて接続法を用いるまでもなく、頗る簡潔な表現法があります。既に *einen totsagen, etwas totsagen* という云い方に一寸触れました。Man sagt, er sei tot という代わりに *Man sagt ihn tot* という、前項の *Accusativus cum Infinitivo* で行けば *Man sagt ihn tot sein* とでもいうところでしょうが、その *sein* の要らない所が簡潔なる所以です。同じく *Man glaubt, er sei tot* という代わりに *Man*

glaubt ihn tot という、死んだと思われている馬占山は *Der totgeglaubte Ma* です。tot ばかりではない、形容詞的なものなら何でも好い。Er meldet, er sei krank の代わりに Er *meldet sich krank* (病気の届け出でをする) と云える。形容詞的語局に立つ名詞、即ち述語名詞でも好い。Er *wähnt, er sei ein großer Mann* という代わりに Er *wähnt sich ein großer Mann* 又は Er *wähnt sich einen großen Mann* と云える。Er *dünkt (deucht ; däucht) sich ein großer Mann* でも好い。Er *fühlt, er sei Held* の代わりに Er *fühlt sich ein Held* 又は *einen Helden* と云える。Er *weiß, sie sei ihm zugetan* という代わりに Er *weiß sie sich zugetan* と云って好い。要するに、述語を含むものは大抵こうした簡潔な表現が出来ます。----これらの形態は、形態としては必ずしも趣・旨・由の表現のみに用いられるものではありませんが、茲では趣・旨・由の意味形態の立場から見たのです。

なお重要なのは、『趣・旨・由』を判然と言葉にして表現するためには、**als** [.....として]、**für** [.....として] という語があります。たとえば Er *fühlt sich ein Held* という代わりに、此の際は als を入れて Er *fühlt sich als [ein] Held* と云ってもよいのです。

用いられる動詞としては glauben, behaupten, erklären, wissen, sagen, fühlen, wähnen, empfinden, scheinen, sich vorkommen, denken, betrachten, erkennen, sich bekennen, ankündigen, verkünden, kündigen, melden, sich geben, sich ausgeben 及びそれらと同意のものです。以下は大体の見当をつけるための示唆的の文例とお思い下さい。

- [1] (glauben) Aber die irren sehr, welche in Goethes oder Schillers Tragödie diese seine Anschauung *verwirklicht glauben*. [*Dilthey : Erlebnis und die Dichtung*.]
けれども、ゲーテ又はシルレルの悲劇に於いて、こうした彼の観方が実現されていると思う者があるとしたら、それは誤りである。

- [2] (wissen) FREY: Wollen Sie Ihre Briefe zurück haben? ----HEDWIG: Nein ! In Ihren Händen *weiß ich sie sicher*. [*Anzengruber : Das vierte Gebot*]

FREY: あなたのお手紙をお返ししましょうか？

HEDWIG: いいえ！あなたに預けしておけば一番安心です。

- [3] (erklären) Der Arzt *erklärte sich bereit*, ihn durch die Anstalt zu führen.
[*Otto Flake : Horns Ring*.]
医師は、彼を案内して病院を見せても好いと云った。

- [4] (wähnen) Du *wähnst dich frei*, und du bist gefangen.
[*Grillparzer : Die Argonauten. I.*]
おまえは自分で自由なつもりでいるかも知れないが、おまえは捕まっているのだぞ。

- [5] (fühlen) Wer sich *ohne Sünde fühlt*, der hebe den ersten Stein auf !
[*Neues Testament*]
みずから省みて罪なしと信ずる者先ず最初の礫[つぶて]を拾いて之れを打つべし。

- [6] (denken) Und haben sie das Ärgste dir getan, ich *dachte dich den Mann*, zu stehn dem Ärgsten ! [*Grillparzer : Ein treuer Diener seines Herrn*.]

たとい彼等が如何にひどい仕打ちをしたにせよ、わたしは、おまえに限って大抵の事に恐れをなす人間ではあるまいと思っていたのだ。

- [7] (dünken) Was *ein Eiland allen dünkte*, war ein ruhig schlafend / Hingestreckter, ungeheurer Wallfisch. [*Platen : Die Abbassiden, III.*]

衆人の眼に島と見えたのは、実は悠々と巨軀を横たえて眠る巨鯨であった。

- [8] (scheinen) Es *schien* der Himmel mir *ein aufgerolltes Buch*, / Und Mord darauf geschrieben, tausendfach. [Grillparzer : *Die Argonauten*. I.]

天は恰も披[ひら]かれし書の如く、見渡す限り『殺せり』の文字を以て書きうずめられてあるかの如く思われた。

- [9] (verkünden) Und so regt er sich gebärend, sich als Knabe schon *verkündend* / *Künftigen Meister alles Schönen*, dem die ewigen Melodien / Durch die Glieder sich bewegen ; [Goethe : *Faust*, II.]

かれの振る舞いは夙に斯くの如くであり、尚弱冠の一少年でありながら、既に不朽の旋律を一挙手一投足に顕現する、来る可き時代の美の巨匠たることを想わせるものがあつた。

- [10] (ankündigen) Ein ansehnlicher Mann, einfach gekleidet, den sie für einen Pachter halten konnten, trat ihnen entgegen und *kündigte sich als Herr und Patron des Hauses an*. [Goethe : *Wilhelm Meisters Wanderjahre*. I. 11.]

一見小作人とししか見えぬほどの、極く質素な服装をした立派な男が彼等を出迎え、自分が此の屋の主であると告げた。

- [9.] 所在を示す場合の簡単な表現法。(所在を示す sein の省略)

前項と同じ行き方で、こんどは主語述語関係ではなく、『A は B に在り』という趣・旨・由を表現する場合にも、類似の簡潔な表現が行われます。たとえば Ich glaubte, du wärest zu Hause という代わりに Ich glaubte *dich* zu Hause と云える。Sie wähnt, ich sei fort (彼女は私が出て行ったと想っている) という代わりに Sie wähnt *mich* fort と云える。Er weiß, dass ich mich in der Stadt befinde.(一人称の時には直接法を用いる事は既に申しました)の代わりに Er weiß *mich* in der Stadt といえる。----Er weiß *mich* in der Stadt **sein** などと動詞を入れては却って誤りです。----使用する動詞の種類は略々前項の通り。

- [1] Er besaß keine Uhr. Er war glücklich, an der dünnen, goldenen Kette, die er um den Hals gehängt trug, nur ein kleines Medaillon *in seiner Westentasche* zu wissen.

[Thomas Mann : *Der Kleiderschrank*.]

かれは時計というものを持たなかった。その代わり、頸に掛けてぶら下げていた細い金鎖の先に付いている小さなメダルがちゃんとチョッキのポケットに這入っていることを意識しつつひとり悦に入るのであつた。

- [2] Wenn ich den stillen Domplatz betrat, dünkte ich mich *im Vorhof des Gotteshauses* und fühlte mich versucht, ihn nur leise auf den Zehenspitzen zu durchschreiten.

[Otto Richter : *Lebenserinnerungen*.]

私は此の物しずかな寺院の前の広場に来ると、いかにも神の殿堂の前庭に來たと云う気持がして、つい窃[そつ]と足の爪先で其処を横切りたいような気持がするのであつた。

- [3] In weniger als einer Stunde fuhren wir in den Hafen ein, der rings von einer hölzernen Brücke umschlossen war, so dass man sich *in einem kleinen Teich* vermeinen konnte.

[Schnitzler : *Die Frau des Weisen*.]

それから一時間も経たないうちに我々の船は港に這入った。その港というのは、周囲を木製船着き場に取り囲まれていて、なんだか池の真ん中にでもいるような気のする港であつた。

- [4] Da lag das hübsche, blühende Mädchen und träumte von ihm, den sie so lieb hatte, und den sie nun *auf der Wanderung über Berge und durch Wälder* wähnte.

[Andersen : *Der Rosenelf*.]

其処には可愛らしい浦若い娘がねそべって、彼女がとても愛している、そして今頃はおそらく山を越え森を横切って旅をしているのだと一途に思い込んでいる彼と云う男に向かって想いを馳せていたのであった。

- [5] Ich bin weder Gott, noch der Mensch, weder das höchste Wesen, noch Mein Wesen, und darum ist's in der Hauptsache einerlei, ob ich das Wesen *in Mir oder außer Mir* denke. [Max Stirner : *Der Einzige und sein Eigentum.*]

私は神でもなければ、また人間その者でもない。最高の存在でもなければ、また私自身の本質でもない。であるからして、本質なるものを私なるものの内に存在すると考えようと、或いは私なるものの外に存在すると考えようと、そんな事は大体から云ってどちらでも好い事である。

- [6] "Ach Georg," begann sie, "welch unglücklicher Stern hat dich in dieses Heer geführt?"
"Du warst dieser Stern, Marie," sagte er : "Dich habe ich *auf dieser Seite* geahnt....."
[Hauff : *Lichtenstein.*]

『これさ、ゲオルク様、』と彼女は語り始めた、『そなたはまた何とした風の吹き廻しで、こんな軍勢に加わっておしまいなされたぞいのう』

『さればその悪い風と申すのが、取りも直さず左様申さるるそなたであったのじゃ』と彼は云った。『実はそなたもこちら側かと思うてな。』

[10.] 前置的接続詞 *als* 及び前置詞 *für* による表現。

前出二項に述べた簡潔な表現法は、実用的な立場からは、動もすると簡単に『*als* を省くのだ』と云う風に片づけられてしまいそうですが、そういう説明法は、実用的見地から学生などを欺すには大変都合がいいが、言語現象というものの正しい解釈としては甚だ心外な言説で、それは例えば生まれたばかりの赤ん坊の頭が『禿げている』というのと同じです。禿げているならまだしも、此の児は感心に綺麗に髪が剃れている、などと云うのはどんなものでしょうか？

要するに『かれは自分が英雄だと思った』という意味を表現するのに、第一の方法としては簡潔な *Er fühlte sich ein Held* (又は *einen Helden*) というのがあり、なお第二の方法としては『趣・旨・由』を形に表わさんとして *als* を用い、*Er fühlte sich als ein Held* (又は *als einen Helden*) という云い方をし、また其の他に『趣・旨・由』の内容を文章にまで発展せしめる手段として接続法というものがあるから *Er fühlte, er sei ein Held* (又は *er wäre ein Held*) という第三の方法が生じ、なおもう一つ念が入って来ると『趣・旨・由』が更に一つの従属的接続詞として独立して *dass* という形を取るに至る、という、これが意味形態論的な解釈であります。

こうした関係から見ると *als* という何でもないものの重要な意義が明らかになります。それと同時に、*als* が『接続詞』(接続法と同機能！)であると云う妙な現象の意味する所も分明になるでしょう。*als ein Held* などと云うと、形式的に考えると *als* はちょっと前置詞ではないかと云う風に思えますが、前置詞ならば格支配というものが無ければならないのに、*als* の次には何格でもやって来る。*als eines Helden* という場合もあれば *als einem Helden* と云う場合もある。だから既に形式的に云っても前置詞でない事は明瞭ですが、意味から云っても前置詞ではなく、*sei* や *wäre* が『接続』法であり、*dass* が『接続』詞である以上は、それと同機能の *als* も亦どうしても『接続』詞でなければならぬ事は、暫く前から述べつつある意味形態論的統一の見地から見て必至の事実と云わなければなりません。

けれども、*dass* と *als* とは、同じ接続詞でも形式的に違った点がある。即ち *dass* の方は文章の前に置かれ、*als* の方は語又は句の前に置かれる。文章の前に置かれる接続詞は普通『従属的』接続詞と云われて居りますが、単語の前に置かれる接続詞にはどうもはっきり呼び慣らされた名称が無いから、私はこれを前置的接続詞と呼ぶ事にしています。如上の意味形態論的見地をお考え下されば、誰が考えても斯ういう範疇を一つ設けなければおさまりがつかない事がわかりになります。

als と殆ど同じものに für があります。この方は純然たる前置詞ですが、それでも矢張り als と同じ意味形態であることが意識に動く結果、たとえば was für ein Mann ? was für eines Mannes ? was für einem Manne ? 等と云ったように、必ずしも四格を支配しない場合があるということは、這般[しゃはん]の関係を雄弁に物語っています。此の際の für は als と同様『云々として』を意味したもので、たとえば was hast du für ein Buch ? の原意は、『君は、書物としては、何をもっているか？』です。----けれどもまあ、これは例外で、其他の場合 für は必ず四格を支配することになっている。けれども機能は als と同じで、どちらを用いるかは習慣の問題です。

扨て、此の項で問題にしているのは、たとえば『私はかれを男と思う』『彼は此の事実を嘘だと云う』『我々は此の行動を不可解と感ずる』等の『と』です。接続法の文を用いれば長くなるが、文の代わりに一句又は一語を用いれば、単に als だけで簡単に表現できる。どんな場合に出来るかと云うと、それは用いる動詞によります。

als etwas gelten, für etwas gelten (云々と認められている)、für etwas halten (云々だと思う)、などは既に充分御存じの事と思いますが、これらの熟語みたいなものを、たとえば halten が für という前置詞を『支配する』と云ったように、普通の支配概念で考えるのは非常に形式的な考え方で、それが証拠に für の次には形容詞が来てもいいし(Ich halte ihn für verrückt)、また堂々たる一つの文章であるかの如き『述語句』が来てもいいのです(Ich halte ihn für vor lauter Glück übergeschnappt 私は彼を幸福の余り気が狂ったものと思う)、つまり間接話法を用いて表現する場合と意味形態として毫も相違がない。独文を読む場合にはこんな事はどうしても好い事でしょうが、独文を作る場合には斯うした事をはっきりと心得ていないという頭頭の融通が利かなくなります。また読むための文法などというものは大したものはいらない、形容詞の変化ぐらい知っていればあとは辞書と常識とで間に合います。文を作るための文法にして初めて真の文法であり、そのためには従来の文法を逆立ちさせて、まず意味の筋路の方を確立し、然る後その表現法を探究するというメトードに拠るの外はありません。----では二三のわかり切った文例を示して als と für の応用範囲を暗示しておきます。

- [1] Jedes Kunstwerk wird erst als Kitsch verschrien.
どんな芸術品でも最初は先ずインチキ呼ばわりされる。
- [2] Der Bericht hat sich als verfälscht herausgestellt.
報告は捏造と判明した。
- [3] Die Welt kann man sich als von irgend jemandem geschaffen denken.
世界は之れを誰人かによって創られたものと考えることができる。
- [4] Was einem nicht gefällt, wird ohne weiteres für [又は als] belanglos erklärt.
自分に気に入らぬ事は直ぐ詰まらぬ事だと云われてしまう。
- [5] Man würdigt nur dasjenige als eine Leistung, was einen Neuigkeitswert hat.
人はただニュース価値ある事柄のみをもって功績と認める。
- [6] Er würde das als [又は für] eine Herausforderung auffassen.
かれは之れを挑戦と見なすであろう。
- [7] Den Leuten gegenüber gibt er sich und seinen Anhang als [又は für] eine religiöse Gemeinschaft aus.
世間に対しては、彼は己れ並びに己れが一味を宗教団体と称している。
- [8] Jeder Staat stellt seine Aufrüstung als eine notwendige, durch den Militarismus der Nachbarländer ihn aufgezwungene Maßregel hin.
どの国家も其の軍備拡張を隣国の軍国主義によって余儀なくされた已むを得ざる処置だという。

- [9] Eine Diktatur im westlichen Sinne wird *als* mit dem eigentlichen Charakter unseres Volkes unverträglich empfunden.
ヨーロッパ各国の如き意味に於ける独裁制は我が国の元来の国風とは一致しない感じがある。
- [10] Mein Magenübel erwies sich *als* eine Folge des Mangels an nötigen Bewegungen, den mein Beruf mit sich bringt.
私の胃病は、職業の性質上已むを得ない運動不足の結果と判明した。

以上は何でもない数例で、動詞さえ適當のものをを用いれば、どんな間接法の文章でも大抵 *als* または *für* に導かれる句によって表現することが出来るという文例に過ぎないのです。

[11.] 『趣・旨・由』の四格

接続法 *dass* を用いない簡潔な筋路としては、以上に挙げた外になお四格の特殊用法があります。即ち、元来ならば一つの文章として表わす可きほどの『趣・旨・由』の内容をば、単なる一箇の名詞を四格形に用いる事によって、動詞と対応して充分その意を達することが出来るのです。即ち茲では、接続の機能は『四格』という文法形式によって發揮されるわけです。

現象としては極く普通のものですが、直ちに以て此の特徴を其の最も極端なる形に於いて把握するために、まず奇抜な例を挙げましょう。沙翁[さおう]の *Hamlet* の中に：

I will speak daggers to her, but use none.

という台詞があります。*speak daggers* というのは、短剣を語る、ですが、短剣を語るというのは、別に短剣に関する知識や所見を開陳するのではない、言う事をきかぬとこれだぞとか、この短剣で貴様の胸をぐさりと刺すとか刺さぬとか、とにかくまあそんな物騒なことを云うことです。即ち *daggers* という一語が、簡単ではあるが可なり複雑な脅迫文句の内容、即ち『趣・旨・由』を表現している。これはドイツ語にもちゃんとある筋路だから、沙翁の古典的訳者 *Schlegel* はこれを其の儘直訳している。

Nur rede will ich Dolche, keine brauchen.

口調からいうと、*reden* と *brauchen* とが猛烈なアクセントを以て発音されるために、この一句が前後でピシリと引き締まって、セリフとして私にはどうも翻訳の方が原文より効果がありそうに思われるのは僻目[ひがめ]でしょうか。

なお参考に 41 頁の例文[2]を御覧下さい。*Denen, welche ihm die geringere Anzahl seiner Truppen entgegensetzten*, という所の、*entgegensetzen* の意味は、こうした用法の一般性をよほどよく心得ている人でないと、こうした前後の文脈のない断片文にあっては、うっかりすると、『少数の軍を対峙せしめる』と云ったように考える傾向があります。訳文がついていなかったら、ちょっとまごつく人もあるでしょう。たとい訳文を見ても、納得のできない人もあるかも知れません。ですから、此の項は非常に一般的であると同時に重要な項です。(Denen 云々は、云い代えれば *Denen, welche ihm entgegensetzten, die Anzahl seiner Truppen sei ja zu gering*, と云う間接話法文です。即ち *die geringere Anzahl seiner Truppen* という四格句は『趣・旨・由』の四格なのです。)

実例によって用法を会得して頂くことにします：

- [1] *Dir hat er längst den Untergang geschworen.* [*Schiller : Wilhelm Tell.*]
あの人は、兼ねてから貴郎を亡き者にせんと企んでいるのでございます。
- [2] *Endlich an einem Sonabend schützte er Unwohlsein vor und blieb zu Hause.*
[*G. Freytag : Soll und Haben.*]
遂にある土曜日のこと、彼は気分が悪いと称して家に居残った。
- [3] *Kann dem Römer der Pharisäer denn was sein, des Zunge /*
Beständig Aufruhr predigt gegen Rom? [*Hebbel : Herodes und Mariamne.*]

口を開けば直ちに羅馬に対して叛旗を掲げよと説くパリサイびとなれば、羅馬人たる彼にとっては左程有難いものであらうとも思われぬ。

- [4] Der Herzog winkte dem Arzt finster *Entfernung*, und der zog sich unter vielen weiten und entschuldigenden Bewegungen zurück. [*Feuchtwanger : Jud Süß.*]

公は怕[おっ]かない顔をして医師に去れと目くばせしたので、医師は頓首再拝、平蜘蛛の如くへいつくばって謝りながら御前を退下した。

- [5] Wie, Mylords? / Wer war es denn, der eine Tiefgebeugte / Mir angekündigt? Eine Stolze find' ich, / Vom Unglück keineswegs geschmeidigt. [*Schiller : Maria Stuart.*]
各々方、これは何としたことじゃ。此の女が遂に折れて出たと申すによって参ってみれば、折れたはおろか此の氣位の高さ、思い知ったそうな素振りは微塵もござりませぬぞや。

要するに既に最初断った通り、現象それ自身は何でもない極く普通のもので、[待った『と』云う。](Halt gebieten ; Stillstand gebieten)、[助け船『と』呼ぶ](Hilfe rufen)、[今日の仕事はこれで終わり『と』どなる](Feierabend ausrufen)、[殺すぞ『と』脅かす](Tod drohen ; Verderben drohen)、[愈々戦争だ『と』宣する](Krieg erklären)、[転地療養でもなさい『と』すすめる](andere Klimata verordnen ; Ortsänderung empfehlen)、[心の中は大変なくせに嬉しい嬉しい『と』佯[いつわ]る、即ち嬉しそうな顔をする](Frohsinn heucheln)、[嵐だ『と』鐘を鳴らす、即ち暴風警報を発する](Sturm läuten)、等々々々、これらはすべて"Sturm !"『と』läutenすると云ったように、四格名詞を" "でかこって見れば、その名詞が意味形態としては普通の四格ではなくて、一つの「引用文」たる機能を持っていることがわかります。つまり"Sturm !" は "Es kommt ein Sturm !" なり、"Sturm ist im Anzug !" なり、或いは間接引用にすれば Sturm sei im Anzug といったようなものに相当するのです。" " の代わりに！の印をつけてもいいでしょう。たとえば、次の文では現に！がついていますが、これは取ってもつけても同じで、書く人の趣味の問題です。

Der Sturmwind wird, die Waldungen durchbrausend, / *Empörung !* rufen. und die See, / Des Landes Rippen schlagend, *Rache ! Freiheit !* brüllen.

[*H. Kleist : Hermannsschlacht.*]

暴風は森をざわめき渡りて民よ起てと呼号し、わだつみは陸の肋[あばら]なる巖を鞭打ちつつ、仇討て、自由を得よと吠え猛るべし。

- [註] 此の "～"型の語局は、拙著『独作文教程』第十一課に於いて取り扱った掲称的語局と関係します。

- [12.] 『趣・旨・由』たることを全然表現しない場合、及びほんの序でに表現するに過ぎない場合。

『趣・旨・由』は、必ず「.....と云った」、「.....と称せられる」、「.....と判明した」などと表現するかというに、言語の実際は必ずしもそうではありません。たとえば全然表現しない場合があります(「扮役的直接法」)、また『趣・旨・由』の内容そのものの方に重心が行ってしまうと、それが『趣・旨・由』なることの方は文法的にはむしろ本筋から離れてしまって、第二章第一節(sagen 型の意味形態)で詳述したような、いわば『逆の関係』が生じて来ます。既出の部分、或いは私が既に他の機会に発表した研究とは重複しますが、次に簡単にその概要を示唆して置きます。(詳細は凡て参照ということにして省略させて貰います。)

1. 扮役的直接法[*Indicativus mimicus.*]----これは『趣・旨・由』に過ぎない事柄を、恰も趣でも旨でもないかの様に云う方法です。即ち間接話法の代わりに、わざと直接法を用いる方法です。この話は非常に面白いが、既に拙著『独逸語学講話』第[3]項の「扮役的直接法」で縷述[るじゅつ]した問題ですから、説明は省きます。ただ一つだけ例を

挙げると: BEERMANN : Was soll ich tun, wenn mich die Polizei nach dem Buch fragt?
HAUSER : Da gibt es nur eins. Sie wissen nichts. [Ludwig Thoma ; Moral III.] この最後の
Sie wissen nichts は『知らないと言え』又は『知らぬ存ぜぬの一点張りで押し通せば
いいじゃないか』ということですが、それを面白く、『君は知らないのだよ』と云った
のです。

2. 挿入主文章。----これは只今云った「sagen 型の意味形態」に用いる動詞です。たと
えば sagte er, sprach er, murrte er, dachte er bei sich selbst, behauptet man, heißt es, scheint
es, will mir scheinen 等をコンマの後に挿入する法です。それから、コンマ或いは-----で
もって so berichtet die Auslandspresse と云ったように挿入することも出来、また-----で
もって前後を仕切って man glaubt wenigstens im Augenblick daran (人は少なくとも只今
のところそう信じているが)などと、立派な独立文を前後と何等文法的関係なく単に割
り込ませることも出来ます。

3. wie.....に依る従属文: これは云わなくても解るでしょう。Wie behauptet wird ; wie
es unter diesen Leuten heißt ; wie man es gewöhnlich sagt ; wie er damals glaubte 等の句を、
『趣・旨・由』にせんとする語句の前又は後に挿入すればよろしい。

4. 断書的仮定文: um mit Goethe zu sprechen (ゲーテの言葉を藉[か]りて云えば)、
nach dem zu schließen, was du sagst (おまえのいう所を以て推定するに)等、殊に mit, nach
等の前置詞に注目せよ。(詳細:『独作文教程』308 頁)

5. 単に副詞に依る表現。----Wie.....の挿入文は、簡単なものはそれに対する特殊な副
詞がある事がある。たとえば scheinbar(見たところ)、anscheinend(見たところ)、
bekanntlich(人の知る如く)、nachweislich(何なら証明することも出来る如く)、nachweisbar
(同意)、anerkanntermaßen (既に認められている如く)、vermeintlich (誤ってそう考えら
れている如く)、vorgeblich (表面上そういう事になっている如く)、angeblich (表面上そ
う称している如く)。

6. 形容詞による表現: 概念によっては、たとえば sogenannt などは、随意の名詞に冠
せしめて、其の名詞を間接話法化してしまうことが出来る。die sogenannte Kontrolle(所
謂統制)といえ、人が普通『統制と』云っている所のもの、ということです。eine
angebliche höhere Bildung と云え、事實はどうか知らないが、表向き高等教育『だと』
いうことになっている所のものです。das vermeintliche Feuer といえ、本当の火事では
なく、一時火事『だと』誤伝された嘘火事です。Der vorgebliche Kommissar といえ、
嘘か本当か知らないが、とにかく本人は刑事だ『と』称している、即ち自称刑事です。
ein seinwollender Künstler といえ、本当は芸術家ではないが、本人がこれから成ろうと
している、或いは自称芸術家です。英語にも would-be とか going-to-be とかいった形容詞
がありますが、それらに似たものです。こうなると、もう、必ずしも間接話法には関係
はないが、たとえば、昔は美人だったが、今はもう美人でない美人、即ち在りし日の美
人のことを eine gewesene Schöne というのなども同じ文法関係で、『美人であった』者
eine schön Gewesene を逆にして eine gewesene Schöne といえと思えば好いでしょう。
一般的・文法的に云うと此の現象は非常に広範囲に亘るもので、der erklärte Feind, der
ausgesprochene Kommunist, der angehende Diplomat, die geborene Müller(嫁いだ女の、旧
姓は Müller だということ)、abgesagter Feind, der abgeschworene Feind, mögliche Millionär,
der eventuelle Tod 等は凡て多少に拘わらずこうした文法関係で出来上がった妙な形容詞
です。

7. 引用符の機能: 間接話法というのは或種の意味に於いては凡て一種の引用なので
すから、引用符によって一寸軽く間接化するという事は極く自然です。" " を用いれば、
その上殊更「所謂」という形容詞を用いる必要はないわけです。Die Japaner, die hinter
ihren Pappwänden und papiernen Schiebetüren wohnen, welche oft große Löcher aufweisen,
"ziehen" doch keinen "Wind." 斯ういえば敢えて其の後に持って来て wie sie das nennen と
か wie sie sich komischerweise ausdrücken とか云う必要はまあ無いわけです。----日本語
でも同じような細工が利きます。たとえば、君また『妹』から手紙が来たのかい? など
と云うと、極く簡単に間接話法になってしましましょう。Hast du schon wieder einen Brief
bekommen von derjenigen, von der du behauptest, sie sei deine Schwester? と Hast du schon

wieder einen Brief bekommen von jenem Mädchen, das du für deine Schwester aus gibst?とも、或いはまた von deiner angeblichen Schwester 又は von deiner seinwollenden Schwester とも云う必要はないでしょう。

[13.] 搬動語法と結果挙述形容詞の応用

同じ間接引用にしても、引用する態度が厳正中立的か(判断差し控え)、或いは多少懷疑的か、という見地から観察するというと、此の最後にあげた項目には、もうだいぶ懷疑的なものが多くなりました。vorgeblich, angeblich, vermeintlich などになると、既に殆ど『趣・旨・由』が信ぜられないという事を前提として居り、また最後にあげた『妹』などになると、懷疑どころか、これはもはや露骨な皮肉という可きです。

この傾向の最後の Ausläufer(支脈)として当然触れられなければならないのは、既に他の機会に何回となく紹介したことのある例の『搬動語法』という奴の応用です。搬動語法そのものは最も一般的な現象で、間接話法とは直接には何の関係ありませんが、その形式を間接話法に利用することがドイツ語では極く自然であり、また度々出て来る現象なのです。

では如何なる意味形態の時に利用できるかというに、それは非常にはっきりしていて、つまり、前項に挙げた七個条の中に何遍も出て来た或種の場合の如く、『現実に反する事が一見明瞭なる』構造を取り得る場合です。(此の場合が発展して行くと、間接話法は遂に約束話法となってしまうので、筆者が接続法の意味形態論的システムを根本的に究明せんがために、一見接続法という文法的形式とは何の関係もなさそうに思われる意味の世界の根柢へ倦くまで掘り下げんとしているのは、こうした関係を深く考えて頂かんがためなのです。)『現実に反する事が一見明瞭な構造』とは何でしょう?それはたとえば:『今仮に君たちが彼の立場に立ったと考えて見たまえ!』というような場合です。単に頭の中だけで考えて見ろと云う以上は、これは現実に存せぬ『趣・旨・由』なることは一見明瞭です。

これは、たとえば Denkt euch einmal, ihr wäret an seiner Stelle !と云ってもいいが、或いは間接文を全然用いないで、単に

Denkt euch einmal an seine Stelle !

と云っても好い。これは別に私が作った文章ではない。Schiller 作 "Die Räuber" の第一幕第一場に出て来る句の引用です。自作の文例でないものは大抵出所を挙げる事にしていますから安心して下さい。

直訳すると、『諸君自身を一度彼の立場へと考え「移して」見給え』です。此の『云々し移す』と云ったような動詞の用法を私は搬動語法と呼びます。或いは bringen 型の動詞と云っても好いでしょう。

この文例で直ちに注目して頂きたい点がある。それは an seiner Stelle というのが an seine Stelle と改まって来たことです。これが若し Denkt euch an seiner Stelle ! (即ち denkt euch als an seiner Stelle seiend) であるとしたら、これは既に[9]項(所在を示す場合の簡潔な表現法、存在を示す sein の省略)で述べた形態に該当するでしょうが、そうではなく、四格支配、即ち『運動方向規定』です。

なお、その区別のために次の文を研究して下さい。這般の消息が面白いほど露骨に判ります:

Goethe besaß in hohem Grade die Fähigkeit, immer Gesichte in die Außenwelt zu verlegen, sie leibhaftig vor sich zu sehen. Er nimmt hier die Helmholtzsche Theorie des Sehens vorweg: "Wir sehen die Sonne, die Sterne an den Himmel, nicht an dem Himmel. [Trendelenburg: Goethes Faust.]

ゲーテは常に幻覚を外界に投影して之れを眼前に歴々と観るという能力を人一倍持っていた。此の点かれは『吾人は天空に懸かる日月星辰を視るに非ずして、むしろ日月星辰は天空に懸かれり「と」視るのである』といったヘルムホルツの視覚説の先駆者である。

吾人は普通視覚ほど確かな直接法はないと思っているが、ヘルムホルツの説によると、これ亦非常にあてにならない間接話法だということになって来る。吾人は日月星辰が天空にある『のを』見るのではなくて、実際何処にあるか知れないが、それをとにかく「天

空へと視移してしまう」、即ち単に天空にある『と』視るきりである、だから眼底の映像は事実性を持っていない、単なる『趣・旨・由』だということになる。

要するに、搬動語法によって表現する間接話法は、こうした『無理な』場合、即ち現実を無視した主観的な考え方の場合に限られます。参考のために数例：

- [1] Ich dachte mich in schöne Kleider und begegnete den allerliebsten Prinzen, die nicht ruhen noch rasten konnten, bis sie wussten, wer die unbekannte Schöne war.

[Goethe : Wilhelm Meisters Lehrjahre.]

私は自分が美しい着物を着たものと想像し、とても感じの好い王子達に逢い、その王子たちが忽ちやっきとなって私の身元を調べ始めると云ったような光景を考えて見た。

- [2] Aber er liebt ihn dennoch, und in seiner unermüdlichen Liebe möchte er den Shakespeare nachträglich zur wahren Kirche bekehren ; er kommentiert eine christliche Gesinnung ih ihn hinein. [Heine : Shakespeares Mädchen und Frauen.]

併し彼はそれにも拘わらず沙翁を愛し、営々たる愛の努力の結果は遂に死せる沙翁を生かして真の教会に転向するに到らしめ、是が非でも沙翁はクリスチャン的イデオロギーの持ち主であったと云う事に曲げてしまふと云う鼻息である。

- [3] Ich bin ein Traum mit Lust und Schuld und Schmerz, Und träume mir das Messer in das Herz ! (er ersticht sich). [Lenau : Faust.]

我こそは喜怒哀楽に充ちたる一炊の夢なりしよ、いざ此の短剣を我と吾が心臓の真っ只中へと夢見んかな！（と云いつつ自刃す）。

- [4] Er denkt das Nichtausgedehnte in Ausgedehntes um.

[Oswald Spengler : Untergang des Abendlandes.]

彼[自然科学者]はディメンション無きものを仮にディメンションある物と考え改めて見るのである。

- [5] Wer sich aus der Welt wegdenken und seinen Ersatzmann nennen kann, der gehört nicht mehr hinein und wird auch bald genug hinausgestoßen, wenn er nicht von selbst geht.

[Hebbel : Judith.]

仮に自分という者が此の世にいないと考え、いなくても誰それがいれば充分間に合っていると思える者がいたら、其の人間はもはや人生に何の用もない人間で自ら此の世を去るか、さもなければ、何れ誰かに追い出されてしまう。

既述の如く、意味形態の点では非常にはっきりしていて、とにかく現実の如何に拘わらず単に念頭でそう考えてみる、という『趣・旨・由』が四格と方向規定との二要素によって簡潔に表現し尽くされる際には、かなり無理な構造が許され、且つ無理なほど却って面白いと云う、茲が搬動語法の妙趣です。----誤解の無いように申し上げておきますが、搬動語法その者が凡てこうした意味を持っていると思つては飛んだ間違いで、むしろ逆に、こうした意味形態の場合には搬動語法を用いる事が出来ると云う事を云っているのです。意味形態から出立して文法形態の諸種の機能を研究する場合に生じた結論を、その儘形式文法(即ち形式から出立して其の意味を云々する方の文法----たとえば初歩の時にやる文法など)の方へあてはめることは『人間は動物なり』故に『動物は人間なり』と結論するのと同じ誤りです。(搬動語法その者の詳細に関しては『独逸語学講話』中の『搬動詞』参照)。

搬動語法と同じように、やはり名詞の四格と対応して結果挙述の形容詞を用いる云い方があります。たとえば Man sagt ihn tot(人は彼が死んだと云う)など、これも同じように利用することの出来る形式ですが、これは既に前々回に触れた事ですから此处では省きます。

[14.] 懷疑的反問の諸形態----第二式接続法を用いるは此の一形態なり ----

此の項から後は、『趣・旨・由』即ち間接話法の内容を成す事由が、明らかに懷疑的に取り扱われ、同時に形式としては**接続法の第二式**が用いられることになります。これで愈々また形式としても本当に接続法の用法に入ってきたわけです。同時に、約束話法との中間現象にも触れ始めます。

まず、直感を持って端的に把捉し得る意味形態から出発しましょう。たとえば、ビルの地下室などにいて、突然『表は土砂降りだ』(*Draußen gießt es in Strömen*!)などと聞くと、誰でもハッと吃驚[びっくり]して『なにッ? 土砂降りだって?』と反問する。こういう時にはまさか *Sie sagen* : "*Draußen gießt es in Strömen*"? なんてのろまな言い方はしない:

Was? Es gösse in Strömen?

と反問する。即ち、或種の反射運動を持って *gösse* という第二式接続法で相手の言を鸚鵡返しに投げ返すことによって、其の『趣・旨・由』に対する懷疑的態度が無意識的に表現されるわけです。こういう場合はどうしても第二式に限るので、*Es gieße in Strömen?* はどうも好くない。同じように、『なんだって、彼奴が俺に似ている?』は *Was? er gliche mir?*----『なんだと? 魚が空中を飛ぶんだって?』は *Was? ein Fisch flöge durch die Luft?*----『何? 順調に行ってる? お冗談でしょう。』: *Was? Das Werk gediehe?* Ja, Kuchen!----『なに? 待てば海路の日和だと?』: *Was? Die Gelegenheit böte sich von selbst?*----『なに? 俺が約束を違えた?』: *Ich hielte nicht Wort?* 又は *Ich wäre wortbrüchig?* 又は *Ich hätte nicht Wort gehalten?*

この形式に最も適するの、*hielte, böte, flöge, sähe, gediehe, schlüge* 等の、強変化動詞の第二式、又はその他の不規則変化です。弱変化は過去との区別がつかない所があるので、こういう場合にはどうも一寸勝手が悪い。

もっとも、必ずしも相手の言った言葉を鸚鵡返しに投げて返す場合だけとは限らないので、なんなら自分の方で勝手に邪推した事柄でもよし、或いは大分前に一度耳にしたことのある『趣・旨・由』を想起してそれを口に出してもよいのです。本当の『鸚鵡返し』という奴は、これはもう其の名の通り鸚鵡返しであって、鸚鵡が *gießt* から *gösse* を造るだけの文法的素養を持っていないと同様に、本当の鸚鵡返しをする人間にもそんなのんきな余裕はありません。そんな際は相手の云ったままを返します。次の例の「第一」がその好例です。

[1] DERWISCH: Beim Propheten ! / Dass ich kein rechter bin, mag auch wohl sein. /
Zwar man muss----

NATHAN: Muss ! Derwisch ! ---- Derwisch muss ! / Kein Mensch muss müssen,
und ein Derwisch *müsste* ? Was *müsst'* er denn ?

[*Lessing : Nathan der Weise, I. 3.*]

回教僧 : これは畏れ入って御座る。愚僧が生臭坊主じゃとの仰せは或いは尤もかも知れぬて。所がどうも何を申せ万已むを得ぬ仕儀が御座るによって.....

ナータン : 已むを得ぬとな? 回教僧が? 回教僧が已むを得ぬとな? 人間凡そ已むを得ようと思うたら必ず已むを得られるものじゃに、回教僧ともあろう者が已むを得られぬと仰せか? それは扨て已むを得ぬと仰言るは、一たい抑々何が已むを得ぬのじゃ。

[2] Was ? Räuber *wären* es gewesen, die uns anfielen?

---- Mörder waren es ; erkaufte Mörder ! [*Lessing : Emilia Galotti, III. 3.*]

なんですって? 今私たちを襲ったのは匪賊だったと仰言るの? ---- 刺客です!
金で雇われた刺客です!

[3] CARLOS: O, der Einfall / War kindisch, aber göttlich schön ! Vorbei / Sind diese Träume.---- MARQUIS: Träume, Prinz !----So *wären* / Es Träume nur gewesen?

[*Schiller ; Don Carlos , I. 2.*]

カルトス：いや、実にどうも子供らしい事を考えたものだね。併しまあ非常に愉快だったよ、ああいう夢はもう昔話さ。----侯爵：夢と仰せになりますか？ではあれは単なる夢であったと殿下は仰せになるので御座いますか。

- [4] Mich *säh'* die Welt, die mir gehässig ist, / Zu dem gemeinen Los herabwürdigt /
An eines Mannes und Gebieters Hand ! / Nein, nein ! So tief soll Turandot
nicht sinken ! [Schiller : *Turandot*, III. 2.]

余の常人と同列に伍し、男なんぞに頭を下げ、厭な世間に笑われて何としよう、いやじゃ、いやじゃ、いくら何でも其処まで落ちぶれては、此のトゥーランドットの立つ瀬がないわいなあ。

- [5] DANKWART: (zu Hagen) Was ist denn das für Blut?
----HAGEN: Wo *hätt'* ich Blut? [Hebbel : *Die Niebelungen*, III. T. II. 1.]

Dank ヴァルト：(ハーゲンに向かって)それは何の血じゃ。
----ハーゲン：血じゃと？どれ、何処に血が出ている。

意味形態が非常に明確ですから、説明は殆ど無用でしょう。つまり Ein Fisch flöge durch die Luft, sagen Sie?などと、sagen Sie や sagst du や sagt ihr を足して考えて見れば好いわけです。たとえば次のように：

Verzeiht, Mylord, dass ich Euch gleich zu Anfang / Ins Wort muss fallen----Unterworfen
hätt' ich mich / Dem Richterspruch der Zweiundvierzig, sagt Ihr? Ich habe keineswegs
mich unterworfen. [Schiller : *Maria Stuart*, I. 7.]

あいや暫くお待ちあれ、お言葉なれどみずからは、いささか承服致し兼ねます。
四十二人の裁き手の成敗に任せると申した由仰せらるれど、みずからは其の様な事を申した覚えはござりませぬが。

斯うした懷疑的な反問に用いる第二式接続法は既に述べた如く、sähe とか stände, stünde とか云った『強変化』形の第二式、及び hätte, wollte, sollte, dürfte 等の話法の助動詞、並びに wüsste, dächte 等の不規則に属する混合変化の動詞が主で、普通の弱変化はあまり用いられません。そこで、では若し弱変化を用いる時にはどうするかというと、その為には此の意味形態に特有なる助動詞 sollte と、sollen の直接法があります。此の助動詞を用いれば、強弱の如何を問わず、本動詞は不定詞となって、口調の上の習慣というものが拘束しない事になります。

たとえば、『なに？あいつが俺を待っていると？』ならば、warten は弱変化故、Was? Eswartete auf mich?は少し拙[つたな]い。『待っていたのだと？』ならば Er hätte auf mich gewartet?でよろしいが、現在形となると、wartete は拙いから、其の代わりに sollen 又は sollte を用いて：

[A] Was? Er *soll* auf mich warten ?

[B] Was? Er *sollte* auf mich warten ?

となります。それから、若し疑問詞が先頭に来る場合、たとえば『何処で彼奴が俺を待っているんだって？』とか、『誰が俺を待っているって？』となると、こんどは第二式接続法は余り用いられないで、其の代わりに sollen(稀に sollte)及び werden の直接法を用いる習慣があります。『誰が俺を待っているって？』なら：

[A] Wer *soll* auf mich warten ?

[B] Wer *sollte* auf mich warten ?

[C] Wer *wird* auf mich warten ?

勿論これらの助動詞の反問的機能には各々その個性があります。既に此の種の反問が『懷疑的傾向』を有し、ややともすれば否定の口吻を伴うものであることは既に申し上

げてあり、且つは又私の間接話法講義の纏め方(間接話法の各論)の根底をなしている『判断差し控え(中立的態度)より懷疑に至る』という *Leitgedanke* によって、既に前回のおしまい頃からして段々と懷疑的傾向の形態に転じて来たことは、苟[いや]しくも研究の系統化という点にも多少の関心をお持ちになる諸賢には改めて申し上げる必要もありませんが、此の懷疑的反問という態度に於いて、這般の消息がもっとも興味深く窺われるのであります。即ち『誰が俺を待っているんだと?』と云う**反問形態**は、一步を踏み外せば『誰も俺を待ってなんかいるもんか!』という**間投形態**に遷[かえ]って行くのです。疑問と間投とは五十歩百歩です。それから、間投形態から否定形態へも五十歩百歩です。勿論、凡ての反問文がそうだというわけではありません。此处で問題にしているのは、如上の反問文の中、*was, wer, wo* 等の疑問詞を伴うものだけなのです。

其処で、こう云う現象が起こります。即ち----茲から先は本問題たる間接話法とは無関係になりますから、其の点はお断りしておきます----即ち、殊に *werden* の直接法を用いる場合、たとえば *Wer wird auf mich warten ?* は、元来は『誰が俺を待っていると?』なのですが、実際的には『誰が俺を待っているもんか!』即ち意味としては『誰も俺なんか待ってやしないさ』という趣旨の形式になることが多いのです。殊に *viel*, 又は *groß* を入れる事が多い。家で誰かお待ち兼ねでしょうから、はやく帰ってお上げなさい、などと云われたのに対しては：*Wer wird groß auf mich warten ?* 又は *Wer wird viel auf mich warten ?* (直訳：『そう大した何人が私を待つと仰言るのですか?』----意識：『別にそう変わった珍しい者が待っているわけじゃありませんよ』又は『誰が待っているもんですか!』)という。*viel* とか *groß* とかいうのは、『大して』という助詞です。

此の、*werden, sollen, sollte* に関する事は、今までの一般論として、次にもう一度別々に実例でやり直すことに致しましょう。本問題の『反問』よりはむしろ『間投文』という派生問題に深入りし過ぎるかも知れませんが、意味形態の世界は幾何学的な形はしていないで、むしろ『地図』みたいなもの、或いは天然に生えた樹の枝を伝わるようなもので、要するに有機的であると同時に非常に不規則な形をしていますから、袋路地には立て札を立て、通れるところは掲示をし、出来るなら右は何処に至る、左は何々へ何里何丁と、斯うした所を厳密に境界づけておくのが意味形態学の使命であろうと思います。其の点、意味形態の世界は植物、地理、解剖とちつとも違いません。

では実例に移ります。まず *sollen* と *sollte* ですが、*sollen* は後廻しにして先ず *sollte* から片づけると、これは『.....なる由』*sollen* ("由"の *sollen*, 既出第二章第三節第[2]項)をば、第二式接続法にして用いるわけですから、たとえば *Wer sollte auf mich warten ?* と云えば完全に *Wer wartete auf mich ?* の代用となるわけです。だから *sollte* は、筋路としても最もわかり好いでしょう。殊に *sollte* というのは、一般に云うと、『否定的な意局』を表現するための一つの独立した助動詞と云って差し支えありません。これからもちよいちよい出て来ます。既出の実例はすべて *sollte* を用いても表現できるのでから例は不用かも知れませんが、念のために一つだけ示しておきます。

Ich habe ihr alles Gutes beigebracht : wer von ihr übel spricht, der spricht es zugleich von mir. Was ? ich sollte nicht ein Frauenzimmer zu ziehen wissen ? Ich sollte ein Mädchen, das unter meiner Aufsicht groß geworden ist, nicht so weit gebracht haben, dass es einmal eine rechtschaffene wackre Frau würde ? [Lessing : Der junge Gelehrte.]

あの女は、わしが手塩に掛けて育てて来たのだ。あの女の悪口を云うのは、わしの悪口を云うのと同じだと思え。それとも何か、わしに一人の女を叩き上げる位の甲斐性が無いとでも云うのか? 現在自分が監督して育て上げた女だもの、多年の苦心に依って遂に何処へ出しても恥ずかしくない良妻賢母の候補者に仕上げたのはむしろ理の当然じゃないか。

次は *sollen* です。これは第二式接続法にこそしないが、*sollen* は必ず *wollen* の反面と考えられるから、たとえば *Das soll ich gesagt haben ?* (はてな、俺がそんな事を云ったって?) ならば、つまりその文に *willst du ? [.....とお前は主張するのか?]* というのと同じ

です。

殊に疑問詞が先頭に来ると **sollen** を用いるのが自然です。疑問詞の場合は、すぐ後に述べる **werden** の用法に関係がありますから、次の実例をよく御研究下さい。

- [1] W: Du hast selbst vorhin etwas gesagt. ---- R: Wann vorhin ? ---- W: Als wir über Vater sprachen. ---- R: Ach, richtig, ja ---- *was soll ich da gesagt haben ?*

[Hauptmann : *Das Friedensfest. III.*]

W: さっきも兄さんが一寸そんな事を云いましたね。R: さっきって、何時？

W: お父さんの話をしていた時にさ。R: あそうか、そうそう。何だって？
何と云ったって？

- [2] H. ...Kind, hörst du nichts ? ---- R. Nein ! Nichts, ---- und was und was du sagst, begreif ich nicht ! ---- H. Hörst du noch immer nichts ---- R. *Was soll ich hören ?*

[Hauptmann : *Die versunkene Glocke. IV.*]

H. おまえ、あれが聞こえない？ ---- R. いいえ、聞こえないわ。 ---- あなた、変なことばっかり云ってるのね。 ---- H. まだ聞こえない？ ---- R. 何がよう！

- [3] "Hanna", sagte er dann, "wenn du ihn geliebt hast, warum nahmst du denn jenen Lumpen ?" ---- Sie fuhr zusammen. "Lieben ?" stammelt sie. "Wer spricht von lieben ? ... *Wen soll ich lieben ?*" [Sudermann : *Es war. K. 35.*]

『ハンナ』と彼は言葉を継いで云った、『あいつを愛していながら、どうしてこんな馬鹿野郎と結婚してしまったんだ』 ---- 彼女はビクッとした。『愛して？』彼女の言葉は乱れた、『愛の事なんか云ってやしないじゃないの、愛って、私が一たい誰を愛していると仰言るの？』

- [4] BARNABE (kommt zurück, eilig): Sie kommen ! Ritter ! Sie kommen ! (Ottokar wirft schnell Agnes Oberkleid über, und setzt ihren Hut auf.) ---- AGNES: *Wer soll denn kommen ?* [Kleist : *Die Familie Schrockenstein.*]

バルナベ：(引き返してきて、せき込んで)来ました！侍たちが！来ました！
(オットカルは急いでアグネスに上衣を着せ、帽子を被らせる)
----アグネス：誰が来たって！

- [5] "Sie sind mir auf den Nacken," rief er und fingerte mit seinen Händen unruhig in die Luft. "Sie suchen mich !" ---- "Wer soll euch suchen ?" frug Itzig, aber er wußte, wer ihn suchte. [G. Freytag : *Soll und Haben.*]

『足がついたよ』と彼は云って、おろおろしながら、まるで虚空を掴むように手をあげて指を妙な具合に動かした。『おれを探しているんだ！』 ---- 『誰がさ、』とイチツヒは聞き返したが、心ではちゃんと誰だか知っていた。

こうした疑問詞で始まる反問文が、少し馬鹿にしたような口調になって、たとえば『それが何か大変なことなのですか？』（即ち：『それが如何なる大した事を意味するのか？』）とか、『来たって、一たいどんな大した人が来たのですか？』とか云ったようなことになる、こんどは『大変な』とか『大した』に相当する **groß** とか **viel** とかを挿入して、**werden** を用いることになります：Was wird es viel zu bedeuten haben ? Wer wird groß gekommen sein ?など、こうした **werden** の用法は、多くの場合もはや本当の疑問文ではなくなり、別に答えを期待しない単なる間投文となる事が多く、たとえば『誰がそんな手に乗るもんか！』『何が買えるものか！』『何処であんな奴を相手にするもんか！』『何時そんな事が実現するものか？』『そんな事をする奴があるもんか！』等の形態に移ります。

以下の事例では、最初の一つだけが本項目で問題の所謂懷疑的反問であって、第二以下はすべて間投形態です。既にお断りした事を念頭に置いて御研究下さい。

- [1]Aber was er dort tat ? Das wissen Sie nicht, und was bekmmme ich, wenn ich es sage?" ---- Nun was wird er viel getan haben?" antwortete Ida, vergeblich bemüht, ihre Neugierde zu bekämpfen. [Hauff : Der Mann im Monde.]

『けれども問題はあの男が其処で何をしたかです。これは恐らく御存じありますまい。これを申し上げたら、御礼に何を下さいます。』 ---- 『したって、一たい何をしたと仰言るの？』とイーダは好奇心を抑え兼ねながら答えた。

- [2] "Aber du hast recht, sie waren ein bißchen viel weg..." ---- "Und wo waren sie? Darum handelt es sich !" ---- "Na, wo werden sie viel gewesen sein? ---- In der Preußischen Krone oder sonstwo ---- bißchen Sekt getrunken ---- bißchen getempelt ---- bißchen mit den Mädeln geulkt. ---- Hab ich auch so gemacht !" [Sudermann : Es war.]

『そりゃ確かにそうだ、奴等はどうも仲々家にじっとしていないからな.....』 ---- 『何処へ行っていたんだ。問題はつまり茲なんだ』、 ---- 『なあに、行くったって別にそう変わった所へ行くわけじゃありゃしない。プロイシッシェ・クローネか何処か、とにかくそんな所だ。ちょいと飲んで、カルタを取ったり、女たちにからかったりさ.....俺だってそういう事はやったね。』

- [3] BRUENIG: Aber, mein Himmel, sage mir, wo kommst du her? ---- CONRAD: (sein Felleisen ablegend) Wo werde ich herkommen, Mutter? Von Probsthain. Ich bin aus dem Dienste gegangen. [E. Raupach : Der Müller und sein Kind.]

ブリューニヒ：あれまあ、どうしたの？どっちから来たの？ ---- コンラート：(ランドセルを下ろしながら)別にどっちからってえ事もねえ、プローストハインからよ。おらあ、暇ア貰ってけえって来たんだヨウ。

- [4] Werfen Sie das einfältige Buch auf die Seite, wer wird immer lesen !

[Kotzebue : Menschenhass und Reue.]

そんな馬鹿な本はうっちゃっておしまいなさいな。そうしょっちゅう本ばかり読んでいる人があるものですか。

- [5] "Lass doch die Possen," sagte sie und rief den Hund zu sich ; "wer wird mit Hunden sprechen, wenn man in menschlicher Gesellschaft ist !" [Hauff : Lichtenstein.]

『ふざけた真似をするのは止して下さい』と彼女は云って犬を自分の方へ呼び寄せた。『人間がいるのに犬なんぞと話をする人がありますか。』

殊に最後の方の文例に見えている **Wer wird.....!** は最もよく用いられる形式で、『.....する奴があるか』とか、『云々するのは止せ』とかいう意味になります。『そんなにすぐ怒っちまう奴があるか！』 **Wer wird gleich so böse sein !** 『そうすぐ死ぬのなんのと云わなくたって好いじゃないか！』 **Wer wird gleich vom Tode reden !** 『そんなに悄気る奴があるか、しっかりしろ！』 (**Wer wird nur so kleinmütig sein ! Nur Mut !**) 『寝巻で人の前へ出て来る奴があるか！』 (**Wer wird im Schlafrock vor die Gäste treten !**) など。wird という一寸想像か何かのように思う人があるかも知れませんが、そうじゃなくて、非常に強くて、時には人をきめつけるような力を持っているのです。

間接話法と関係があるから序でに述べておきますが、此の形態は、もう少し語調がおだやかになると、**第二式**を用います。最後の例でいうと、たとえば『寝巻で人前へ出る奴があるか！』という程強くはなく、『寝巻では一寸人前には出られないな』と云ったような形態になると、これは **Wer träte im Schlafrock vor die Gäste ?** 或いは **Wer wollte im**

Schlafrock vor die Gäste treten?となります。同じように、『これを聞いて泣かないものがあるか』は *Wer weinte nicht, das mit anzuhören?* 『誰か鴉の雌雄を知らん』は *Wer wüsste Männchen und Weibchen zu unterscheiden beim Krähen gezücht?* 『誰か能く之れを成し得んや』は *Wer brächte das zustande?* 『おまえのためには何でもするぞ』は *Was täte ich nicht für dich?* 『あんな奴が何時人に奢ったことがあるもんか』は *Wann hätte er Leute freigehalten?* これ等はすべて疑問詞を伴うという点だけで少し変わっているのですが、*sollte* を用いてもいい点と、それから *Wer weinte nicht?* でもわかる如く、弱変化をどんどん使う事が出来るという点で応用範囲は大です。

『云々する奴があるか!』には **wollte** もよく用いられます。だから、『寝巻のままで人前に出る奴があるか!』は、次のような四種の形式で云えるわけです。

Wer	<i>träte</i> <i>wird</i> <i>wollte</i> <i>sollte</i>	<i>im Schlafrock vor die Gäste?</i>
		<i>im Schlafrock vor die Gäste treten !</i>

以上間投形態の話は、形式の上で関係が一寸あるから述べたままで、意味形態論はあまり道草を食っては困るから、また本問題に帰ります。

疑問詞を用いる場合の反問文は、詳しく述べ出すとまだ色々と場合がありますが、まず之れ位にしておいて、扨て本項の『反問』一般にかえて、こんどは**省略文による反問法**に触れましょう。最初に用いた文例：『なに? 表は土砂降りだ?』というのは、既に紹介した形式によると *Was? Draußen gösse es in Strömen?* となりますが、もっとせき込むと *Was? Draußen? in Strömen?* などと、全然動詞を用いなくなるのは極く自然です。以下の文例にあつては、すべて、動詞を入れるとすれば第二式接続法を入れるものとお思い下さい。

- [1] KÖNIGIN: (voll Verwunderung) *Wie? darf ich meinen Augen trauen, Marquis? / Sie an mich abgeschickt vom König?* [Schiller : *Don Carlos*. IV. 3.]

女王：(訝しげに)はて、わたしはとんと合点が行きませぬぞえ、あなた様が、わたくしの所へ、あの、陛下の御命で?

- [2] SAPPHO: *Du Rhamnes, hier?* / Und wo ist sie? ---- RHAMNES: Fort !
---- SAPPHO: *Sie fort und du hier?* [Grillparzer : *Sappho*, IV.]

サフォオ：誰かと思えば、そなたはラムネス、してまたどうして此処へ? 彼の女は何処へ参ったのじゃ。---- ラムネス：出て行きました。---- サフォオ：彼の女は出て行って、そして、そなたは出て行きやらぬのか?

- [3] *Ihm Dank?* / Nicht Dank hat er gesät in diesen Tälern. [Schiller : *Wilhelm Tell*, V.]

感謝どころの騒ぎか! 感謝されるような事は、此の俺たちの地方では何一つしてない筈だぞ!

- [4] *Dies ängstigt mich / Noch mehr, als alles andre. Die nicht mit !*
[Hebbel : *Die Nibelungen*.]

外のことはどうにしろ、これだけはどうも気がかりだ。此の二人が一緒に行かなかったと云うのが怪しい。

- [5] CHARIS: Entsetzlich ! solltet ihr getäuscht euch haben?
---- ALKMENE: *Ich mich getäuscht !* [Kleist : *Amphitryon*, II.]

CHARIS: さあ大変! ではお妃さまが人違いでもなされたのでございましょうか? ---- ALKMENE: まさか私が人違いを!

此の種の形式に於いては、よく **und** を持って二つの部分を繋ぐことがあります。詳しく云えば、論理の方のいわゆる **Subjekt** と **Prädikat** とを **und** で結合するのです。即ち『なに、彼奴が盗みをした？』(Was? Er hätte gestohlen? 或いは **Kopula** を省いて Was? Er, gestohlen?) と云う代わりに：

[A] Was ? Er und gestohlen ?

[B] Was ? Er und ein Dieb ?

[C] Was ? Er und stehlen ?

[D] Was ? Er stehlen ?

というのです。論理の方では **Er stiehlt** という文を二つの部分に分けて、**Er** を主語と云い、**stiehlt** を **Prädikat** と申しますが、其の術語を用いて云いますと、つまり此の場合に於いては「主語」と **Prädikat** との『結合その者』が信じられない『趣』であるが故に、此の二つの **Vorstellungen** をはっきりと二つに分解して考えて、その両者を力強い **und** を以て結合することに依って、抑々其の両者を結合して考えろと云う **Zumutung** (無理な要求) に対して反撥せんとするのです。勿論、**D** のように、**und** を入れない事もありますが、入れる方が力強くははっきりします。此の際一つ重要なことは、動詞の定形を用いないで、不定法に還元して **Prädikat** を勢いよく独立させる事です。以下、こうした **und** と不定法の用法を実例を以て示します。既に接続法が一種の不定法であることは、ラテン文法の例を以て解釈して置きましたが(46 頁)、茲にもまた這般の關係があの時とは少し違った意味形態に於いて立証されたわけです。あの時のは全然中立的な『趣・旨・由』で、謂わば判断の差し控えであり、こんどのは懷疑的・否定的意局に立った『趣・旨・由』です。

- [1] FALLERN: Wie? Halten sie ihr Wort nicht? ---- EISENSTECKEN: *Die, und Wort halten ! Komm !* [Immermann : *Andreas Hofer.*]

FALLERN: 何だと？彼奴等は約束を守らないというのか？----

EISENSTECKEN: 彼奴等がどうして約束なんか守るものか！さあ行こう行こう！

- [2] ROBERT: I ! ---- zu mir kommen zum Beispiel solche Kerls, die mir den Kopf wer weiß wie heiß machen, von Idealen schwatzen. Man müsse für die menschlichen Ideale kämpfen, was weiß ich ! ---- *Ich und für die andern kämpfen !* Fabelhafte Zumutung ! [Hauptmann : *Das Friedensfest. III.*]

ROBERT: ヘッ！そう云やあ、例えば時々変な野郎共が押し掛けて来やがって、五月蠅[うるさ]い事ばかりぬかしやがって、理想がどうしたの斯うしたのッて吐[と]しやがるんだ。人類の理想の為に闘わなくちゃならんの何のッてさ。---- おれのような人間が人の為に闘った日にゃあ大笑いだ！ちったあ相手の顔も見ても口を利いたが好い！

- [3] Und Ihr habt keine Ausrede, nicht die kleinste, denn ich hab' Euch nichts verschwiegen und habe für das unglückliche Ding gebeten, dass Ihr Euch erbarmen solltet. Ihr und erbarmen ? *Ein Mann und Gewissen haben !* Nun ist es gekommen, wie ich fürchtete. [Heyse : *Annina.*]

言い遁れは利きませんよ、言い遁れの余地は絶対にありません。だって私の方じやもう何もかも予めお話し申し上げてあるんですからね。そしてせめてあの児に貴郎の不憫が掛かるようにッて、お祈りまでしたんですからね。ところがどうして、ようこそ、ようこそ、不憫どころの話ですか！一たい男の方には良心なんてものは無いらしい。案の条私が心配した通りの事が起こって来たわけですよ。

単に不定法だけではなく、それ以外のものでも **und** で繋がります。

- [1] KLAERCHEN: Verstellt sie sich? ---- EGMONT: Regentin, *und* du fragst?
(Goethe : Egmont.)

KLAERCHEN: では外交的なのね? ----

EGMONT: 摂政姫だもの、外交的はあたりまえさ。

- [2] Das wäre ! Alexis *und* Müdigkeit? [*Hauptmann : Die goldene Harfe*]

冗談云っちゃ不可ん！アレキシスの辞書に疲労という単語は無い。

- [3] Ein so junges Fräulain *und* Mathematik? [独逸トーキー : *Ariane*]

若い女の方が数学をなさるなんて、こいつは珍しいですね。

不定法を後の方に用いて、別に **und** を介せずして単に並べて置くのも宜しい。書く時には間に **Gedankenstrich** を引いてもよし、**Komma** でもよし、また何も無くても結構で、之れは単なる趣味の問題です。

- [1] "Was !" schrie er, "ich besoffen? *ich* die Kleidestriche an der verräucherten Tür nicht bezahlen?" [*Eichendorff : Taugenichts.*]

『なんだと?』と彼は怒鳴った、『おれが酔っぱらってる? 煤で真っ黒になった戸の裏にチョークなんかで人の借金を付けて置きやがってからに、それ位のものが払われねえ兄さんだとでも思ってやがるのかア?』

- [2] O Gott, hört' ich auch recht? *Du* für mich *sprechen*?

[*Kleist : Der Prinz von Homburg.*]

まあ！本当でございますか？あなた、本当に私のために口を利いて下さるのでございますか？

- [3] *Er* Euch *retten und besitzen* ! / *Er* Euch ! *Er* soll es wagen ! *Er* ! Mit mir / Muss er auf Tod und Leben darum kämpfen ! [*Schiller : Maria Stuart.*]

彼奴の如き者があなた様を助けて我が物にする！彼奴の如き者があなた様を！やれるものならやってみるが好い！推参な！斯うなれば決闘あるのみだ！彼奴が斃[たお]れるか、拙者が斃れるかだ！

- [15.] 仮構的延長について。---- 接続法第二式を用いる事多し ----

こんどは、『趣・旨・由』が仮に念頭で設けられたに過ぎない『仮構の事実』である事を仄めかそうとする時には主として第二式接続法を用いるという筋路に移って、まず其の一つを片附けます。すなわちいよいよ約束話法との中間現象になって来ました。出立点として、次のような短い文を取って考えて見ましょう。

Hat man je gehört, *dass* ein Schatten von seinem Herrn gelassen *hätte*?

[*Chamisso : Peter Schlemihl.*]

影法師が其の持ち主から暇を取って一人で何処かへ出掛けてしまったなんて話があるだろうか？

勿論そんな話はありません。左様な**趣**は承服致し兼ねる。其の**旨**、其の**由**は信ぜられない。つまり **dass.....hätte** という副文章は、全然仮構的な『趣・旨・由』を以て内容としている。それが全然仮構的な基礎の上に立っているという事は既に主文章の **Hat man je gehört?** というので充分明瞭ではあるけれども、なお念のために『趣・旨・由』を内容とする間接文其の者の定形を第二式接続法とすることによって、更に露骨に其の仮構

的基礎を匂わせているのです。

実用的見地から云うならば、斯うした第二式接続法は、或いは不要なのかも知れない。けれども、既に日本語でも、『.....なんて話があるだろうか?』と云って、現に『なんて』とか『などと云う』と云ったような言い廻しがよく用いられる。『.....と云う話』と云っても充分わかるのだが、言語表現の実際は必ずしも電報文の理想とは一致しない。必要な事だけを最小限度に云うわけではない。況んや **hat, habe** という代わりに **hätte** と云ったところで大して口が余計草臥[くたび]れるわけではないし、それに接続詞を厄介視する我々とは違って、接続法ぐらいには首をひねる必要のないドイツ人のことであるから、『色彩』や『口吻』の表現のためにはちょっとした贅沢をも敢えてするのです。

だから何なら直接法 **hat** を使っても、或いは普通の間接話法と見て第一式 **habe** を使ってもそう大した間違いではありません。Hat man je gehört, dass ein Schatten von seinem Herrn gelassen **hat** [又は **habe**]?とも言わない事は決してない。通俗調、殊に日常会話の際には **hat** などはかなり普通の現象になっている。けれども **hätte** が最も穏当だと云う事実はもはや動かす可からざる感じで、それが証拠に、**gutes Deutsch** という事をやかましく云う作文の教師は、現にドイツに於いてもそうした **hat** を必ず **hätte** と是正するに相違ありません。

別な例で云えば：『私があなたの事をすっかり忘れていたなどとお思いになってはいけませんよ!』というのは：

Glauben Sie nur nicht, dass ich Ihrer gänzlich vergessen

habe ! [直接法]
habe ! [接続法第一式]
hätte ! [接続法第二式]

のいずれかになります。此の際 **habe** というのは、一人称であるために、直接法なのか接続法の第一式なのか区別がつきませんから、実際としては結局直接法の **habe** か、それとも、既に述べた法則によって第二式の **hätte** かのいずれかになるわけですが、その **hätte** は必ずしも例の形式上の法則のために、即ち直接法と間違わないように第二式を用いたというだけではなく、此の場合に於いては、語感としては、明らかに仮構の事実であるために、**hätte** が適当だという事になって来るのです。それが証拠に、たとえ **ich** が **er** や **sie** に変わってもやはり **hätte** が一番良いでしょうから。

こうした仮構的『趣・旨・由』という意味形態は、実際的には非常に頻繁に出て来る重要な項目ですから、単に只今述べたような **dass.....**に導かれるような普通の場合だけではなく、更に進んで其の他の副文章、殊に最も多い『関係代名詞に導かれる文』に就いて之を徹底的に究明して置く必要があります。間接話法という直ぐに **dass.....**ばかり考える傾向がありますが、必ずしもそうではありません。

[A] 何等かの意味に於いて否定されている先行詞の
仮構的延長としての関係文には第二式接続法を用う。

関係文ではなく、**dass.....**の文である際には、既に **dass** という接続詞によって其の副文章が少なくとも間接文であることを表現していますが、関係文になるといって、それが間接文、即ち『趣・旨・由』なる意味形態のものであることを表示する形式的要素が、少なくとも其の文章内には存在しないことになりますから、そこで定形の役目が非常に重要になって来ます。即ち、たとえば **Ich glaube nicht, dass er dumm wäre** などの際には、そう云っても **wäre** の役目はそう重くはないので、**wäre** が一番好いにはちがいないけれども、なんなら **ist** でも **sei** でも、それは決して構いません。けれどもたとえば『あいつみたいな馬鹿な男だったら或いは.....』と云って後を笑ってしまうような時には、これはどうしても **Ein Mann, der so dumm wäre wie er.....**でなければなりません。そうでないと、『そんな男はまさかあるまいが.....』という否定の意味が表現できないからです。

要するに『云々するような.....は.....』(ない、そんな事を真に受けるような奴はおれ達の仲間にはいない；往来で小便するような奴を見受けたことがない；あいつが口を出して契約がまとまったなどと云う話は聞かない；等々.....)と云う形式の文、即ち『趣・

旨・由』の内容は如何に堂々たるものでも、どうせ結局は主文章に於いて否定されてしまうという構造の場合は、第二式を用いるのが原則です。

dass.....の文も関係文も、意味形態はいずれも間接話法ですから、大抵の場合前者は後方で表現できる。たとえば、前出の *Hat man je gehört, dass ein Schatten von seinem Herrn gelassen hätte?*にしても、*Hat man je von einem Schatten gehört, der von seinem Herrn gelassen hätte?*も云える。主文章に否定を含む文などは勿論です。Man hat nie von einem Schatten gehört, der von seinem Herrn gelassen hätte.

次の簡単な文例によって、その文章形態の共通な形式を把握すると同時に、その『仮構的趣・旨・由』なるが故に、第二式を用いるという関係を理解して下さい。

- [1] 一度も嘘を吐いた事のない人間なんてものはいない：
Es gibt keinen Menschen, der noch nie gelogen hätte.
- [2] 君に関係のある様な事を知らせに來た訳ではない：
Ich bringe keine Neuigkeit, die dich angehe.
- [3] 彼は何一つ威張れるような物が無いために謙遜なのだ：
Er ist bescheiden, weil er gar nichts hat, worauf er stolz sein könnte.
- [4] 内緒事を打ち明けて相談する母というものが彼女にはなかったのだ：
Eine Mutter, die sie in ihre Geheimnisse mit hineinziehen könnte, hatte sie eben nicht.
- [5] 君の事をよく云う様な人には殆ど逢ったことがない：
Einem Menschen, der gut von dir redete, bin ich kaum jemals begegnet.

簡単な文例ではすぐ納得が行くが、少し長くなったり複雑になったりすると注意を要します。殊に『仮構の事実』ということを読脈から読み取り、茲は当然第二式接続法を用いるのだ、という感じを涵養する必要があります。以下、段々と長い文例を引用してみます：

- [1] *Es gibt keine menschliche Tätigkeit, welche mit dem Zufall so beständig und so allgemein in Berührung stände, als der Krieg.* [Clausewitz : *Vom Krieg.*]

人間の行為数多しと雖も、凡そ戦争ほど此の偶然という者と常住不断、且つ広範囲に亘って関係しているものはないのである。

- [2] *Die Zeit ist nicht etwas, was für sich selbst bestände, oder den Dingen als objektive Bestimmung anhinge, mithin übrig bleibe, wenn man von allen subjektiven Bedingungen der Anschauung derselben abstrahiert.*
[Kant : *Kritik der reinen Vernunft.*] (約束法トノ中間現象タルコトヲ看取シ得)

時間というものは、決して、それ自身として独立して存在したり、或いは客観的規定として事物に附着していたり、従って事物の直感を規定する凡ゆる主観的条件を除いてもなお後に残ると云った様な何物かではないのである。

- [3] *Der Gegenstand dieser Vorlesung ist die philosophische Weltgeschichte, das heißt, es sind nicht allgemeine Reflexionen über dieselbe, welche wir aus ihr gezogen hätten und aus ihrem Inhalte als dem Beispiele erläutern wollten, sondern es ist die Weltgeschichte selbst.* [Hegel : *Philosophie der Weltgeschichte.*]

此の講義の題目は哲学的世界史である。というのは即ち、たとえば、世界史其の者の中からして何等かの一般的考察を抽出し來たって、その考察を註釈せんがた

めに世界史の内容からして単に例証を漁り来るにすぎないと云ったような、左様な普遍的な理屈ではなく、むしろ世界史その者を以て題目とするのである。

- [4] Bestrebungen vollends auf Vereinigung aller germanischen Völker (der Dänen, Schweden, Norweger) mit Deutschland, *wie sie* dem russischen Panslavismus entsprochen *hätte*, sind selbst dem exaltiertesten "Pangermanisten" *nicht* in den Sinn gekommen. [Philipp Hildebrand : *Das europäische Schicksal.*]

ゲルマン民族の全部(丁抹[デンマーク]、瑞典[スウェーデン]、ノルウェー)を統一しようなどと云う、即ち例えばロシアに於ける汎スラブ思想にでも該当するような努力に至っては、これは、恐らく最も矯激なる『汎日耳曼[はんゲルマン]主義者』と雖も夢想だにせざりし所である。

- [5] Nur liegt in alledem *nicht*, wie man es allzu einfach gedeutet hat, die bloße sinnliche Verführbarkeit des Künstlers, ein innerhalb des Erkenntnisinteresses illegitimer Eudämonismus, nicht die Beschränkung auf den "schönen Schein", der, gegen alle Wesenheit und Objektivität gleichgültig, seine Bedeutung und Geschlossenheit nur nach den Gesetzen subjektiver Befriedigung *gewönne*, da er doch die naturwissenschaftlich ergreifbaren Elemente und Vorgänge *überspränge* ; vielmehr die tiefe metaphysische Überzeugung, dass alle Wirklichkeit von der Idee getragen ist und dass die Sichtbarkeit der Idee eben Schönheit ist. [G. Simmel : *Goethe*]

これらの事実を以て、単に芸術家に特有なる外界の印象に対する過敏性、或いは認識論の立場から見て許されない唯福主義、或いは実相の如何、客観的妥当性の如何に頓着なく、専ら主観的充足感の律に拠ってのみ其の意義、其の一貫性を獲得する、従って自然科学的に把握し得る底の要素・現象を看過する、所謂『美しきイリュウジョン』の範囲を出でざるものであるなどという頗る簡単な観方をする人もないではないが、決してそうではない。むしろ凡ての現実がアイデアを基底とするものであり、アイデアの可視性が即ち是れ美であると云う、深き形而上的信念と観る可きである。

此の筋路に属する間接文に、既に前に述べた *dass* の場合と同じように、直接法を用いるのもよく見受けられます。たとえば：

Es gibt *keine* moderne Partei, nach *deren* Grundsätzen Kleon, Marius, Themistokles, Catilina und die Gracchen nicht schon "gewürdigt" worden *sind*.

[Spengler : *Untergang des Abendlandes.*]

けれども、此の際はまあ、副文章内に *nicht* があって、意味から云うと、*nicht* を除いて *gewürdigt worden sind* だけを取って考えるという、それは仮構の事実ではなくて、本当に行われた事なのですから、その意味から直接法を用いると云う考え方も出来ます。けれども、たとえば次の例の如きは(Heidegger には到る処此の癖がありますが)あまりよくない例です。

Das Sichhängen erschließt ursprünglich und direkt die Welt als Welt. *Nicht* wird etwa zunächst durch Überlegung von innerweltlich Seiendem abgesehen und nur die Welt gedacht, *von der dann die Angst entsteht*, sondern die Angst erschließt als Modus der Befindlichkeit allererst die Welt als Welt. [Heidegger : *Sein und Zeit*. -- S. 187]

此の文の *Nicht* 以下、*sondern* の前までは、私が申している仮構の事実なるものにぴったりとあてはまる意味形態ですが、それを関係文で受けている *von der dann die Angst entsteht* は、只今までに述べた法則からは当然 *entstände* 又は *entstünde* を用いた方が意味を明瞭ならしめる所以であろうと思います。

では、接続法の第一式はどうかと云うに、これも其の人の癖によって、しきりに用いる人もないではないが、あまり褒めた語感ではありません。少なくとも現在の一般の語感には反します。たとえば *Fichte* などは、よく第一式を用いた人の一人です：

Es ist kein Mensch, der das Böse liebt, weil es böse ist.

[*Fichte : Bestimmung des Menschen.*]

[B] たとえ否定されてはいなくても、何等かの意味に於いて仮構的な先行詞の仮構的延長としての関係文には第二式を用う。

前述の場合には、主文章に大抵 *nicht*, *kein* 等の否定詞がありましたが、『仮構的先行詞の仮構的延長』という意味形態でさえありさえすれば、否定は必ずしもなくても好い場合があります。たとえば：

Der Herzog gleicht mir einem Turm ohne Pforte, wozu die Besatzung Flügel hätte.

[*Goethe : Egmont. IV.*]

公は、出入口なくして、しかも翼の生えた守備兵を有する鉄塔の如く、私には思われる。

wozu は *zu dem* と同じで、或いは *dessen* と云って次の *die* を省いても好いところです。此の文にあっては、『そうした塔は無い』とか『そうした塔は見た事がない』などと、否定されているわけではありません。けれども仮構の事実である点では前述の場合と同じです。

[註] 南欧拉丁系の諸語には『条件法』又は『約束法』（私のいう『約束話法』と混同してはいけません。私のいう『約束話法』は、これは意味形態であって、仏語などの『約束法』は、これは文法形態です。『話法』というのは、たとえば『話法の助動詞』という意味の話法で、『法』というのは、たとえば命令法、不定法、接続法、直接法の法で、すべて形や語尾の問題です）というものがありますが、その約束法の一つの用法が、只今問題にしている場合にぴったり相当します。殊に譬喩的な先行詞を延長舒述する関係文はそうです。たとえば仏語で、船を天使に譬えて：

Larges voiles au vent, ainsi que des louanges,

La proue ardente et fière et les haubans vermeils,

Le haut navire apparaissait, comme un archange

Vibrant d'ailes qui marcherait dans le soleil. [*Verhaeren : Sur la mer.*]

とあります。此の *marcherait* という約束法(条件法)は、つまり邦語の『.....するでもあろう』で、単に仮構を仮構らしく云わんがための贅沢な形式にすぎない、それが証拠に、同じ船の例で思い出した一例をあげるならば：

Quant tu vas balayant l'air de ta jupe large,

Tu fais l'effet d'un beau vaisseau qui prend le large,

Chargé de toile, et va roulant

Suivant un rythme doux, et paresseux, et lent, [*Baudelaire : Le beau navire.*]

と直接法でやってもちっともおかしくない。

[1] *Was er suchte, war das Fremdartige und Bezuglose, welches jedoch rasch zu erreichen wäre, und so nahm er Aufenthalt auf einer seit einigen Jahren berühmten Insel der Adria.* [*Thomas Mann : Der Tod in Venedig.*]

かれが求めた所のものは、とにかく毛色の変ったもの、世間離れのしたもので、しかも迅速に手に入るものというわけだったので、そこで彼は数年以前から喧[やか]ましく云われていたアドリア海中の一つの島に滞在することにした。

- [2] Und wenn ein tückischer Zufall wollte, dass sie mich dabei ertappte und mich wie ein fremdartiges Tier anstarrte, *das aus einer Menagerie entsprengen wäre*, schämte ich mich in den Erdboden hinein und konnte nie wieder froh werden.

[Heyse : *Grenzen der Menschheit.*]

運悪く彼女にそういう所を見つけられ、まるで見世物小屋から逃げ出して来た珍しい獣物でも見るようにじろじろと顔でも見られると、私は全く穴があったら這入りたいような気持ちがして、すっかり悄気[しょげ]込んでしまった。

- [3] Nun denke dir einen Bürger, *der an jene Vorzüge nur einigen Anspruch zu machen gedächte* ; durchaus muss es ihm misslingen, und er müsste nur desto unglücklicher werden, je mehr sein Naturell ihm zu jener Art, zu sein, Fähigkeit und Trieb gegeben hätte. [Goethe : *Wilhelm Meisters Lehrjahre.*]

たとえば、そうした優秀な点を今度は仮に普通の市民が自己の野望の的にしたと考えるのが好い。それは恐らく完全に失敗であるに違いない。むしろそうした方面に適した能力と本能とに生来恵まれていればいるだけ益々彼の悲運は大であるに違いない。

- [4] Man kann sagen, dass der Egoismus die praktische Welt atomisiert ---- gerade wie der Sensualismus die theoretische. Denn ihm erscheint das synthetische Vermögen des Geistes als etwas Subjektives und Sekundäres, *dem in der objektiven Ordnung der Dinge nichts entspreche.* [Georg Simmel : *Goethe.*]

丁度感覺主義が学理の世界を個裂せしめるのと同じ様に、利己主義は実践の世界を個裂せしめると云う事が出来る。というのは、利己主義の立場から見ると、精神の総合作用的な能力というものは、客観世界に於いて何等該当すべき事象を持たない全然主観的な、全然第二義的な物としか思われないからである。

- [5] "Ich fordere Sie auf", so apostrophierte ich den geehrten Vorredner, "mir einen einzigen Fall zu nennen, *in dem ich meine Präsidialgewalt missbraucht und die Verfassung unseres Vereins gebrochen oder umgangen hätte.*"

[Otto Ernst : *Vom Strande des Lebens.*]

『あなたに一寸申し上げたい事がある』と私は私の前に喋舌った男に直接向かって云ってやった：『若し僕に議長として職権を濫用し、会則を蹂躪し、或いはこれを誤魔化したという事実があれば、一つでも好いから只今指摘して頂きましょう。』

- [C] 仮構的延長としての *sodass, dass* の文には接続法第二式を用う。

たとえば『水溜まりは、水が膝にまで達する程左様に深かった』という文ならば、『膝に達する』と云う趣・旨・由は嘘ではなくて本当の事実ですから直接法でやります(下の文例の A)が、『水溜は水が膝にまで達するほど深くはなかった』のならば、『膝に達する』という趣きは嘘ですから、むしろ『膝に達するなどという』趣きになって、これは第二式です：

[A] Die Pfütze war so tief, dass das Wasser bis ans Knie *reichte*.

[B] Die Pfütze war *nicht* so tief, dass das Wasser bis ans Knie *gereicht hätte*.

念のために註釈しますが、過去形 *reichte* に対する第二式は *gereicht hätte* です。現在形 *reicht* に対するものは *reichte* です。

とにかく『仮構的延長』という意味形態がはっきり把捉されていさえすれば何でもないので、二つの実例だけで簡単に通過してしまいましょう。

- [1] England ist gegenwärtig unter den Großmächten am meisten zum Vermittler in dem Rüstungsstreit berufen. Es hat sich weder in dieser noch in andern gleichzeitig

laufenden Auseinandersetzungen so sehr exponiert, dass es der einen Gruppe zu nah und der andern zu fern gekommen wäre. [Zeitung, 1930.]

列強の中で、軍備問題の紛争に調停者として立つに最も適しているのは目下の所英国である。英国は、当面の此の論議に於いても、又それと並行して行われている他の論議に於いても、一つのグループに接近し過ぎた為に他のグループと疎隔してしまったと云った程の深入りはしていないからである。

- [2] Und so ist im Grunde Liebe und Freundschaft ein und dasselbe, nicht etwa durch einen höheren oder geringeren Grad von Leidenschaftlichkeit unterschieden, so dass Freundschaft eine zahmere Liebe wäre, die allenfalls auch eine Teilung des geliebten Gegenstandes *ertrüge*, sondern nur darin liegt der Unterschied, dass Liebe nach einer Hingabe mit Leib und Seele trachtet, Freundschaft nur unter gleichen Geschlechtern besteht. [Heyse : Die schwarze Jakobe.]

だから恋愛と友愛とは根本に於いては同一物であって、決して、たとえば熾烈さの程度の大小によって区別されたり、従って友愛が、なんら愛される対象の二者共有すらも是認する体の比較的温和なる恋愛であるなどという訳ではないのである。否、両者に区別があるとすれば、それはむしろ、恋愛の方は霊肉共に之れを相手に打ち委ねんとするに反し、友愛は同性同志の間にのみ成立するという点である。

此の文章形態で一つ重要なのは、二つの否定によって全称肯定を試みんとする場合の構造です。直ちに意味形態の方から出立して論ずるならば：

『どんな悪い事にも必ず何か良い点がある』

- [A] Es ist *nichts* so böse, dass sich *nicht* etwas Gutes dabei befände. [befindet よりも可]
[B] Es ist *nichts* so böse, wobei sich *nicht* etwas Gutes befände. [befindet よりも可]
[C] Es ist *nichts* so böse, es befindet sich etwas Gutes dabei.

[D] 二個の否定に依る肯定文に於いては、後半は
仮構的延長なるを以て第二式を用いる事多し。

第三番目の[C]は主として諺などに用いられる形で、只今の問題には直接関係が無いから省きますが(詳細は独作文教程 234 頁)、[A]と[B]の後半部が、私の云っている仮構的延長なるものです。『仮構的延長』という意味形態を段々と明瞭に把握して下さい。---[B]の方は、関係代名詞を用いる仮構的延長ですから、本項の[A]に於いて述べたものになります。しかし一番一般的で、そして重要なのは[A]の構造です。

『云々しないこと程左様に云々ではない』などと、論理的構造がちょっと厄介になるからそうした厄介な手を用いない日本語の語感では甚だ解しにくいことがあります。論理的にはっきりと二つの否定を行いながら次の文例を読んで下さい。(ぼんやり考えるとわかりませんよ。)

- [1] Schließlich verteuert das aber alles die Herstellungskosten der Industrie, die in der Stadt ohnehin mit höheren Löhnen rechnen muss als auf dem Lande ; Löhne, die die Arbeiter *nicht* so glücklich machen, dass *nicht* die Mehrzahl bereit wäre, mit niedrigen Löhnen ohne wesentliche Änderung der Lebensführung weitab von der Großstadt zu leben und zu arbeiten. [Zeitung, 1929.]

そうした色々な原因の為に工業方面の生産費が益々高価になって行くのだが、そうでなくてさえ都会では田舎と違って賃金が高いことは覚悟しなければならぬ。しかも其の高い賃金が労働者を満足させるかというに、決してそうではなく、彼等の中の大多数は、むしろ低廉な賃金を貰って、殆ど現在の生活程度のままで遠く大都会を離れて生活し労働しろと云えば喜んでするのである。

- [2] Es war ein erster Oktobertag des Jahres 48, ein blauer Himmel mit einigen leichten, schwebenden Wolken daran, silberweiß durchleuchtet von einer Sonne, deren Kraft freilich *nicht* mehr so groß war, *dass nicht* hinter dem hohen, blanken Gitter im Landschaftszimmer schon der Ofen geknistert hätte.

[Thomas Mann : Die Buddenbrooks.]

1848 年 10 月初旬のある日のことであつた。紺碧の空には二つ三つ輕羅の如き離れ雲が漂い、それを銀白に照らし出す天日の光も既に残暑のそれに比す可くもなく、高く閃[ひら]めく鉄柵の後方見晴らしの間には既に煖炉にパチパチと燃えさかる櫓[ほた]の音さえ聞かれるのであつた。

- [3] Immer aber stoßen beide aneinander, der Gebildete an den Ungebildeten, wie umgekehrt, und zwar nicht bloß im Anrennen zweier Menschen, sondern in ein und demselben Menschen. Denn *kein* Gebildeter ist so gebildet, *dass er nicht* auch an den Dingen Freude fände, mithin ungebildet wäre, und kein Ungebildeter ist ganz ohne Gedanken. [Max Stirner : Der Einzige und sein Eigentum.]

然し乍ら教養人と云い無教養人と云い、此の両者は常に衝突するもので、教養人は無教養人に突きあたり、無教養人は教養人に突きあたる。しかも単に二個の個人が正面衝突するばかりではない、同一人の中に此の衝突が起こるのである。それも其の筈で、教養人如何に教養ありと雖も決して『物』に執して喜ぶこと、換言すれば即ち無教養人たることを妨げず、無教養人如何に無教養なりと雖も、まさか絶対に無『心』な筈はないからである。

- [4] Da ward auch dem sorglosesten der Brüder deutlich, dass eine Gefahr im Anzug. Beifällig Murmeln ging durch die Reihen, sie waren von Pflege der Wissenschaften noch *nicht* so weich gemacht, *dass* ihnen ein Kriegszug *nicht* als löbliche Abwechslung erschienen wäre. [Joseph Victor von Scheffel : Ekkehard.]

これで、もはや、たとい如何にのんきな長袖どもにも身边に危険の迫ったことが明らかになった。一同はどよめき立って口々に賛同の意を表した。朝夕學術技芸にいそしみ暮らす身であつてみれば、文弱の譏[そし]りはさもある事ながら、弓矢を取つて起つと云う事は一寸目先が変わつて之れ亦一興という考えもあつたのだ。

- [5] Noch waren sie beide *nicht* so schrecklich alt, *dass sie nicht* noch hätten hoffen dürfen auf ein nächstes Jahr und vielleicht auch auf ein übernächstes.

[Josef Martin Bauer : Die Brüder]

二人は、年寄りとは云い條[ながら]、そう又無闇に年を取っていると云う程でもなかったから、後まだ一年ぐらい、ひよつとすると二年ぐらいは生きるものと考えたところで一向差し支えはなかったのである。

dass の代わりに関係代名詞を用いることがあります。今はあまり用いませんが、たとえば Schiller などにはよく出て来ます。

Kein Gerücht war so abenteuerlich, *keine* Beschuldigung so abscheulich, *die man nicht* bereitwillig aufgefangen und geltend gemacht hätte.

[Schiller : Geschichte des Dreißigjährigen Krieges.]

よしんば如何に荒唐無稽なる風評にせよ、將に又如何に醜怪極まる讒訴[ざんそ]にせよ、人は直ちに之れを取り挙げて以て公沙汰にするのであつた。

so.....dass.....とすべき筈のところを zu.....と関係代名詞を用いる構造は、あまり一般的ではないが、例はないでもありません：

Alles wohlhabende Leute, die mir alle gewogen sind. Es ist *niemand* zu reich, *dem* man *nicht* einmal wohlwollend einen bedeutenden Dienst erweisen könnte.

[Goethe : *Wilhelm Meisters Wanderjahre.*]

どれもこれも金廻りのよさそうな人たちばかりで、しかも私には好意を抱いてくれる。何不自由のない人達ではあるけれども、時にはまた私の方からも一肌脱いでその人たちの為に尽くす機会も全然ないとは云えない。

此の項目に取り扱った場合も、前の諸形と同様要するに仮構を仮構らしく云わんがためにわざわざ第二式を用いるのであって、決して如何なることがあっても必ず第二式を用いなければならないというのとはわけが違います。とかく文法は早合点される傾向がありますから、此の点は特に念を押しておきます。つまり、直接法を用いてもよいのです。**dass** 以外の文は、**nicht** を含めて考えれば仮構ですが、**nicht** を省いて考えれば事実なのですから、そこで解釈法が二つに岐[わか]れて来るわけです。よくある独断と誤解に **vorbeugen** するために、直接法を用いた例を示しておきます：

- [1] Das Unglück maß damals mit einem gewaltigen Maß, und kein Schrecken und Schmerz, welche den Menschen treffen mochten, waren so groß, dass sie nicht noch durch größlicheres Unheil überboten werden konnten.

[*Wilhelm Raabe : Else von der Tanne.*]

当時に於ける諸々の世に仇なすまがつみの跳梁跋扈には実に其の勢い衝[あた]るべからざるものがあつた。且[あした]に人々の頭上に一下する災厄はたとい酸鼻目を掩わしむるものありとも、夕には既にこれを遙かに凌駕する惨事があつて彼等を待っているのであつた。

- [2] Sein Talent kann niemand sehen, / Der ihn nicht *neidet*, niemand ihn beneiden, / Der ihn nicht *hasst* und bitter ihn verfolgt. [*Goethe : Torquato Tasso.*]

かれの天才は、目にとまれば直ちに羨望の的となり、羨望の的となればまた直ちに憎悪の的、仮借する所なき迫害の的となるのでございます。

[16] 仮構的接続詞と接続法第二式

als dass....., ohne dass....., (an-) statt dass....., als ob, wie wenn, es sei denn, dass.....等、既に其の意味の上からして、其処に盛られる所の内容が、仮に念頭で構成されつつ而も同時に否定的基礎の上に立っていると云つたような論理関係を含んでいる従属的接続詞の一系列があります。私は之れを仮に仮構的接続詞と呼んで置きます。こうした接続詞によって導かれる副文章も亦、前項に於いて述べた『仮構的延長』と同じような関係になり、ただそれが多少形式化し、結晶した形となって来るだけです。故に、主として第二式接続法が用いられます。---- 但し、この辺からは愈々約束話法との中間現象になるのでありまして、なんなら約束話法の意味形態から説明して行つてもよろしいのですが、約束話法の所へ行くと、もっとももっとハッキリした物が沢山ありますから、中間現象はなる可く此の辺でまとめてしまいたいと思うのです。

中間現象という奴は、結局私の分類方針とシステムの立て方から起こつて来るものがありますから、私と違った考え方の人が纏めたならば或いはまた別な所に別な中間現象が起こるのかも知れません。けれども私には今のところ之れより好い分類法は無いと思います。

意味形態の上でも中間現象ですから、形の上でもその徴が現われて来ます。たとえば **es sei denn, dass.....** にしろ、**als ob** にしろ、第一式を使つたり第二式を使つたり、(直接法を使う例外は中間現象だけに限った現象ではなく、抑々接続法全般に亘る例外です) 必ずしもどっちが好いとは云えない様な場合が沢山起こつて来るのです。

[A] zu..... als dass.....と接続法第二式

まず、『云々するに足るに云々である』と云う形式ですが、これは *zu*.....を用いて其の次に *um* と *zu* を伴う不定法を用いるとすれば別に接続法の問題は生じて来ないわけですが、*als dass* を用いると第二式を定形に用いるのが普通です：

- [1] Er war *zu* kostbar, der Ring, *als dass* wir ihn sogleich ohne Verdacht hätten *zu* Gelde machen können. [Lessing : Emilia Galotti.]

その指環というのが、実はあんまり品が良過ぎたものだから、すぐ金にしようとするとどうしても怪しまれる恐れがあったのだ。

- [2] So jung hat er *zu* vieles schon erreicht, / *als dass* genügsam er genießen könnte. [Goethe : Tasso.]

彼は年端も行かぬうちに既に余りに多くの成功を贏[か]ち得たため、悠々として余生を送るといったような気持にはなれないのです。

- [3] Das Schicksal hat sich *zu* oft hündisch gegen mich erwiesen, *als dass* ich irgend etwas von ihm erwartete. [Brachvogel : Narziss.]

運命と云う奴は余りと云えば余りにも此の吾輩を踏みつけにしがったから、今じゃもう運命に何等かの期待を掛けるなんて事はしないんだ。

- [4] O Einsamkeit ! Du meine Heimat Einsamkeit ! *Zu* lange lebte ich wild in wilder Fremde, *als dass* ich nicht mit Tränen *zu* dir heimkehrte? [Nietzsche : Zarathustra.]

おお孤独よ！孤独ちょうわが故里よ！われ余りに長く荒びし他郷に荒び暮らしてありしが故に、涙なくして汝が許に帰り来ることを得ざるなり。

- [5] Sie kannte den Haß der Alten gegen die Weißen *zu* gut, *als dass* sie hätte glauben können, sie werde eine solche Gelegenheit, ihn *zu* sättigen, ungenutzt vorübergehen lassen. [Kleist : Die Verlobung in St. Domingo.]

彼女は此の老婆が如何に白人を恨んでいるかを余りにもよく知っていたので、その恨みを晴らす此の絶好の機会をみすみすみ此の儘遁[の]がすであろうとは思えなかった。

此の種の仮構的な副文章は、その根本に於いて否定的な意局に立っているものでありますから、『否定的意局を表現する助動詞 *sollte* (過去は *hätte sollen*)』を用いればなお表現が徹底します。上の文例でも、既に何等かの話法助動詞が用いてあるものは別ですが、そうでないもの([3], [4])は、たとえば[3]の *als dass ich irgend etwas von ihm erwartete* の代わりに **erwarten sollte** と、また[4]の *als dass ich nicht mit Tränen zu dir heimkehrte* の代わりに **heimkehren sollte** としてもよいのです。一たい此の *sollte* という助動詞の最も重要な機能は『仮構的・否定的意局』の表現にあります。*sollte* は過去になると *hätte sollen* となります。

- [Er] war aber viel *zu* sehr mit sich und seinen Absichten beschäftigt, *als dass* er es hätte übel empfinden sollen. [Goethe : Wahlverwandschaften.]

けれども、かれは自分自身の気持ちと自分が今考えている事とで手一杯だったので、それ位の事は別に不愉快とも何とも思わなかった。

上例は、*hätte*..... *sollen* を除いて、*als dass er es übel empfinden hätte* と云うことも出来るのです。

第二式接続法を必ず用いるかという問題に関しては、此の形態に関しても矢張り今ま

でのとほぼ同じような事が云える、即ち、直接法を用いることも勿論あるのです。

Der Schleier war *zu* dicht, *als dass* ich ihre Züge erkennen konnte.

[Hauff : Aus den Menschen des Satan.]

面紗[めんしゃ]があまり濃厚であったために、彼女の顔容を識別することは出来なかった。

ちょっと注意のために附言しておきますが、此の *konnte* は *könnte* の誤植か何か、とにかく校本の間違ひではないかと思う人がないとも限らない。そういう疑問を起こす人があったら、その人は初歩的な問題がわかっていないと云える。即ち此の文の主文章は *Der Schleier war.....* と、『過去形』で書いてあるから、若し接続法でやるのだったら *könnte* ではないけない、*hätte.....können* [過去] でなければならぬ筈です。いくらひどい印刷職工でも *hätte erkennen können* を *erkennen konnte* と組み損なうわけはないでしょう。これを以て見ても、時称の問題は非常に重要です。だから私は、従来の文法のように、*sei* を「現在形」と呼び *wäre* を過去形と呼ぶのには絶対に反対なのです。それは語源的名称であって文法的名称ではない。*wäre* が過去形ならば、どうして *ich weiß* を *wissen* の過去だと云わないのでしょうか？ *ich kann* 等も同様です。そんな馬鹿な話はない。*wäre* が *war* と関係があることを名称でまで暗示しないとわからない人達ばかりそろっているのでしょうか？ 私はそろっていないと思う。そろっているのは寧ろ、*wäre* が *war* と関係があるのだと云う事をどうしても名称で暗示しないと気がすまないと云う馬鹿な人達ばかりが揃っているのだらうと思う。どうかなるべく揃わない様に此の際お願い致しておきます。

[B] *zu..... als dass.....* の変態形に就いて

あんまり詳しくなり過ぎるのもどうかと思うが、ついでに此の形式の変態形とも称す可きものに触れて置きます。というのは、*zu* の代わりに、なんなら *genug* を用いたり、或いは副詞、又は形容詞の比較級を用いたり、或いは *als dass* の方の *dass* を省いてしまったりする事もあるという点です。

dass を省くということは、これは本当はよくないので、*dass* を省いた文にしてよいのは、今問題にしているのとは全然違った意味形態の場合です。たとえば『こんなに沢山書きたくはないのだけれど書かなければならない』とか『書きたくない事まで書かされる』ということをして *Ich muss mehr schreiben, als dass es mir lieb wäre* という代わりに、もっと簡単に *Ich muss mehr schreiben, als mir lieb ist* と云いますが、これは今茲で問題にしている *als dass* ではありません。茲で問題にしている意味形態は、『云々するにしては余りに斯々だ』即ち『余りに斯々すぎて云々することが出来ない』と云う関係のものなので、其の点を混同しないようにして頂きたい。

さて、此の『余りに云々すぎて云々することが出来ない』という意味形態は、*zu* (と副詞、形容詞) を用いる代わりに当該副詞乃至形容詞の比較級を用いることもできます。実を云うと、*als* なる語の意味から考えるならば此の方が却って正しいのかも知れませんが、*zu* の方が普通になった今日では、むしろどちらかと云うと変態現象として取り扱われるわけです。

Wer bist du? Woher? Dein Wesen ist *feiner und zarter, als dass* Dienen deine Bestimmung sein könnte. [Tieck : Der Aufruhr in den Cevennen.]

おまえは誰か？ どこから来たのか？ おまえの様子には何処となく上品な弱々しいところがあるから、人に使われる身分のものとは受け取れないぞ。

[C] *ohne dass.....* と接続法第二式

この形に関しても前項の *zu..... als dass* の場合と同じことが云えます。即ち *ohne* と *zu* + 不定法ならば定形がないから接続法の問題は生じて来ませんが、*ohne dass.....* となると、定形を直接法にするか、接続詞にするかという問題が生じます。但し前項の *zu.....*

dass の場合とはちがって、どちらを用いても殆ど同じだと云えましょう。たとえば：

Es ging nun freilich dieser denkwürdige Tag vorüber, *ohne dass* etwas weiteres erfolgte.
[Keller : Hadlaub]

となっていますが、これは *ohne dass* etwas weiteres **erfolgt wäre** と変えても何の相違もありません。同じ Keller が、これと同じ過去形の文脈に於いて：

Hierauf durchritt er verschiedene Gegenden, bis es Mittag wurde, *ohne dass* ihm eine weitere günstige Gelegenheit aufgestoßen wäre. [Keller : Sinngedicht]

とやっていますが、これも直接法で行って *ohne dass* ihm eine weitere günstige Gelegenheit aufstieß とやっても構わないわけです。如何に随意的なものであるかを証明する為に、わざと同一作家の、しかも同じような気持を与える文脈を引用したわけです。

第二式接続法の例をあげますが、すべて直接法で云い換えても構わないものと思って下さい：

- [1] Sie schien aufmerksam auf das Gespräch, *ohne dass* sie daran Teil genommen hätte.
[Goethe : Die Wahlverwandschaften.]

彼女は、別に口を出しはしなかったが、然し一生懸命に話を聞いていた。

- [2] Das Tor öffnete sich, *ohne dass* Menschengestalt sichtbar geworden wäre.
[Goethe : Wilhelm Meisters Wanderjahre.]

門は開いたが、人間らしい物の姿は一向見えなかった。

- [3] Genug, es ging mit dem Mann rückwärts, *ohne dass* die Nachsicht des Onkels sein Schicksal hätte aufhalten können. [ibidem.]

要するにこの男の運は次第に傾いて行く一方で、伯父がどんなに手心を加えてももはや頹勢を挽回[ばんかい]することはできなかった。

- [4] Die reale Welt, in der wir alle leben, verläuft in der Zeit, und diese erstreckt sich sowohl in die Vergangenheit als auch in die Zukunft, *ohne dass* ihr Ende abzusehen wäre. [Rickert : Die Philosophie des Lebens.]

我々の生きている現実の世界は時間という形を取って経過する、そして此の時間というものは、過去に向かって延びていると同時に未来に向かって延びて居り、しかも其の両者の尽くる所の涯[はて]は見極めることが出来ないのである。

- [5] Steeg setzt zur Stunde seine Bemühungen um die Bildung der neuen Regierung noch fort, *ohne dass* sich über ihre Erfolgsaussichten bereits etwas Endgültiges sagen ließe.
[Zeitung.]

ステーク(仏国政治家)氏は目下なお組閣の努力を続行中であるが、成立の見込みに関しては目下未だ確たる事は言い難き状態にある。

[D] statt dass....., anstatt dass.....と接続法第二式

ohne dass と、*statt dass* とは、関係は全く同じです。ただ此の方は、意味の関係が『AをしないでBをする』というのですから、仮構的な意味がAの方になることもあればBの方になることもあります。即ち『元来すべき筈の事をしないでBをしているのはけしからん』という際はAは仮構的ではなくて、事実になります。Aというのは*statt dass*.....の文のことになるわけですが、後の場合に於いては、仮構ではありませんから勿論第二式は用いてはいけません、たとえば：

Ei Vater, warum steigen wir denn nicht / Geschwind hinab in dieses schöne Land, / *Statt dass* wir uns hier ängstigen und plagen? [Schiller : Wilhelm Tell.]

ではお父さん、わたし達は どうしてはやく其の美しい国の方へ降りて行かないの？
こんなところでびくびく心配しながら苦しい思いをしていないでさ？

ところが、前者の方、即ち *statt dass.....* の文の方が仮構の意になる場合には、第二式接続法にする方が意味がはっきりするということになります。

Die einen wollten so und die andern anders, und *statt dass* sie bei einem Glase Wein die Sache vernünftig *besprochen hätten*, schlugen sie sich die Schädel ein.

[Hauff: *Phantasien in Bremer Ratskeller.*]

ある者はこうしろという、他の者はああしろと云う、一そ酒でも一杯呑んで話し合えばよくわかる筈の所を、お互いに頭の鉢を叩き割らないと承知しない。

[E] als ob.....と第二式接続法

これは重要な項目です。als ob ばかりでない、als wenn もあれば wie wenn もあり、wie als ob, gleich wie wenn などという長ったらしい形もあれば als と単に接続詞を用いるという形式もあることは既に御存じの如くです。余談に互[わた]りますが、英語では as if, 仏語では comme si, 伊語では come se と、それぞれ支配的な形があつて此の意味形態(『恰も.....』)を我が物顔に独占しているに反し、(英語にはまあ as though などもありますけれど)独逸語に於いては最も普通な als ob 以外に斯くも多くの Nebenbuhler が跋扈しているというのは、ドイツ語なるものがそれらの国語に比して遙かに未完成にして遙かに流動的であり、謂わば死火山に対する活火山、月界に対する地球、固形体に対する半流動体であるということを証する事実です。然し乍ら、まさか全然群雄割拠の戦国時代でもないということは、als wenn や Wie wenn 等に比して、やはり此の als ob が代表的な形として認められつつあるという事実によっても明らかです。たとえば Vaihinger は彼の哲学を命名するに当たって、Die Philosophie des Als-ob と云っている。まさか des Wie wenn とは云わなかった。標準的な語感はこの場合に最もよく現われます。

それから、als ob や wie wenn を用いた際に定形を第二式接続法にするか、第一式にするか或いは直接法にするか、という問題ですが、此処にも英仏伊等の諸語に対するドイツ語の半流動的状态がよく現われています。英語や(as if he were.....) 仏語や(comme s'il était.....) 伊語(come se fosse.....) では、それぞれ定形の形がドイツ語の接続法第二式に相当する形、或いは半過去の形と一定していますが、ドイツ語では必ずしも一定していない。たとえば、『まるで蜂の巣をつついたような騒ぎだ』と云おうとすれば、Es ist, als ob man ein Wespennest aufgestört hätte でも habe でも hat でも大した相違はない。hätte でなければいかんと云うのは、文法学者ぐらいのものです。もっとも文法学者というのに二種類乃至三種類あつて、或る人は文法は『要求の提唱』であり『方向の確立』であり、『言語の警察』であるという。或る人は文法は『事実の確認』であり『現象の登録』であるという。また或る人は其の両方であるという。(私は日本人だから主として第二者を目的とし、時に畏る畏る第一者を受け売りしたり発明したりすることもある) 要するに此の三つは、三つの独立した部門であつて、なにも腕まくりして喧嘩する必要はないと思います。

閑話休題。まあ文法を事実の登録とするならば、als ob の次には三種の定形が可能です。然し、事実の登録は同時に傾向の登録でもあるから、その意味からいうと、als ob の次には、als ob を als ob らしく響かせるために、即ち私の提唱する『仮構形態』(間接話法から約束話法の生ずる中間形態)なるものを voll auslegen(完全に解釈)しようという傾向が動くのが当然であつて、そのためには接続法第二式が最も之れに適するという事実はドイツ人凡ての語感が之れを認めている。まだ急には駄目かも知れないが、いづれ英仏伊と同じようになってしまふでしょう。英の were, 仏の était(半過去)、伊の fosse も亦国際的重圧によって自己と同類の wäre を王座に登らせないでは引き込まないでしょう。

ただ一つだけ区別のために云って置きますが、als だけを用いてすぐ其の次に wäre や

sei を持って来る構造にあっては、直接法はあまり用いられません。als bin ich や als hat er 等は非常に稀で、またよくありません。

それからもう一つ例外があります。それは、此の項の後の方に出て来ますが、『まさか.....の訳でもあるまいに！』と云う意味に用いる als ob は必ず第二式接続法を伴います。之れは意味が完全に懐疑的ですから当然です。

als ob, als wenn 等の用法その他は、これはむしろ初歩乃至中級文法の縄張りですから、ここで改めて例を引いたり説明を加えたりすることは止しておきますが、ただ一つ、極く初歩の事には属するけれども、たとえば教壇に立って説明したりする際に必要な注意を述べて、同時に『何故第一式や直接法を用いることになるか』の問題、並びに als の次に定形倒置という現象を惹き起こすことの原因を明らかにしておくことにします。

というのは斯ういう観察です。日本語の表現では、或いは『云々するかのごとく』見える、と云ったり、『云々するかに』思われる、などと云いますが、前者の『かのごとく』という日本語を分解すれば逐語的に als と ob とにあてはまると云う、極く何でもない現象に注意すると、初学者を教える時などには非常に便利です。即ち、als ob er tot wäre ならば、逐語的に解釈すると、[er かれが tot 死んで wäre いる ob か (?) als の如く]という事になる。御存じの通り ob は疑問副文章に用いる ob であって、疑問詞を先頭に立てた副文章には、或いは直接法を用いたり、或いは間接話法としての接続法第一式第二式を用いたりするということは、既に第二章の項目[4](38 頁)に於いて論じた問題ですが、此の als ob.....? にも元通りやはり間接疑問文として考える筋路が多少残っているものですから、第二式以外に第一式をも直接法をも用いるというのは、極く自然なのです。

もっとも、語学を教えるときに、そう細かく分析して教えるのが果たして好い事かどうかと云う事は、実は甚だ疑問の余地のある問題で、教室の実際としては私はむしろ其の反対の意見を持する者ではありますが、ちょっとそんな事に注意を向けて、納得したような気持ちを起こさせた方が好い場合には、適宜にこうした Hilfsmittel も必要ではないかと思えます。素人だましという奴も時には一つの手たるを失いません。

それから、als wenn や wie wenn の wenn の方はどうかと云うに、此の方に対しては二つの筋路が可能です。wenn は英語の if (即ち ob と同語源でもあり同用法でもあるもの)であり、仏の si です。つまり ob と同用法のものだと云えばそれで解決されてしまう。けれどもまた第二の筋路がある。それは wenn は wann で、『云々する時』という『時』だという考え方です。すれば als wenn er tot ist なんてのはよくわかる。即ち『彼が若し死ぬとしたら、その死んだ時のごとく』が als wenn, wie wenn だと考えれば、それでも好いわけです。殊に、直接法を用いるのは wenn の場合に非常に多いことも事実です。

それから最後に、als ob er tot wäre (sei) の代わりに als sei er tot, als wäre er tot と云うことが多い、その理屈の説明ですが、これももう只今申し上げた事実から当然の帰結として考えられる。それは wenn の文、ob の文は、往々にして、ではない屢々、『定形倒置』を以て表現されるというのは誰も知る現象であり、その現象の生ずる源も結局は、「疑問文」にあるという事は明瞭な事実ですから、此の筋路と関係させて考えれば何の苦もなく理解されてしまいます。ですから als sei er tot は、Ist er tot? (かれは死んでいるか) と関係があるので、sei となったのはまたそれから後の意味形態上の要求から来たものです。要するに、『彼は死んでいるか?』は『もしかれが死んでいるならば』に通じ、『もしかれが死んでいるならば』は、当然『其の時はおそらく斯ういう風に見えるだろう』と考えられる。そこで als sei er tot は、逐語的には：『彼は死んでいるか?の如く』ということになるわけです。

第二式接続法を用いた例：

- [1] Ich verstand ihn, als ob er für mich geschrieben hätte : um mich verständlich, aber unbescheiden und töricht auszudrücken. [Nietzsche : Schopenhauer als Erzieher.]

私には、まるで彼がわざわざ私のために書いて呉れたかの様に彼の気持ちが

わかった。よくわかるように、然し不遜な馬鹿な云い方をするとすればだ。

- [2] Die kleinsten Umstände dieses Zufalls stehen mir noch vor Augen, *als hätte* er sich gestern ereignet. [Goethe : *Wilhelm Meisters Lehrjahre.*]

此の偶発事件の最も零細な事情に至るまで、まるでそれが昨日起こったことであるかのように私ははっきりと眼前に思い浮かべることができる。

- [3] Albert hatte die Empfindung, *als wenn* die Welt um ihn plötzlich totenstille würde. [Schnitzler : *Ein Abschied.*]

アルベルトは、まるで身辺の世界が忽ち闕寂[げきせき]と静まりかえったかの如き感じがした。

- [4] Das erste deutliche Gefühl, dessen er inne wurde, war dasjenige einer ungeheuren Schande, *gleich wie wenn* er ein wirklicher Mann von Rang und Ansehen gewesen und nun infam geworden wäre durch Hereinbrechen irgendeines verhängnisvollen Unglücks. [Keller : *Kleider machen Leute.*]

彼が覚えた最初の判然たる感じは、とにかく穴でもあれば這入ってしまいたい様な気持で、まるで自分が今まで本当に地位名声のある人間であったのに、何か不慮の災厄が突発したために忽ち面目玉がまるつぶれになったと云ったような感じであった。

- [5] Musik gibt mir jetzt Sensationen, wie eigentlich noch niemals. Sie macht mich von mir los, sie ernüchtert mich von mir, *wie als ob* ich mich ganz von ferne herüberblickte, überfühlte. [Nietzsche : *Brief an Peter Gast. 1884.*]

私の只今の心境では、音楽というものが、今までには未だ曾て覚えなかったほどの扇情的効果を惹起します。まるで私自身を遠くの方から遙かに望み、概観的に感蝕するかの如く、私を私自身から解放し、私自身に対する感情をけろりと冷ましてしまいます。

第一式接続法を用いた例：

- [1] Einmal kam es ihm vor, *als sei* es im Hof nicht geheuer. [Mörike : *Der Bauer und sein Sohn.*]

一度は、農園の中が何となく薄気味悪く思えたこともあった。

- [2] Mit denen zu verkehren, die mit ihm auf der Schulbank gesessen hatten, fiel ihm nicht ein ; auch schien es, *als ob* ihnen an dem Träumer nichts gelegen sei. [Storm : *Schimmelreiter.*]

学校時代の同級生と交際しようなどと云うことは思いも寄らなかった。それに彼等は彼のような薄ぼんやりは全然相手にしていなかったから。

- [3] Alles stand ihm klar vor der Seele ; es war, *als sei* sein Leiden durch den Schlaf gar nicht unterbrochen worden. [Thomas Mann : *Der kleine Herr Friedemann.*]

凡ての事情が克明に思い出された。謂わば彼の苦悩が此の睡眠時間によって何等中断されなかったかのように。

- [4] Es war ihr, *als sei* sie auf dem Hochgerichte, wo man sie unschuldig hinrichten wollen, begnadigt worden. [Immermann : *Münchhausen.*]

彼女は、まるで罪なくして処刑を受けようとしていた刑場で大赦の申し渡しを受けたような気持がした。

- [5] (両方をごっちゃに用いた例：)

Es war ihm mehrmals, *als trete* seine selige Mutter zu ihm und *bäte* ihn händeringend zu Hilfe ; dann war es ihm, *als sei* er gestorben und würde begraben, *gehe* aber selbst zu Fuß als Toter mit zu Grabe, und schön Annerl *gehe* ihm zur Seite.

[Brentano : *Geschichte vom braven Kasperl und dem schönen Annerl.*]

またしてもまたしても、死んだ母が自分の枕頭に姿を現わして、身悶えしながら助けを乞うような気持がした。そうすると、なんだか自分自身もあの世に居るように思われて、既に葬式もすみ、自分で歩いて墓へ行き、美しいアンネルも自分と並んで一緒に歩いているような気がするのであった。

直接法を用いた例：

- [1] Lucidorn war's auf einmal zu Mute, *als wenn* er in tiefe Nebel *hineinfuhr*.

[Goethe : *Wilhelm Meisters Wanderjahre.*]

ルチドールは忽ち濃霧の中へ飛び込んで行くような気持がした、

- [2] "Die gute Alte !" dachte er, "es ist, *als will* sie mich bitten : bleib bei uns !" [Sudermann]

『かわいそうに！』と彼は考えた。『まるで、どうか私の側にいてくれと言って哀訴しているようだなあ。』

- [3] Pünktchen sieht jetzt manchmal aus, *als ob* sie nachts überhaupt nicht mehr *schläft*.

[Erich Kästner : *Pünktchen und Anton.*]

ピュンクトヒェンは此の頃時々全然眠らないで夜明かししたような様子に見えることがある。

- [4] "Siehst du ? da geht ein kleiner Strahl durch die Linde, gerade auf meinen Kopf los, *als wenn* er mich schießen *will*." [Frenssen : *Jörn Uhl.*]

『ほら、菩提樹の葉陰から陽が洩れて来るでしょう？丁度わたしの頭の方へ、まるでわたしを狙って射つように？』

- [5] "Ich weiß nicht, was das ist, dass ich nicht ordentlich lachen kann. Es ist, *als wenn* mein Gesicht gefroren *ist*." [Frenssen : *Jörn Uhl.*]

『何だか知らんが、おれはどうもまともに笑顔を作ることがどうしても出来ないんだ。まるで顔面が凍結したようだね。』

上例に、多少反映させて置いた通り、直接法を用いるのは、日常会話によく現われる現象です。

それから、次に注意すべき重要な現象は、『まさか云々したわけでもあるまいに！』という意味で用いる場合の *als ob*, *als wenn* です。これは普通の *als ob* とは違って、趣旨としては明らかに否定で、それを口にする態度は日本語の『まさか』その儘で、これこそ私が只今述べている『仮構的な趣・旨・由』という意味形態の最も純粋なものでありますから、此の時だけは必ず第二式を用いなければいけません。文法形態は意味形態の方から説明しなければ駄目だという私の持論を証明する典型的な一実例です。単に一般的に *als ob* の次の定形はどうなるか、と云っても、それは却々[なかなか]厄介な問題ですが、意味形態がはっきりした本質を有する場合になると問題は斯くの如く簡単なのです。

- [1] Da kommen sie und fragen, welche Idee ich in meinem Faust zu verkörpern gesucht?
---- *Als ob* ich das selber *wüsste* und aussprechen *könnte* !

[Eckermann : *Gespräche mit Goethe.*]

よく、私が私のファオストに於いてどう云う思想を具体化しようとしたのか、などと云って問う人があるが、神様じゃあるまいし、そんな事が私自身にわかるわけのものでもなし、また言えるわけのものでもなかろうじゃないか。

- [2] *Als ob* die Freiheit nicht ebensogut eine Religion wäre als jede andere ! Da es die unsrige ist, so könnten wir, mit demselben Maße messend, ihre Verächter für frivol und irreligiös erklären. [Heine : *Englische Fragmente.*]

自由思想も亦世の多くの宗教と同様一つの宗教なのだ、然るに此の宗教は我々の方の宗教であるから、売り言葉に対する買い言葉という意味で、こいつを信じない奴共をば「罰あたり」或いは「信心が足らぬ」と呼ぶに何の差し支えがあろう。

- [3] Das Rechtsgefühl ! ---- *Als ob* ein anderes noch / In einer andern Brust als dieses gäbe ! [Heinrich von Kleist : *Die Familie Schroffenstein.*]

正義感とは何事だ！まさか人によって正義感が違うわけのものじゃあるまいし。

- [4] PHAON : Der Dichtung Ruhm nicht mag ich ihr bestreiten.----
PHAMNES : Du magst es nicht? Ei doch ! *Als ob* du's könntest !

[Grillparzer : *Sappho.*]

PHAON : 彼女の文名に対しては私は敢えて争わんとするものではないがね。----
PHAMNES : 争わんとするものではないか？えらい事を云ったな。真逆争おうと思って争えるわけのものでもあるまいし。

- [5] Und Ihro Gnaden sollten glauben, dass ich aus Misstrauen, aus Sorge für meine Bezahlung ---- ? *Als wenn* ich nicht wüsste, dass mich Ihro Gnaden bezahlen können, sobald Sie nur wollen [Lessing : *Minna von Barnhelm.*]

まさか誤解なすったのではございますまいね？まさか私が御勘定が頂けなくなるなどと云う取り越し苦労をして.....？なあに、まさか旦那が宿賃を踏み倒したりなどなさる方だとは思いませんですよ。

『まさか云々というわけではないが』、『決して云々などというわけではなく.....』の意。断り書き、その他自己の立場を擁護し予め誤解に対して備えて置こうとする[これを prophylaktisch (予防的) と云いますが]場合に用いられる Nicht, dass....., Nicht, als ob, Weit entfernt, dass.....等も勿論仮構中の最も仮構なるもの、故に第二式を用います。ここでは Nicht, als obの例を挙げておきます。

- [1] Nicht zwar, *als ob* ich den geringsten Zweifel / In Euren Stammbaum setzte.
Gott behüte ! [Lessing : *Nathan der Weise.*]

と申したところで、決してそなたの血筋を疑うのどうのと申すわけではない。
滅相もない。

- [2] Alle Physik ist Behandlung des Bewegungsproblems, in dem das Problem des Lebens selbst liegt, *nicht als ob* eines Tages lösbar wäre, sondern obwohl und weil es unlösbar ist. [Oswald Spengler : *Untergang des Abendlandes.*]

物理というのは要するに運動の問題の取り扱いであって、運動の問題には結局生
の問題が潜んでいる。但し決してそれが何時かは解決される可能性があるなどと
云う意味に於いてではなく、むしろ解決不可能なるに拘わらず、或いは解決不可
能なるが故にと云った方が好いかも知れない。

- [3] Manche scheinen geneigt, auch diese Frage zu bejahen. *Nicht als läge* dem, was sie meinen, eine sehr klare Vorstellung zugrunde.

[Theodor Lipps : *Die ethischen Grundfragen.*]

此の問いをも肯定せんとする人が少なくはない。併しそれらの人々の考える事は別にそうはっきりした観念に立脚しているというわけでもないのである。

- [4] Mit allmählicher Zunahme der Sozialdemokratie hatte diese immer mehr den Charakter einer brutalen Revolutionspartei verloren. *Nicht, als ob* sie gedanklich je einem andern Ziel als dem der Revolution gehuldigt, oder ihre Führer je andere Absichten gehabt hätten ; durchaus nicht. Alles, was endlich übrig blieb, war nur noch die Absicht und ein zur Ausführung derselben nicht mehr passender Körper.

[Adolf Hitler : *Mein Kampf. I.*]

社会民主党は党が大きくなるにつれて段々と急進的革命党としての性格を失った。それは決して思想の点に於いて革命以外の目的を念頭に置き初めたとか、其の指導幹部たちが別途の意図を抱くに至ったとか云うわけではない。決してそんなわけではなかったのである。けれども、いずれにしろ残骸として残ったものは単なる意図と、此の意図を遂行するには最早全然適しない人的要素であった。

- [5] Das gewaltige Werkzeug, durch welches er Florenz umgestaltet und beherrscht (1495-98), ist seine Rede, wovon die erhaltenen Predigten offenbar nur einen beschränkten Begriff geben. *Nicht als ob* die äußeren Mittel seines Auftretens sehr groß gewesen wären, denn Stimme, Aussprache, rhetorische Redaktion und diegleichen bildeten vielmehr eher die schwache Seite, und wer einen Stil- und Kunstprediger verlangte, ging zu seinem Rivalen Fra Mariano aus Genazzano---- aber in Savonarolas Rede lag jene hohe persönliche Gewalt, welche wohl von da bis auf Luther nicht wieder vorgekommen ist. [Jacob Burckhardt : *Die Kultur der Renaissance in Italien.*]

かれをしてフロレンスを改革し制圧(1495-98)せしめたところの強力なる手段はかれの弁舌であって、説教の一部は今日までも伝わっているが、それらによって真相を窺うことは到底不可能である。そうかと云って、別に公衆の前に立った場合の彼の外的利器がそう大したものであったものとも思われない。如何となれば音声、発音、文句の言い廻し等はむしろ彼の不得意とする所で、磨きの掛かった名説法が聞きたければ寧ろ彼の競争相手たるジェナツァーノのフラ・マリアーノの説法を聞いた方がよかったからである。ところがサヴォナローラの説教には、恐らく其の後ルッテルに至るまで絶対に後例を断つに至ったほどの或種の高度の個人的威力が具わっていたのである。

これらの *als ob*, *als* は、すべて *dass* で置き換える事が出来ます。次項をごらん下さい。

[F] *Nicht, dass.....*と第二式接続法

意味形態は、前項の終わりに取り扱ったものと同一故、説明は省きます。*Nicht, dass.....*と云えば、すぐ考える成句が例の *Nicht, dass ich wüsste !* (さあ、どうですか、よくは存じませんが)です。これは、本来の用法は、『別に知っているというわけではありませんが.....』という時ですが、度々用いられる結果、弁解、逃げ口上、の意を離れて、単に *Ich weiß nicht ! Weiß nicht ! Ich wüsste nicht !* (さあどうですか)の意になってしまったのです。しかしまあ、当惑の意を存しているという意味で、*ich weiß nicht* と全然同じだとは云えない所もあります。

- [1] Aber *nicht etwa, dass* die Leute sich die Mühe geben *müssten*, die Hasen zu jagen, die Vögel oder Fische zu fangen, und die Früchte zu pflücken, die sie essen wollen ; oder *dass* sie die Gemächlichkeiten, deren sie genießen, erst mit vielem Ungemach erkaufen

müssten. Nein ! Alles macht sich da von selbst. [Wieland : Die Abderiten.]

ところが、まず兎を狩り、鳥魚を捕らえ、木の実を摘まないと云うと自分の口には這入らないか、まず以て色んな厄介な手続きを経ないというとそれらの便宜が享受できないかというに、決してそういうわけではなく、すべてが自働的に行われてしまうのです。

- [2] Diese Flankenwirkungen und die dahin gehörigen Flankenstellungen gehören auch zu den Paraden der Theorie, die man im Kriege nur selten gewahr wird. *Nicht dass* das Mittel selbst unwirksam oder illusorisch *wäre*, sondern weil beide Teile sich gewöhnlich gegen den Wirkungen desselben zu verwehren suchen.

[Clausewitz : Vom Krieg.]

こうした側面制圧並びにそれに必要なる側面配備なるものも、之れ亦机上にのみ華やかなる空論であつて、実戦となるとそう度々見受けられる手ではない。手そのものは決して無効なのでもなければ、また空論と云うわけでも無いのであるが、雙方[そうほう]とも此の手の効果に対しては充分の用意を以て臨むのが普通だからである。

- [3] Ich weiß nicht, was ich eigentlich zu der Erzählung des Marmontel sagen soll ; *nicht, dass* sie nicht mit vielem Witze angelegt, mit allen den feinen Kenntnissen der großen Welt, ihrer Eitelkeit und ihres Lächerlichen ausgeführt und mit der Eleganz und Anmut geschrieben *wäre*, welche diesem Verfasser so eigen sind ; von dieser Seite ist sie vortrefflich, allerliebste. [Lessing : Hamburgische Dramaturgie.]

此のマルモンテル作の話は、ちょっと批評に困る代物である。なるほど、相当よく考えたものであることは事実だ。上流社会、並びにその虚栄、その滑稽なところに関する凡ゆる微妙な知識がよく盛られてはいる。また、流石[さすが]はマルモンテルだと感服させられる程の水際だった手際も充分に見えてはいる。それ等の点では実にすばらしいものであり、秀逸とも称す可きだ。

- [4] Mit diesem Buche beginnt mein Feldzug gegen die Moral. *Nicht dass* es den geringsten Pulvergeruch an sich *hätte* : ---- Man wird ganz andere und viel lieblichere Gerüche an ihm wahrnehmen, gesetzt, dass man einige Feinheit in den Nüstern hat.

[Nietzsche : Ecce homo.]

此の書物が私の対道德戦役の口火が切られた書物である。そう云うとひどく煙硝くさいと思う人があるかも知れないが、別にそんなわけでもない。煙硝以外の、もっとやさしい臭いもしている筈である。但しこの方は多少鼻の利く人でないとわからないかも知れない。

- [5] Ich darf nun wohl hoffen, Signora, dass unsere Bekanntschaft nicht eine ganz einseitige bleibe. *Nicht dass* ich einen so ausführlichen Bericht über Ihre Privatverhältnisse *erwartete*, wie ich Ihnen gegeben. Doch darf ich zum wenigsten um Ihren Namen bitten, und um eine Aufklärung darüber, ob ich Sie Frau oder Fräulein zu nennen habe.

[Heyse : Gute Kameraden.]

お近づきになったのは幸甚ですが、これが単なる一方的なものでないことを望んで已みません。別に私の方から申し上げたような詳しい身の上話をおねがいすると云うわけではございませんが、然しせめてお名前だけでも、そして同時にあなたのことを Frau と申し上げてよいのかそれとも Fräulein と申し上げてよいのか、その辺の消息を一寸伺いたいと思うのです。

以上の如く、とにかく此の意味形態に於いては絶対に第二式を用いる可きではありませんが、例外を求めるならば、それは無い事はありません。日常会話などに於いては、前項の普通の *als ob* の場合と同様に、たとえば直接法でやることもないではありません。

Im übrigen weiß ich nicht, ob man dem Knecht trauen darf. *Nicht, dass er schlecht ist nein, das ist er nicht er ist kein schlechter Mensch.....* aber es ist irgend etwas in ihm, das ich nicht raten kann. [*Frenssen : Die Brüder.*]

〔註〕 これらの項の外になお *weit entfernt, dass* 『決して云々するというわけではなく』、『云々するどころか』 *gesetzt, dass....., angenommen, dass.....* 等多くの形がありますが、あまり長くなるといけないから省いて、高級知識として必要な形態に移ります。また、これらの形態にはすべて *sollte* を用いることができるという話も当然必要なはずですが、以前の項目で既に度々述べましたから、これも割愛します。

〔G〕 *Es fehlt viel daran, dass.....* 等と第二式接続法

最後に、これは別に接続詞の問題ではありませんが、*Nicht, als ob.....* や *Nicht, dass.....* と同様、多少成句的結成をしているものと云う意味で、便宜上此の項目を茲に挿入して置きます。『仮構』の章にはどうしても必要な項目ですから。

『云々どころの騒ぎではない』、『云々と云い得るにはかなりの距離がある』、『云々などとは以ての外』、『云々というには非常な無理がある』の意には、よく *Es fehlt viel, dass.....* 又は *Es fehlt viel daran, dass.....* の形式が用いられ、且つ定形は第二式接続法が常則です。

- [1] *Auch fehlte viel, dass der Erfolg seinen Wünschen entsprochen hätte.*

[*Schiller : Geschichte des 30jährigen Kriegs*]

それに事の首尾にしても、彼が抱いている期待からはかなり遠いものであった。

- [2] *Die österreichischen Prinzen waren zwar katholische Fürsten und noch dazu Stützen des Papsttums ; aber es fehlte viel, dass ihre Länder katholische Länder gewesen wären.*

[*Schiller : Geschichte des 30jährigen Kriegs*]

奥国の諸侯は旧教の信者で、そのみか法王側の藩屏[はんぺい]でもあった。ところが彼等の治めている国そのものは決して旧教信奉国ではなかった。

- [3] *Es fehlt also viel daran, dass die Philosophie dem Begriffe der Wissenschaft so einfach unterstellt werden dürfte, wie es sich wohl, verführt durch äußere Einrichtungen und gewohnheitsmäßige Bezeichnungen, vorstellt.* [*Windelband : Präludien.*]

であるからして、外面的な制度や、因習的な名称に惑わされるとついそう考えたくなるのは無理もない事だが、哲学というものは、そう簡単に謂わゆる科学なる概念に従属せしめてしまうにしてはかなり距離のあるものと思わなければならぬ。

- [4] *Dabei fehlte natürlich viel, dass Hegel der christlichen Religion als Volksreligion bereits gerecht zu werden vermöchte. Er lebt noch ganz in der Begeisterung für das Griechentum und fühlt sich durch die Ärmlichkeit und Unaufrichtigkeit des christlichen Kultus angewidert.*

[*George Lasson : Einleitung zu Hegels Phänomenologie des Geistes.*]

とは云え、ヘーゲルが当時に於いて既に民衆宗教としてのキリスト教の立場を認め得たと考えるにしてはかなりの距離があると思う。当時の彼はまだギリシャ文化に対する感激の真っ只中にあったので、キリスト教の内容の貧弱さと不正直さとに対しては、厭気を催していたのである。

- [5] *Du weißt, geendet hab' ich mein Gedicht ; / Es fehlt noch viel dass es vollendet wäre.*

[*Goethe : Torquato Tasso.*]

御存じの通り、詩は確かに書き上げは致しました、然し完成したと云うにしてはまだ足りないところが少なくはございません。

[備考] (1) Weit gefehlt, dass.....(云々どころの騒ぎでない、云々などとは以ての外) という結成形式もありますが、これとほぼ同様であるから省きます。

----(2) 否定を伴って Es fehlte nicht viel, dass.....或いは Es fehlte nicht viel, und (又は so).....となると、『すんでの事に云々するところであった』、『一つ間違っていたら云々したかも知れない』の意で、これらも第二式を用いますが、前者はこの項とほぼ同じで類推できるでしょうし、後者はもはや約束話法の方へ属せしめた方が自然でしょうから、ここでは便宜上述べない事にします。その他、中間現象に関しては尚多く述べたい注意がありますが、あまり同じような事が沢山続くと煩わしくなるから、類推できそうな場合は凡て省く事にします。

[H] Dass ich wüsste, Dass ich nicht wüsste, Nicht, dass ich wüsste, 等に就いて

Dass ich weiß 或いは Dass ich wüsste は、つまるところ Soviel ich weiß (私の存じている限り、私の知っているところでは) の意で、主として挿入句的に用いられます。否定詞の這入った Nicht, dass ich wüsste, 又は Dass ich nicht wüsste は、『私の存じている限りは、そうでないと思います』の意で、この方は主として独立して用います。

これは、恐らくはフランス語の影響、と云うよりはむしろ直訳であろうと思います。フランス語では、『さあ.....よく存じませんが』とか、『多分そんな事はないと思います』という場合に、よく

Pas que je sache.

Non que je sache.

という句が用いられ、これは文字通りに Nicht, dass ich wüsste に当たっているからです。もっとも sache という形は、形としてはむしろドイツ語の方の第一式接続法(wisse)に相当するものではありませんが、類似した構造であることは一見明瞭です。(仏語の que という接続詞は、ドイツ語の dass に大体該当しますが、その他になお soviel als.....などの als にも相当するものですから、此の場合の que はむしろ als の意でしょう。それがドイツ語に dass と訳されたために、ちょっと文法関係がわからなくなっただけの話です。)

なお時代を遡って見ると、既に古典ラテン語にも此の que je sache にあたる quod sciam というのがあります。たとえば：

Quaerit ex proximo vicino, "Num feriae quaedam piscatorum essent, quod eos nullos videret?" ---- "Nullae, quod sciam, " inquit ille. [Cicero : De officiis. III.]

『すぐ側の隣家の者に、今日は何か漁夫の祭日のようなことでもあって一人も姿を見せないのか、と問うたら、その男が、いや、そんなことはないと思うが、と答えた。』できるだけ文字通りにドイツ語に移して見ると：

Er fragt den nächsten Anwohner : "Ob es heute irgend ein Feiertag der Fischer sei, dass er ihrer keine sehe?" ---- "Keiner, dass ich wüsste," sagte er.

つまり Nullae, quod sciam は、直訳すると Keine, dass ich wisse ですが、そんなのはドイツ語にないから、ドイツ語を尊重すれば Nicht, dass ich wüsste となりましょう。仏語なら文字通り Aucunes que je sache です。

ついでですから、参考のために述べると、和蘭[オランダ]語でも同様の構造が可能です。dat ik weet (dass ich weiß)どころか、更にもっと発展して：

Is hij al weer thuis, dat de dames weten?

(Ist er schon wieder zu Hause, dass die Damen wissen?)

なぞということすらできる。ドイツ語ではこれはもう少し妙で、やはり Wissen die

Damen vielleicht, ob er schon wieder zu Hause ist ? でなければなりませんまい。

Dass ich wüsste の代わりに、直接法で Dass ich weiß ということは出来るようです。
また wissen のみならず、次例のように、同意の erfahren を用いた例なども見えます。

- [1] Es sind auch von der Kirche, *dass ich wüsste*, nie Schritte gegen die Mythenbildung ergriffen worden. [Keyserling : *Das Reisetagebuch eines Philosophen.*]

また、私の知っている限り、協会側から斯うした伝説の発生に対して何等の干渉も行われなかったようである。

- [2] In ihr, (religiöser Bewegung von Adela Curtis), *dass ich wüsste*, werden keine psychologischen Fehler begangen.
[Keyserling : *Das Reisetagebuch eines Philosophen.*]

此の派の人達のやっていることには、私の関知する限り、別に心理上の過誤と云ったようなものはなかったと思う。

- [3] Zu flehen, mein General? So weit ging weder / Mein Auftrag, *dass ich wüsste*, noch mein Eifer. [Schiller : *Wallenstein, Die Piccolomini.*]

嘆願とな？小官の関係する限り、まさか嘆願せよとまで仰せ付かって来たわけでもなし、小官としても亦それほど精出したわけではござらぬ。

- [4] "Saht Ihr nicht auch den Hauptmann Hans von Breitenstein?" unterbrach ihn Georg. "Breitenstein? *dass ich nicht wüsste* ; doch ja, so hieß wohl jener, der den Hammelschlegel auf einen Sitz verzehrte....." [Hauff : *Lichtenstein.*]

『隊長のブライテンシュタインというのをお見掛けなされはせなんだか』とゲオルクは彼の話をつ断した。『ブライテンシュタイン？それは一向存ぜぬ。いや、待った、ひょっとすると、あの、牛の腿肉を一食分で平らげた男が確かそういう名であったかも知れぬて.....』

- [5] "Hast du vielleicht eine unruhige Nacht gehabt?" ---- "*Dass ich nicht wüsste*," entgegnete der Alte frostig, "aber ich will nun gehen und das Abendessen holen."
[Hoffmann : *Das Majorat.*]

『すると昨夜は何かあったのだね』 ---- 『いや、別に.....』と老人は冷ややかに答えた、『では行って御夕飯を持って参りましょう。』

- [6] Nur noch zweimal haben sie so gekräht, *dass ich's weiß*.
[Otto Ludwig : *Die Heiteretei.*]

今まで鶴がこんな啼き方をしたのは、私の知っているところでは二度しかなかったと思う。

- [7] LESBIA : Wird denn ein Mahl gerüstet? ---- HERO : Nein ! *dass ich weiß !*
[Hebbel : *Gyges und sein Ring.*]

レスビア：御宴会の御支度とでもいうのでございましょうか。

---- ヘーロー：いいえ、私は一向何も存じませぬ。

- [8] "Wer nur eine Rübe vom Acker stiehlt, *dass ich's erfahre*, lässt seinen Kopf hier, so wahr ich Moor heiße." [Schiller : *Die Räuber.*]

蕪[かぶ]一本でも畑から盗んだということが俺の耳に這入ったが最後、苟[いや]しくも俺の名がモールである限り、首を申し受けるからそう心得たがよい。

[I] es sei denn, □
es wäre denn, □ dass..... 等に就いて

仮構的延長の最後の項目として、『但し云々云々なる際は此の限りに非ず』、『云々ならばいざ知らず』、『云々云々でも無い限り』、『云々云々ならば格別』、その他兎に角『除外例を設ける場合』に用いられる *es sei denn, dass.....* という言い廻しに就いて詳細な検討を致しましょう。少し厄介な現象ですから、全然此の既成句を御存じないものとして、わかり切った事から説明を起こします。

Er ist nicht der Mann, sich sein Unrecht einzugestehen, es sei denn, dass er durch Tatsachen widerlegt würde.

かれは、事実的反証でも挙がらない限り、決して己が非を認めるような男ではない。

此の例で此の句の用い方はほぼ解るでしょうが、扨て、此の *es sei denn, dass.....* という形式は必ず此の形の儘で用いられるかというに、そうは行かない。*es* は必ずしも *es* でなくて好い、*er, sie, ich, du*, 其の他名詞でも構わない場合がある；*sei* も必ず *sei* とは限らない、*wäre* の事もあり、またその他の動詞を用いる事もある、*denn* も *denn* とは限らない、*nun* の事もあり *denn* の事もある；*dass* も不要なことがある；また最後の定形も必ずしも第二式ではない、第一式のこととあれば直接法のこともある.....そうかと言って、上掲の文の *es* を早速 *ich* に変えても好いかと云うに、おっと待った、そうは行かない.....

詳しい話は後廻しにして、まず此处で直ぐに関係のある事を述べて置きます。此の *es sei denn, dass.....* は、一寸考えると明らかに仮構的延長だから、どうしても第二式接続法を用いなければならない場合の如くに思われます。然し乍ら、此の場合は、既述[E]の *als ob* の場合によく似ていて、必ずしも仮構的延長とは考えられない場合も生じて来る。そもそも仮構的延長というのは、厳密に云えば、約束話法と同じような意味に於ける「非現実的」なものでなければならぬので、其の『趣・旨・由』が露骨に事実反する事を意識しつつ云うのでないと、私が此の仮構的延長という述語を以て定義しつつある意味形態には当て嵌まらない、従って第二式は必ずしも用いないのです。*als ob* の場合もそうでした。『まさか.....!』という意味形態の *als ob* だけは、これは典型的な仮構だから必ず第二式を用いる。然し『恰も.....』という普通の場合の方は、必ずしも仮構とは考えないから、従って必ずしも第二式は用いない。此处も同じです。『但し云々ならば此の限りに非ず』は必ずしも仮構とは考えられない。『但し晴天の場合は』中止というのを *Wenn es regnet.....* と直接法で表現すると同じ意味で *es sei denn* を使うならば、勿論直接法で好い。文法形態は必ず意味形態上の根拠を持っています。

要するに *es sei denn, dass.....* を仮構的延長と考えるか考えないかは『考え方』の問題です。そして此の『考え方』の事を私は意味形態と呼びたいので、何故そんな厄介な事に呼びたいかと云うと、それはたとえば只今の場合の如く、それに依ってしか説明できない多くの事柄があるからです。

そういう訳で、*es sei denn, dass.....* という形のみに関して云うならば、次に挙げる形はすべて可能です：

es sei denn,	┌	<i>dass er durch Tatsachen widerlegt wird.</i>
		<i>dass er durch Tatsachen widerlegt werde.</i>
		<i>dass er durch Tatsachen widerlegt würde.</i>
		<i>dass er durch Tatsachen widerlegt werden sollte.</i>
		<i>er wird durch Tatsachen widerlegt.</i>
		<i>er werde durch Tatsachen widerlegt.</i>
		<i>er würde durch Tatsachen widerlegt.</i>
		<i>er sollte (müsste) durch Tatsachen widerlegt werden.</i>

以上は、間接話法の問題に直接に関係のある *dass.....* 以下の文だけの話ですが、更に前半の *es sei denn* に関して云うならば、この方も次の如き形が用いられます：

es *sei* denn,
es *wäre* denn,
es *müsste* denn *sein*,
es *sei* *nun*,
es *wäre* *nun*,
es *müsste* *nun* *sein*,
es *sei* *denn* *nun*,
es *wäre* *denn* *nun*,
es *müsste* *denn* *nun* *sein*,

dass er durch Tatsachen widerlegt wird.

但し此の前半部は、文法上の見地からいうと間接話法とは直接の関係はないので、むしろ要求話法、約束話法の方に属せしめた方がよろしいのですが、便宜上、あとで詳しく説明します。

以上の諸種の形を適当に反映させるために文例を挙げます：

- [1] Kein Rabbiner darf die Bestätigung einer Ehe *aussprechen*, *es sei denn*, dass die Verlobten von der weltlichen Obrigkeit einen Trauschein haben.

[Hebel : Schatzkästlein.]

猶太[ユダヤ]教僧侶は、婚約者が当局の婚姻許可証を所持するに非ざれば、婚姻認定の申請を行うを得ざるものとす。

- [2] Wahrlich, ich sage euch : *Es sei denn*, dass ihr euch *umkehret*, und werdet wie die Kinder, so werdet ihr nicht ins Himmelreich kommen. [Bibel : Matthäi 18, 3.]

まことに汝等に告ぐ、もし汝ら翻[ひるがえ]りて幼児の如くならずば天国に入るを得じ。

- [3] Wer immer nur zu gehorchen gewöhnt worden ist, wird nicht befehlen können. *Es sei denn*, man *verwechsle*, Befehlen mit Anschnauzen. Ein Irrtum, der hierzulande sehr oft vorkommt.

服従一点張りで仕込まれて来た人間には命令という事は出来ない。もっとも頭っから怒鳴りつける事を以て命令と心得ているとすれば別である。我が国には此の認識不足が非常に多い。

- [4] Ich neige stark zum Glauben, dass dem so ist, vorausgesetzt natürlich, was ich nicht weiß, dass es eine Astralwelt gibt. Aber nie werde ich glauben, *es sei denn*, man *beweise* es mir, dass die, deren wahre Heimat nicht die Erde ist, deswegen die Wertvolleren seien. [Hermann Keyserling : Reisetagebuch eines Philosophen]

私も勿論そうだとは思いたい。と云うのは勿論、これは私には解らない事だが、仮に霊界というものがあるとしてだ。けれども、此の現世に真の故郷を持っていない人々が、其の故に常人よりも偉いという事は、証明でもして貰わないかぎり、私は決して信じないであろう。

- [5] Die Ansicht, dass die Erde rund, ist meinem Vater so verhasst und erscheint ihm als eine solche Ketzerei, dass er mich Dir niemals zur Frau giebt, *es sei denn*, Du trittst in diesem Punkte ihm und den Übrigen im Dorf bei.

[Holberg : Erasmus Montanus. ----Übersetzung Robert Prutz.]

お父さまは、地球が円いという説が非常にお嫌い、危険思想視されていますから、あなたが此の点を一步譲って、お父さまや、其の他村中の人たちの意見に賛成して下さらない限りは、わたくし達の仲を許しては下さらないでしょうよ。

- [6] Im Innern wird er stets Ruhe behalten, solange von außen alles sicher ist, *es sei denn, dass* eine Verschwörung *entstände*.

[Machiavelli : *der Fürst*. ----Übersetzung Richard Schmidt.]

外憂なき限り斯かる君主の国内は依然として安静を保つであろう。但し陰謀でも企てる者があれば別である。

- [7] Weiter / Auch nicht zu sehen verlangt', *es wäre denn, / Dass* er zum zweitenmal es retten *sollte* ---- / Denn genug, es ist ein Mensch..... [Lessing : *Nathan der Weise*.]

また二度と顔を見たいと云わない.....但しまた二度と命を助ける必要でも生じた際は別だ.....というのは、結局は肉も血もある人間だからね.....

[関係文で始まる文]

- [8] Es war bei den Ratsherren von Abdera eine alte hergebrachte Gewohnheit und Sitte, die bei dem Rat verhandelten Materien unmittelbar darauf bei Tasche ---- *es sei nun, dass* sie Gesellschaft *hatten* oder mit Ihrer Familie allein speiseten ---- zu rekapitulieren und zu einer reichen Quelle entweder von witzigen Einfällen und spaßhaften Anmerkungen, oder von patriotischen Stoßseufzern, Klagen, Wünschen, Träumen und dergleichen zu machen. [Wieland : *Die Abderiten*.]

アブデラの長老たちは、会議で一応審議した問題を、それにすぐ引き続いて食事を摂りながら----勿論客があつたり自宅で家族と食事する場合は例外だが、---- なおもう一度蒸し返して検討し、或いは才智を煥発せしめ、或いは諧謔を弄し、或いは国を思うの余り感傷的な嘆声を洩らし、或いは歎き、或いは希望し、或いは空想する等、這般の問題を中心に何時までも意見の交換をすると云うのが古来からの慣例であった。

- [9] Man sieht ihn nie an einem öffentlichen Orte, *es müsste denn sein, dass* etwas Gemeinnütziges zu beraten oder in Gang zu bringen wäre.

[Otto Ludwig : *Zwischen Himmel und Erde*.]

何か公共的な事業に関する相談があるとか、或いは打ち合わせが行われるとか云った様な場合ならば格別、それ以外彼は決して公の席へは顔を出さない。

- [10] (参考用文例：) Und heute kommt die Herrschaft, auf die wir warten, doch wohl nicht mehr ; der letzte Zug ist schon vorüber, *es könnte freilich sein, dass* meine Frau Tochter, die Frau Marchesa, lieber im Wagen *hätte* fahren wollen ; aber es ist doch schon spät, und sie hätte mich's wissen lassen, wenn sie bei Nacht ankommen wollte.

[Heyse : *Die Frau Marchesa*.]

私たちがお待ち申し上げている方々は、今日はもうお見えにならないかも知れませんよ。もう終列車も通ってしまいましたからね。勿論私の娘が、というのは其の侯爵夫人が、一そ車ででも来るつもりとすれば別ですが、それにしてももう大分晩うござんすし、若し夜中に着くつもりなら予めその事を云って来るでしょうからねえ。

最後の *es könnte sein, dass.....* の例は、此の種の語法の発生経過と分解とを説明する為に重要なので登録したものです。

次に、此の語法は必ずしも *dass* 以下が一文を成すことを要しません。なんなら単なる一文肢であっても宜しい。その際には、著しい目印としては、*denn* (又は稀に *nun*) が必ず這入って、同時に接続詞が用いられるという点です。

es sei denn..... と句。

es wäre denn..... と句。

denn は勿論 *nun* でも構わないわけです。上と同じ事で、しかも構造が頗る簡単です

から、直ぐにのみ込めます：

"Schauen" und Rechnen reichen nicht in die Unendlichkeit des Absoluten, *es sei denn* indirekt durch Ideen. [*Jaspers : Psychologie der Weltanschauungen.*]

『直観』と打算は、間接に理念を介してに非ざれば絶対者の無限界に入ること
能わず。

それから、次には *es* ですが、*es* である必要はない。----というのは、*dass.....*以下の内容が其の儘 *es sei denn* の形式で表現されてもいいのです。只今挙げた文例のような簡単な形で、どんな意味のことでも大抵表現されてしまいます。ただその際の目印は *denn* (又は *nun*) で、文章の構造は定形正置、但し定形は接続法になる----これだけが特徴です。ただ、あんまり簡単すぎて、慣れない人には非常に合点しにくいかも知れない。たとえば斯ういう俚諺[りげん]があります：

Niemand sucht den andern hinter dem Ofen, *er habe denn* selbst dahinter gesteckt.
自分も覚えがあればこそ、変なところへ気が廻る。

直訳すると、『自分自身も一度其処に隠れた覚えがあるのでなければ、人を煖炉のうしろに探す奴はない』です。煖炉のうしろに探すというのは勿論、人のあら探しをすることです。*er habe denn selbst dahinter gesteckt* は、前述の形式に従って *es sei denn, er habe selbst dahinter gesteckt* と同じで、形は主文章のようだが、意味形態から云えば全然副文称的なものと云えましょう。*außer er habe selbst dahinter gesteckt* とか、または *angenommen, er habe selbst dahinter gesteckt* などと、*außer* 又は *angenommen* を用いれば *denn* は不要ですが、それらは次に譲ります。

此の形式は最初はなかなか呑み込めないかも知れませんが、実例を二三検べて行けば割合わけはありません：

- [1] Keine Rippe konnt' ich erlangen, *sie wäre denn* gänzlich / Glatt und trocken genagt ;
[*Goethe : Reineke Fuchs.*]

嚙り付こにもしゃぶろにも、あばら骨一つあらばこそ、かんから乾いたテカテカの、しゃぶり粕ならいざ知らず。

- [2] Und nimmer fällt die Burg des Priamus, / *Du sterbest denn*, wie der Seher fordert.
[*Schiller : Iphigenie in Aulis.*]

されば司祭の云う如く爾[なんじ]死するに非ざれば、トロヤの城は落ち難し。

- [3] Mein Vater, ist's nicht möglich, dass dieser Kelch von mir gehe, *ich trinke ihn denn*, so geschehe dein Wille. [*Bibel : Matthäi, 26, 42.*]

わが父よ、この酒杯もし我飲までは過ぎ去りがたくば、御意のままに成し給え。

- [4] Die Nürnberger henken keinen, / *Sie hätten ihn denn vor.* [*Schiller : Die Räuber.*]
ニュルンベルクの奴等とて、居なきや殺そにも殺せまい。

- [5] Fast drehte sich im kaiserlichen Lager / um Heinrich, Heinrichs Worte, Heinrichs Lieder, / um Heinrichs Jäger, Arzt, Roß, Hund und Federspiel / mehr das Gespräch, als um Majestät / des Kaisers selbst, die nie zur Tafel ging, / *Heinrich von Aue schritt ihr denn zur Seite.* [*Gerhart Hauptmann : Der arme Heinrich.*]

皇帝の行在所では、問題の中心は皇帝陛下自身というよりはむしろハインリヒその人で、ハインリヒの言葉、ハインリヒの歌、ハインリヒの狩人、医師、馬、獵犬、鷹のみが色々取り沙汰され、陛下が宴席に御着きになる場合には必ずハインリヒ・フォン・アウエが側に並んでお伴するのであった。

最後の例の *schritt* は、直接法の過去形のように思われますが、*denn* がある以上は *schritt'* のつもりではないかと思われます。少なくともそう解するのが自然です。しかし『凡そ如何なる.....と雖も必ず云々する』という意味の際に、後半に正置法の直接法を用いるという筋路がまた別にありますから、或いはその方のつもりとも解せられない事はありません。けれども *Apostrophe* の欠如のみを以て直ちに直接法と判断するのは早計で、或いは落ちたのではないかという事も考えられます。また、こうした *Apostrophe* は省かれることも多いのですからなおさらです。

それから、次に重要なのは、*müsste* を用いることが出来るという点です。
たとえば：

Nichts ist gefährlicher, als zwei Menschen auszusöhnen ---- man müsste denn der eine selber sein ; sie zu entzweien, ist viel sicherer und leichter. [Jean Paul Richter : Hesperus.]

二人の人間を仲直りさせるほど危険な事はない。但し自分自身がそのうちの一人である場合は別である。二人の人間の仲を割くのはそれに比してずっと安全でもあり、また容易でもある。

これだけではちょっと何の為に *müssen* を使うのか合点が行き兼ねるかも知れませんが、試みに少し別な方面から此の種の *müssen* の用法を研究してみると、わけなく首肯されます。それがまた同時に、前にお預けにして置いた *es sei denn, es wäre denn* 等の構造がどんなところから来ているかという分解的説明の端緒となるのです。

此の *müsste* が、約束話法の意味に於ける第二式接続法であることは、たとえば、よく用いられる *ich müsste mich sehr irren* (余の見る所にして過たずんば)と云ったような種類の用句を検べて行くとわかります。

- [1] *Ich müsste mich sehr irren, wenn ich ihn nicht schon irgendwo gesprochen hätte.*

[Goethe : *Wilhelm Meisters Lehrjahre.*]

私の記憶に間違いがなければ、此の男は確か何処かで一度話したことのある男だ。

- [2] *Ich müsste ein Schurke sein, wenn ich mich könnte bereden lassen, das zu unterschreiben. [Goethe : Götz. IV.]*

苟しくも此のゲッツの眼の黒い間は、たとえ誰が何と申しても、こんなものに署名するなどとは以ての外でござる。

- [3] *Alles müsste mich trügen, wenn Sie nicht der Pater Medardus aus dem Kapuzinerkloster in.....r wären. [E. T. A. Hoffmann : Die Elixire des Teufels.]*

わしの見る眼によもや狂いはあるまい、そなたはてつきり.....なるカプチン派修道院の教父メダルドゥス殿でござろう。

- [4] *und es müsste wahrlich mit dem Bösen zugehen, wenn Ihr nicht so recht durch und durch fröhlich und stark werdet ! [Eichendorff : Marmorbild.]*

悪魔が邪魔でもしたらいざ知らず、そうでない限り必ずあなた様のお気持ちはほがらかになり、元通りのお身体におなりなされましよう。

- [5] *Man müsste Theologe sein, um an eine schuldentilgende Macht zu glauben : wir Immoralisten ziehen es vor, nicht an "Schuld" zu glauben.*

[Nietzsche : *Der Wille zur Macht.*]

神学者ででもなければ滅罪消惡の神徳なんてものは信ぜられまい。われわれ反道徳主義者はむしろ『罪』なるものの実在を信じない方を探るのである。

約束話法とは云いながら、意味形態が本当の約束話法ではないために、上例の[4]に見える如く後半の文に直接法が使われる等の事実が生じて来るのは極く自然です。要するにこれらの *müsste* を用いた文は、文法形態は主文章ですが、その意味形態は既に重心の抜けた『前提』のような感じを与え、上例の邦訳に見るような意味形態になっています。重心はむしろ *wenn* 以下の方へ移ってしまっています。

果たして次の諸例に見るが如く、*wenn* 以下が主文章化し、*müsste* の文は *es sei denn* の文と全然同じようになって行く傾向がある。以て意味形態が文法形態に及ぼす所の威力の程を見る可しです：

- [1] Chevalier, *ich müsste mich sehr betrügen, oder* Ihre Ankunft hat einen frohen Menschen mehr gemacht an diesem Hofe. [Schiller : Don Carlos.]

騎士よ、そなたがお見えなされたそのために、此の宮廷にどうやら幸福な者の数が一人ふえたようではござりませぬか。

- [2] Denn *alles müsste mich trügen, oder* dies ist die verlorene Tochter, die du suchst. [Schiller : Die Braut von Messina.]

我が見る眼にして過たずんば、これぞそなたが求め給う行衛不明の娘御なるべし。

- [3] *Sie ist in Euch vernarrt, oder* ich habe keine Augen im Kopfe. [Heyse : Andrea Delfin.]

あの女はたしかに貴殿に惚れたと見たは僻目[ひがめ]か。

- [4] Denkst du denn, dass dich ein Mädle mag? *Und die müsst' was anders im Gesicht haben, wo die Augen sind.* [O. Ludwig : Aus dem Regen in die Traufe.]

おまえさんみたいな男に娘っこが惚れるとでも思っているの？娘っこの眼が節穴ならいざ知らず。

- [5] Ich habe auch mit Ihnen Mitleid. *Ich müsste ja kein Mensch sein.* [G. Hauptmann : Einsame Menschen.]

あなたに対しては勿論御同情申し上げます。わたくしとても矢張り人間でございますから。

----Es sei denn ; es wäre denn 等の分解説明----

『云々ならば格別』、『云々ででもない限り』という事をどうして *es sei denn* だの *es wäre denn* だのと云うか？分解して考えるとしたら、*sei* とは何か、*wäre* とは何か、また *denn* とは何か、また何が故に主文章形の定形正置の構造を用いるか？これが最後の問題です。

まず *denn* とは何か、と考えて行くと、それが同時に構造を明らかにする事になります。*denn* とは何でしょう？

denn は *dann* です。『然らば』という奴です。その否定に当たるのが *sonst* (『然らずんば』) です。即ち *denn* の *sonst* に対するは恰も *so* の *anders* に対するが如く、*etwas* の *nichts* に対するが如し。

- [備考] *denn* が *dann* の意であることは特に詳しく説明するまでもありますが、もし初耳の人があると不可ないから一寸特に注意を促しておきます。たとえば *So kommen Sie denn !* といえは『然らばござれ』ということです。また、伯林[ベルリン]辺では、『さ、では始めようか』ということ *Na, denn man los!* と云います。(man は mal)。また、『どうしてもと云うわけなら、そうするより仕方があるまい』と云うことを *Wenn schon, denn schon!* といいます。その他

dann と同意に denn を用いる例は、必ずしも伯林地方のみならず、一般に多くの言い廻しとして残っています。

実例で行くのが一番早わかりがするから、たとえば最後にあげた文例の *ich müsste ja kein Mensch sein* (私だとしてまさか人でなしでもありませんから) というのを取って考えて見ましょう。此の文には、前に立っている *Ich habe auch mit Ihnen Mitleid !* との間の関係を示す語が何も這入っていないから、此の *müsste* と云う形式を知らない人には何となく余りに孤立していて前文との間の関係がわからなくなる。もし前文との関係を一語で現わすとしたら当然 *sonst* を入れることになりましょう：

Ich habe auch mit Ihnen Mitleid, ich müsste ja sonst kein Mensch sein.

こうすればわかる。*sonst*(然らずんば)というのは、完全文章にして云えば *wenn ich mit Ihnen kein Mitleid hätte* ということ、即ち約束話法の前提部に相当するものです。

けれども、否定と云い肯定と云い、それらはすべて頭の中で考えることだから、頭の中では考えたいことを考える事が出来る関係上、『然らずんば』という代わりに『然らば』(*denn*)と考えてもいい。『然らば』と云うのは即ち完全に繰りひろげて云えば *wenn ich das Gegenteil täte* (もしその反対をすれば)です。此の意味の『然らば』を *denn* で表現しても文の関係はちっとも変わらない：

Ich habe auch mit Ihnen Mitleid. Ich müsste denn kein Mensch sein.

ja という助勢詞は省きました、つまり *denn* は副詞としての力の殆どない単なる助勢詞にすぎないから、助勢詞が重なると此の場合は口調がわるいからです。

sonst を *denn* に変えると、*es sei denn* のところの最後の文例と全然同じになって来たことに御気付きになるでしょう。

『然らずんば』の方が自然には違いないが、反対の場合を余りに強く考えすぎるといふと、反対の場合そのものを『然らば』(*denn*)と云って指すようになるのは極く自然です。

たとえば、次のような文を考えて見ましょう：

Können nicht zu Ihrem Zweck gelangen, / Sie müssen denn einen Plan disponieren / Und den mit Stetigkeit vollführen. [Goethe : Pater Brey.]

そんな事では目的は達成できません。目的を達成しようと思えばちゃんと計画を定めてそれを一步一步実施しなければ駄目です。

此の場合では、*Können nicht zu Ihrem Zweck gelangen* という風に、出立点が既に否定ですから、その否定をまた否定して『然らずんば』と考えたところで、或いは否定を打ち消す意味に於いて、元の肯定に還して『然らば』と云ったところで、云おうとする事が既に予めわかっているから、結果として受ける感じは結局同じ事になってしまう。---と云ったように、なお色々な変な場合が実際上起こってきます。そうした色々な場合に処して、或いは *sonst* と云い、或いは *denn* と云っていたのが段々と混乱して来て、結局普通よく云われる方の軽い助勢詞 *denn* の方が勝ってしまい、遂には、本当は *sonst* の方が合理的なる可き場合にすらも、一つの既成形式として *denn* が用いられるようになったものらしく思われます。

そんな事は日本語にもあります。たとえば例の有名な『とても』というやくざなモダン語などがそれで、これは *denn* とは逆に、元来は否定詞であったものが、肯定詞になった面白い例です。モダン語の『とても美しい』は、『とても(口では云えないほど)美しい』の省略で、此の『口では云えない』とか『筆舌に尽くし難く』とか『名状すべからざるほど』とかいう、消えてしまったところが説明の際には非常に重要であり、また外国人で日本語をやる人々はそれがわからないと心理的にどうしても納得できないように、ドイツ語の *denn* も何が『然らば』なのか、それがわからないと *es sei denn* の *denn* は納得できない。*es sei denn* の *denn* は、むしろ前文の趣旨とは反対の事実を頭に置き

て「然らば」というのであります。

以上の **denn** を念頭において、こんどは **es sei** の **sei** が何であるかを考えてみましょう。

Niemand weiß, was morgen kommt, er sei denn der liebe Gott selber.

神様ででもない限り、明日の運命は誰にもわからない。

es sei denn.....は勿論『神様ででもない限り』には違いありませんが、分解するというと、**sei** は要求話法としての **sei**(.....であれ!)で、つまり『誰にも明日の運命はわからぬ。わかろうと思うなら(**denn**!)彼自身が神さまであれ!』です。

けれども、これは出立点がそうであったと云うのであって、今ではもうそんな事は考えていない。**außer er wäre der liebe Gott selber** (かれが神その者に非ざる限り)という、もはや主文章としての独立性のない挿入句か副文章のようなものとしてしか感ぜられません。其処がまた構成句の構成句たる所以です。

次に **sei** が **wäre** になると、これは約束話法となります。即ち **müsste** と同じです。**er wäre denn der liebe Gott selber** は、『もしそんな事が出来たとすれば(**denn**!)かれは神その者であろう』という分解になります。

本項の最初にあげた **es sei denn.....**の諸文例に、こうした分解が全部あてはまるというわけではありません。全部当てはまるものならば、何もこんなものをわざわざ特別に一項として扱う必要はなく、それぞれ要求話法乃至約束話法の部で論ずればよろしいのですが、そうではなくて、単に除外例を設けるための、或いは「仮構的延長」を表現するための一形式になってしまったものであり、従って以上のような分解にはならないような場合にまでも押し広げて用いられるものであるが故に、特に意味形態と分解通りの意味との差を説明したものであります。

[J] **außer** 又は **ausgenommen** と第二式接続法

前項の **es sei denn**, と同じことが、**außer** 又は **ausgenommen** で云えます。

außer ausgenommen		1. dass と第二式接続法
		2. dass と直接法
		3. 正置された第二式接続法
		4. 正置された直接法

既に 85 頁で用いた和文独訳の例題に之れを応用すると：

Er ist nicht der Mann, sich sein Unrecht einzugestehen, *außer er würde* (又は *wird*) durch Tatsachen widerlegt.

かれは、事实的反証でも挙がらない限り、決して己が非を認めるような男ではない。

この方式は、**dass** を用いないで、しかも直接法で **außer er wird.....**とやる行き方が一層普通なようです。第二式接続法でやるのがその次に普通で、第一式を用いる例は少々[やや]稀です。

[1] Somit kann der Wert und die Bedeutung der monarchischen Idee nicht in der Person des Monarchen selber liegen, *außer der Himmel entschließt sich*, die Krone einem genialen Helden wie Friedrich dem Großen oder einem weisen Charakter wie Wilhelm I. auf die Schläfen zu drücken. [*Adolf Hitler : Mein Kampf*.]

従って君主政体を理想とする理想の価値並びに意義は、君主の人物其の者に存するわけがない。苟も天がフリードリヒ大王の如き英傑、又はヴィルヘルム一世の如き賢明なる性格の持ち主に王冠を授ける可く決心しない限りはである。

[2] Wäre es nicht so, könnte man die politischen Leistungen unserer gelehrten Regierungsheroen in höchsten Stellen nicht begreifen, *außer man entschlösse sich*,

anstatt pathologischer Veranlagung schukenhafte Niedertracht anzunehmen.

[Adolf Hitler : *Mein Kampf*.]

もしそうでないとしたら、我が国の博識なる要路の高官達の政治的業績は全然吾人の理解し能わざる所である。但し彼等が病的素質を有するに非ずして寧ろ陋劣[ろうれつ]なる不徳義漢なのだとあっさり決めてしまうならば、これはまた話が別だが。

- [3] Nach der Meinung des Sektionschefs Tuzzi war dies freilich ganz und gar ausgeschlossen, *außer es ginge ein Weltuntergang* voran.

[Robert Musil : *Der Mann ohne Eigenschaften*.]

課長ツウツィー氏の見解によると、苟しくも世の終わりでも見舞って来たのちならばいざ知らず、然らざる限り左様な事は絶対にないとの事であった。

- [4] Denn wo großes Gut ist, da sind auch viele, die es essen, und was für Nutzen hat der Besitzer davon, *außer dass* er es mit seinen Augen *anschaut*?

[*Familienbibel : Prediger 5, 10.*]

何故となれば、大いなる富ある所には亦多くの之れを啖[くら]う者あり、然らずんば之れを持てる者之れを眼をもて眺むるの外何の益をか蒙るべき。

- [5] "Du könntest getrost noch ein wenig schlafen, denn auf dem flachen Lande unter uns ist nicht viel zu sehen. *Ausgenommen, du hättest Lust, die Kirchen zu zählen.*

[Andersen, *Der Garten des Paradieses*]

『おまえさん、まだ少しばかりゆっくり寝ていた方が好いよ、わたしたちのように平野に住んでいるもの達のところには、大して見るものも無いからね。教会の数でも算えたければ別だが。』